

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第154集

朝日遺跡 VIII

総集編

2009

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター



弥生神 2003「弥生神との出会い」『歴史の風景』愛知県陶磁資料館より

あさひ
朝日遺跡Ⅷ 総集編 2009

例言

- 1 本書は、愛知県清須市・名古屋市西区・西春日井郡春日町に広がる弥生時代集落遺跡である、「朝日遺跡Ⅷ」発掘調査報告書の総集編として編集したものである。なお、今回報告する発掘調査の事業内容と経緯等については「本文編」例言を参照。
- 2 本総集編は、「本文編」を基本にして愛知県埋蔵文化財センターが実施し、既刊朝日遺跡報告書に基づき公表されているデータをあらためて編集し、調査研究成果を取りまとめたものである。
- 3 本書の文責は目次に記し、編集は赤塚次郎が行った。

目次

1. 調査の概要	(赤塚次郎)	4
1.1 調査の経緯		
1.2 道跡の概要		
1.3 調査の概要		
1.4 歴史的環境		
2. 遺跡の調査	(赤塚次郎)	26
2.1 標準層序		
2.2 第1ステージ(縄文後期)		
2.3 第2ステージ(弥生前期)		
2.4 第3ステージ(弥生中期)		
2.5 第4ステージ(弥生中期後葉)		
2.6 第5ステージ(弥生後期)		
2.7 第6ステージ(弥生終末・古墳前期)		
2.8 第7ステージ(古墳前期)		
3. 編年表		52
3.1 弥生前期	(永井宏幸)	
3.2 弥生中期		
3.3 弥生後期	(早野浩二)	
3.4 古墳時代		
4. 特殊遺構・遺物 朝日道跡を特色づけるモノ		68
4.1 金属製品	(赤塚次郎)	
4.2 ガラス小玉と顔料	(堀本真美子)	
4.3 筒形・鳥形土器	(赤塚次郎)	
4.4 特殊土器・土製品、絵画・線刻文土器	(早野浩二)	
4.5 円窓付土器	(永井宏幸)	
4.6 台盤状土製品	(永井宏幸)	
4.7 固定釘・ヤス	(川添和暁)	
4.8 骨角製装身具類 1	(川添和暁)	
4.9 骨角製装身具類 2	(川添和暁)	
4.10 木製容器	(植上 昇)	
4.11 方形周溝墓	(赤塚次郎)	
5. 科学分析総論		116
5.1 朝日道跡科学分析総論	(鬼頭 剛)	
5.2 昆虫化石からみた朝日道跡の変遷	(奥野絵美・森 勇一)	
6. 暦年代 朝日道跡の放射性炭素年代について		134
6.1 朝日道跡標準層序の暦年代	(赤塚次郎)	
6.2 朝日道跡出土土器に付着した炭化物の年代学的調査	(藤尾慎一郎・尾崎大真)	
7. 総括	(赤塚次郎)	149
7.1 朝日道跡としての集落景観の変遷		
7.2 洪水 T-SA 層		
7.3 朝日道跡の墳丘墓		
図版 朝日道跡の風景 2008		155

■ 1.1 調査の経緯

愛知県清須市・名古屋市西区・西春日井郡春日町を中心として広がる朝日遺跡は、弥生時代において県下最大規模の遺跡である。現在の標高は2～3mで沖積低地に立地する。遺跡本来は伊勢湾に面した砂堆上に位置していたものと推測されており、遺跡周囲には旧河道や窪地・沼沢地を含めてかなり複雑な環境下にあったものと推定できる。現在想定されている遺跡の範囲は、清須市を中心にして東西約1.4km以上、南北約0.8kmで、面積は100万平米を越える大規模集落遺跡と考えられている。集落域は北と南に区分される環濠集落を中心として、その周辺部に方形周溝墓が大きく展開する墓域が存在する。

調査は国道22号線と東名阪高速道路が交差する清洲ジャンクション周辺部で実施し、関連調査を含めて平成11年度から平成19年度まで継続した。その内の平成15年度までの調査成果については、すでに愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集『朝日遺跡Ⅶ』¹⁾として公開済みであり、本報告ではその後に実施した平成16年度から19年度までの調査成果を中心に整理・報告する。ただ『朝日遺跡Ⅶ』における成果内容と密接に係わる部分が多いため、必要に応じてその成果を踏まえて記載することにした。

調査の経緯は、近畿自動車名古屋関線清洲JCT・名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線建設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局愛知国道工事事務所・中日本高速道路株式会社名古屋工事事務所・名古屋高速道路公社から愛知県教育委員会を通じての委託を受けて実施した。具体的な発掘調査は、幹線道路と各種工事ヤードとの調整が不可欠な場所であるため、国土交通省愛知国道工事事務所春日井出張所にて関係者を含めた定期調整会議を踏まえて実施することとし、安全対策を最優先させ、必要最低限の調査範囲と掘削方法の検討を経て具体的に進行することになった。調査箇所については右図で示したように不定形な調査区と不規則な配置になっており、発掘作業上の制約が大きくより効果的に調査を進行させるために、土木作業での専門的な知識を有する有資格者と最新のデジタル技術を導入して、限られた時間内でより高密度で質の高い調査を志向することにした。

各年度の調査区は、平成16年度が1497㎡を対象に6調査区、平成17年度が2995㎡を対象に14調査区、平成18年度が767㎡を対象に6調査区、平成19年度は348㎡を対象に4調査区を設定して調査を実施した。

朝日遺跡概要

調査経緯

¹⁾ 藤山誠一編 2007『朝日遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集

さて、朝日遺跡のこれまでの調査略歴について整理しておきたい。

大規模調査としては、まず名古屋環状2号線建設に伴う事前調査として、昭和47年(1972)から昭和54年(1979)にかけて愛知県教育委員会が主体となり調査が実施された。その成果については昭和57年(1982)に報告書が刊行されている¹⁾。その後、昭和56(1981)年から平成元年(1989)にかけて愛知県埋蔵文化財センターにより発掘調査が受け継がれ、平成3年(1991)からその成果が継続的にまとめられた²⁾。また平成7年(1995)から8年(1996)にかけて愛知県清洲貝殻山貝塚新資料館建設に伴い調査が実施され、平成12年(2000)に報告書が刊行されている³⁾。1980年代の初めまでの朝日遺跡は、各地点単位の比較的小規模な範囲での遺跡の集合を念頭に評価されていたが、発掘調査の成果を踏まえて「朝日遺跡」1982の段階において再評価され、朝日遺跡群から朝日遺跡へと大きく遺跡全体の評価が変化し、東日本を代表する巨大な集落遺跡という、今日的な朝日遺跡の位置づけがほぼ決定することとなった。

*1 加藤安信編 1982『朝日遺跡』愛知県教育委員会

*2 石黒立人編 1991『朝日遺跡I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30～35集

*3 石黒立人編 1992『朝日遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集
宮藤健司編 1992『朝日遺跡III』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集
石黒立人編 1993『朝日遺跡IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第33集
宮藤健司編 1994『朝日遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集

*3 宮藤健司編 2000『朝日遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第63集

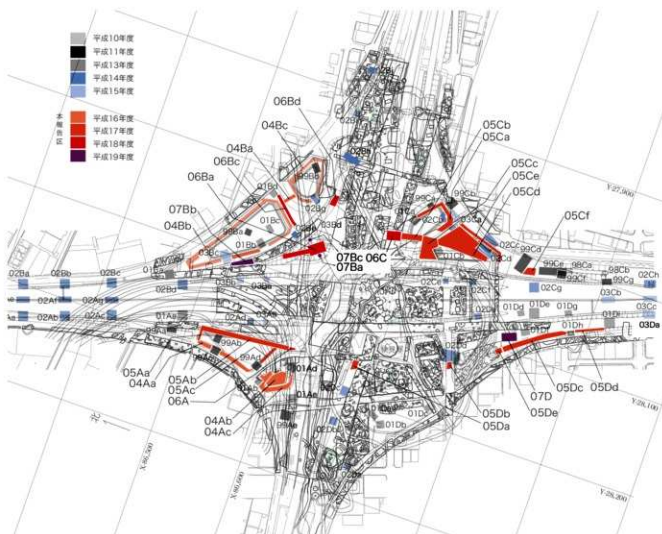


図1.1 朝日遺跡調査区配置図 1/4000

■ 1.2 遺跡の概要

朝日遺跡の開闢期

弥生前期には東西約250m
南北150mほどの楕円形を
呈する環濠集落

朝日遺跡は、おおむね縄文時代後期前後から人々の足跡が数地点にわたり認められるが、まとまった集落域の存在は確認されていない。その後の弥生時代前期になると、遺跡の南西地区に環濠集落が出現する。現在の貝殻山貝塚地点を中心にしてまとまりが見られ、東西約250m南北150mほどの楕円形を呈する環濠集落が想定されている。発掘調査がほとんど実施されていないためその実態は不明瞭である。また、西墓域にも遺物の分布が見られ、前期の集落遺跡の存在が推測されている。ただここでは環濠の存在は確認されていない。

弥生時代中期

東南約1.4km、
南北約0.8kmの
巨大な集落遺跡

弥生時代中期になると集落は一気に北東に拡大し、東西約1.4km、南北約0.8kmの巨大な集落遺跡に変貌していく。この段階において朝日遺跡は二つの大きな区画をもつ特異な集落景観を誕生させることになる。すなわち弥生時代前期の集落域を取り込んで、そのまま北東に大きく拡大した南区画が出現した。東西600mから700mの大きさが想定できる。そしてその北側には約250mの北区画が存在し、多重環濠で囲繞された特異な空間を造りだしている。

朝日遺跡のほぼ中央部には、北東から南西方向に谷Aと呼んでいる幅30mほどの旧河道（埋積浅谷）が存在し、この窪地状の谷Aを挟んで北区画と南区画が併存する状況が見られる。加えてその周囲には東西南北に広範囲に墓域が展開する状況が読み取れる。以上のように朝日遺跡を概観すれば、谷Aを挟んで二つの集落域と想定されている区画とそれを取り囲むように展開する墓域群で構成された巨大集落遺跡ということになる。

弥生時代後期

弥生時代後期になると、集落の景観が大きく変化して、南区画が東西230m南北150mのほぼ二重の環濠集落に規模を縮小させる。ただ南区画の西側の情報がほとんど存在しないために不明瞭であるが、複数の集落域に分化していく可能性も考えられる。一方で北区画はやや規模を縮小させる傾向が見られるが、大きな変化は見られない。ただ中期に掘削された多重環濠は景観として残存し、多様な用途に活用されて機能していくようである。朝日遺跡の集落としての終焉時期は、出土した土器から見る限り遅くとも山中Ⅱ式期の中で考えていくことができる。

南北二つの区画域周辺に展開する墓域には、弥生時代中期から後期にかけて方形周溝墓が数多く造営されていく。特に注目されるのは谷Aと谷Bに挟まれた東墓域であり、この地区だけに巨大な長方形周溝墓が展開し、朝日遺跡の中心的な指導者層の特定墓域として位置づけられていたことが推測されている。最大規模はS2208で東西33.5mを測り、中期中葉に所属する。全墓域内で現在までに確認されている方形周溝墓数はおおむね476基を超えている。なお巨大な方形周溝墓の造営は東墓域内に限定でき、時期は中期前半期を中心とし、中期末葉には墓域内では見られなくなる。

方形周溝墓

476基（関係棟の調査）

朝日遺跡での時期区分については、以下のように整理する。

前期：貝殻山式から西志賀式（朝日Ⅰ期 - 様相 1）

中期：朝日式から貝田町式（朝日Ⅱ・Ⅲ - 様相 2.3.4・Ⅳ・Ⅴ期 - 様相 5～9）

中期後葉：貝田町式 3 期新から高蔵式（朝日Ⅵ - 様相 10.11.12）

後期：八王子古宮式から山中式（朝日Ⅶ期 - 様相 13・Ⅷ期 - 様相 14.15.16）

終末期（古墳早期）：廻間Ⅰ・Ⅱ式（朝日Ⅸ期 - 様相 17.18.19・Ⅹ期 - 様相 20）

- 弥生時代前期
- 弥生時代中期
- 弥生時代中期後葉
- 弥生時代後期～

・朝日 1994（P209-213）を基本として区分

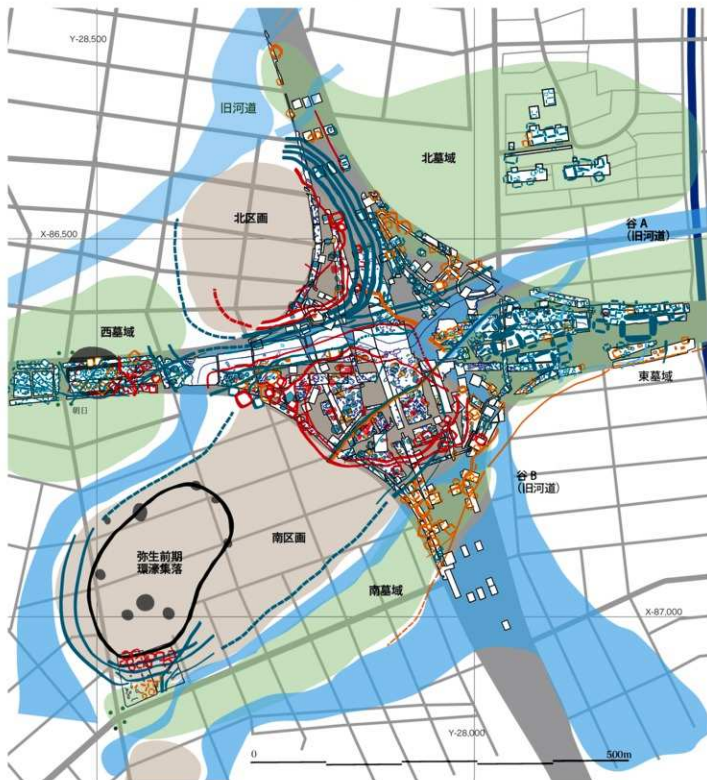


図 1.2 朝日遺跡主要遺構配置図 1/5000

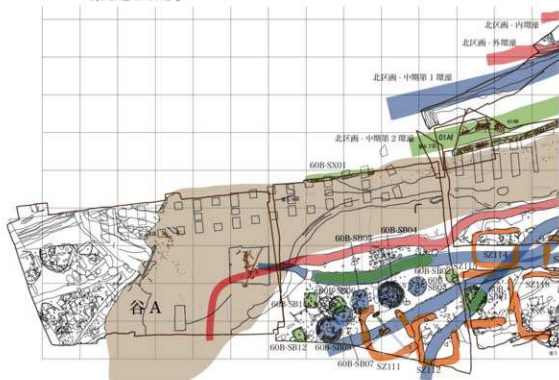
■ 1.3 調査の概要

調査は工事ヤードを基に設定されたもので、不定形かつ不規則な配置の調査区が基本になる。そこで、平成11年度から現在の道路軸を基本にして、東名阪道路と国道22号線の交差を軸に北西をA区、北東をB区、南東をC区、南西をD区と四つに大きく区分して調査区を呼称することにした。

1.3.1 A区(北西区)

朝日遺跡の中央部に存在する窪地状の景観である谷Aを挟んでその北西側の地区では、主に朝日遺跡北区画とそれに付随する施設である多重環濠帯に代表される地区である。平成16と平成17・18年度において比較的広範囲に調査区を設定でき、従来あまり情報量がなく不明瞭であった北区画南東隅の状況が明らかになった。まず04Ab・05Ab.c区では多重環濠帯にいくつかの段階で出入り口状の施設が存在した可能性が指摘できる。さらに05Ab区では弥生後期段階で内環濠内に区画溝が存在し、その入口付近に多量の土器廃棄が見られ、何らかの祭祀場が想定できる。また弥生中期前葉である朝日式期には、多量の貝廃棄(貝塚)が数ヶ所にわたって存在し、その周辺には大型の円形住居が伴うことが明らかとなった。

北区画をめぐる環濠は基本的に朝日式期の段階に設定され、中期に数度の溝整備が進み多重環濠帯へと変貌するが、中期後葉段階でその機能が消失したものと判断した。特に、中期後葉段階である高蔵式期末葉に朝日遺跡を襲った洪水性の堆積層は本遺跡の集落景観を考える上で大変重要な要素と思われる。



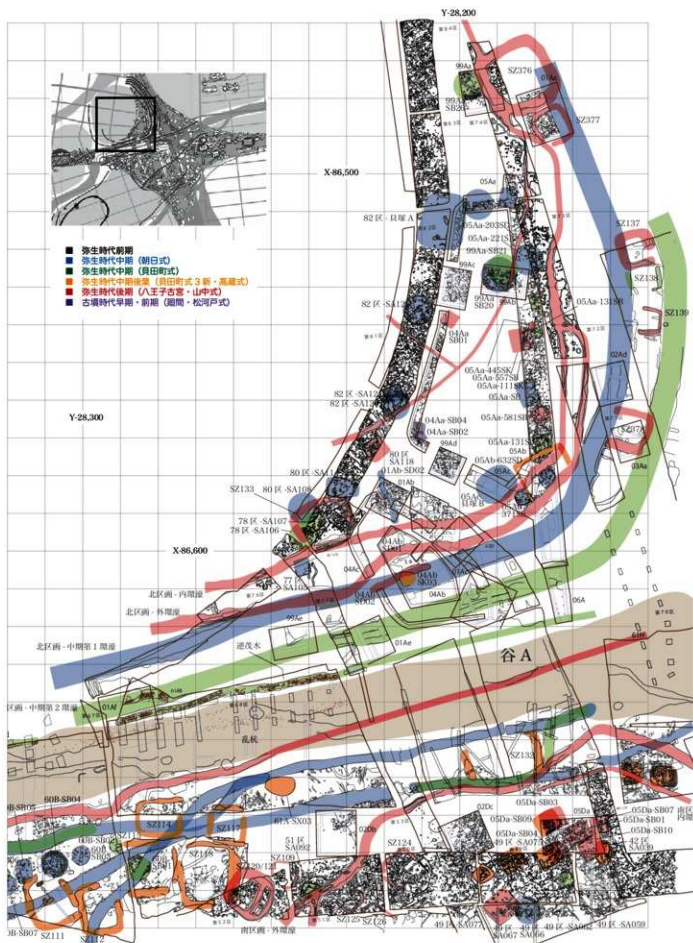
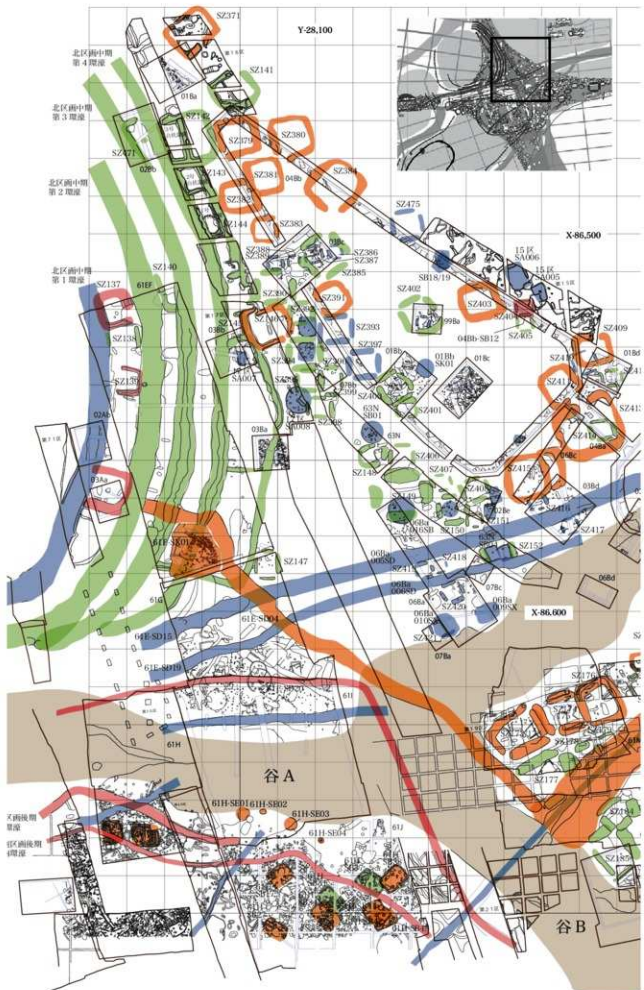


図 1.3-1 朝日遺跡北西区 A 区周辺の遺構配置 1/1000 5m方眼



1.3.2 B区（北東区）

谷Aの北側で北区画を取り巻く環濠帯を含めて、その東側に展開する遺構群。大きく見れば北墓域に所属する地区である。この地区も従来最も情報が少ない地区であったが、今回の発掘調査により具体的な遺構の展開が推測できるようになった。B区全体の堆積環境は比較的緩やかで、人為的な改変も少ない。堆積する地層状況は粘質が強く、シルト・砂層の混入は極少で比較的安定している。

北墓域としての展開は朝日式期からはじまり、貝田町式・高蔵式期段階を中心としてほぼ終焉する。ただ注目したいのが、墓域以前に集落としての活用が見られる点である。朝日式期の段階にほぼ限定して竪穴建物・土坑群がやや散在的に存在する。

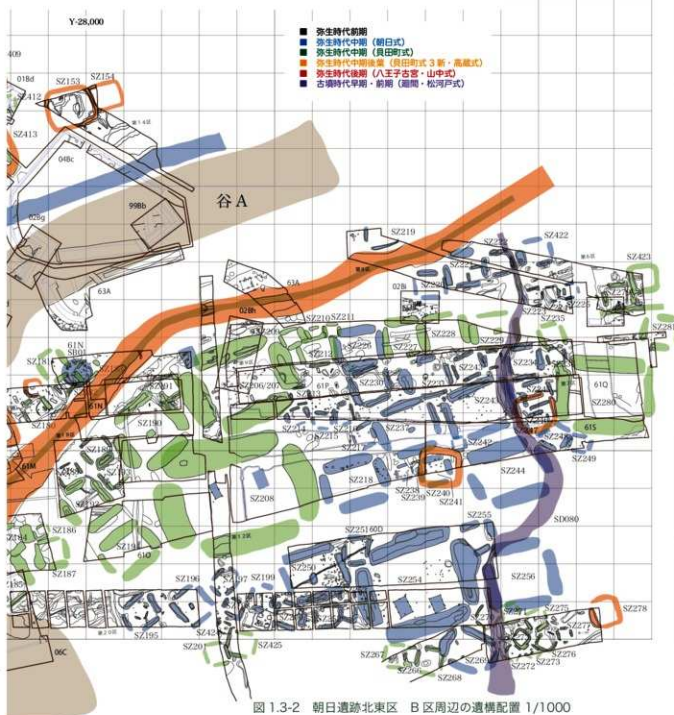
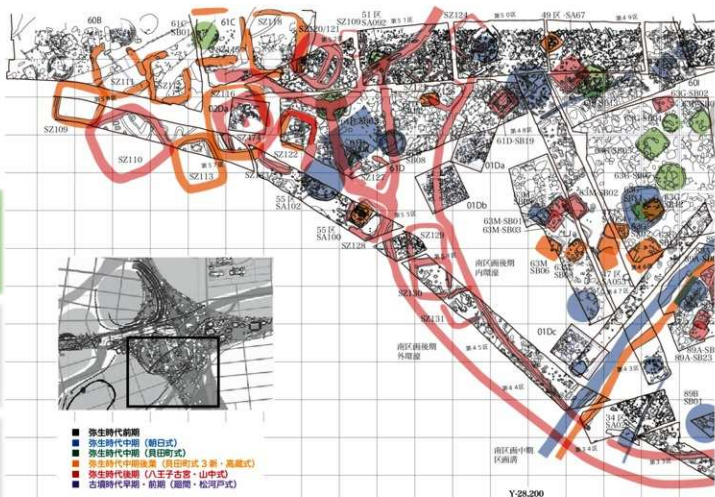


図 1.3-2 朝日遺跡北東区 B区周辺の遺構配置 1/1000



1.3.3 C区（南東区）

東墓域を中心として、谷Bが南流しその右岸部には南区画の東端部が位置する。ほとんどの調査区では、中期を中心とした方形周溝墓が展開する。なお谷B右岸周辺部で古墳時代前期に所属する竪穴建物散在するようであり、廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式期を中心とした小規模な集落景観が想定できる。

1.3.4 D区（南西区）

谷Aと谷Bに囲まれた南区画を中心とした調査区で、朝日遺跡では最も情報量が多い場所である。南区画が弥生後期になると急速にその規模を縮小させ、あらたに山中Ⅰ式期に設定された二重の環濠が掘削される。その全体像をほぼ復元することができ、重複して中期の遺構が展開する。なお南区画の南側には南墓域が細長く東西に展開していくものと想定できる。集落の南限付近には複数の溝状遺構が設定されており、その以南には明確な遺構が存在しない。現状の調査成果を踏まえると、この南側の領域に広大な水田域を想定することは難しいものと思われる。



図 1.3-3 朝日遺跡南区 C・D区周辺の遺構配置 1/1000

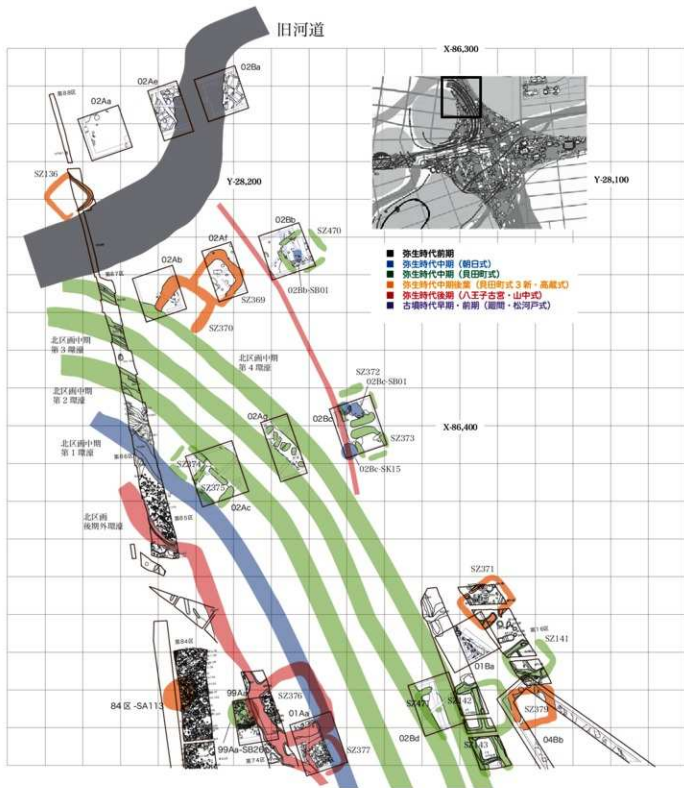


図 1.3-4 朝日遺跡北部域周辺の遺構配置 1/1000

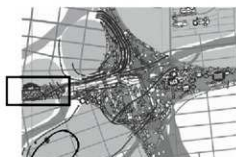
1.3.5 朝日遺跡北部域について

朝日遺跡北区画の北方域については、調査事例が少なく情報は極めて乏しい。上図に示したような小規模な調査区と断片的な遺構配置が推測できるが、平成 14 年度を中心とした調査成果からは北区画を巡る多重環濠帯の状況が明らかになっている。環濠は 02Ab 区を境にして大きく西側に湾曲しながら北区画を巡る状況が確認でき、そのことから北区画の南北の規模がほぼ 270m と推測できる。そしてそこには北東から南西にかけて旧

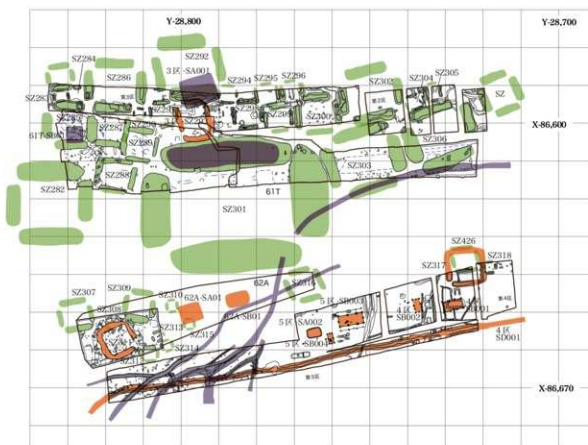


図 1.3-5 朝日遺跡谷 B 周辺の遺構配置 1/1000

河道が存在し、以北には中期後葉の方形周溝墓群がわずかに展開するのみとなり、遺構の展開は極めて限られることになる。ちなみに旧河道周辺部において小規模な水田遺構と推測される堆積層が確認されているが、所属時期が明確に判明しているものではなく、現状では古墳時代以降に水田耕作地としてあらためて利用されていくものと思われる。



- 弥生時代前期
- 弥生時代中期 (新日式)
- 弥生時代中期 (貝田町式)
- 弥生時代中期後葉 (新3期・高塚式)
- 弥生時代後期 (八王子古宮・山中式)
- 古墳時代早期・前期 (間間・松河戸式)



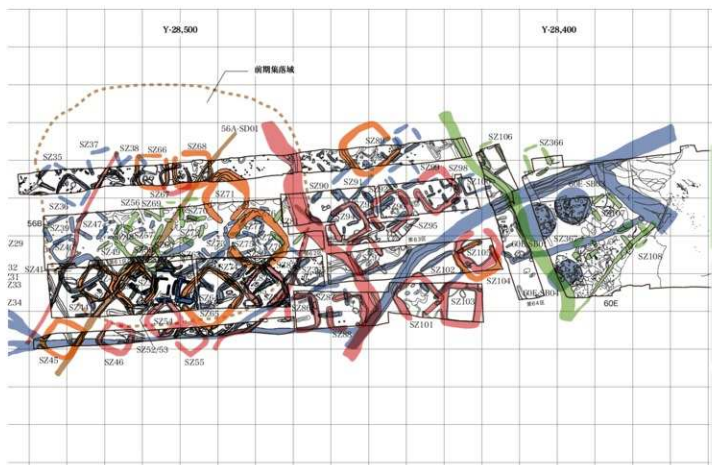


図 1.3-6 朝日遺跡西基域周辺の遺構配置 1/1000

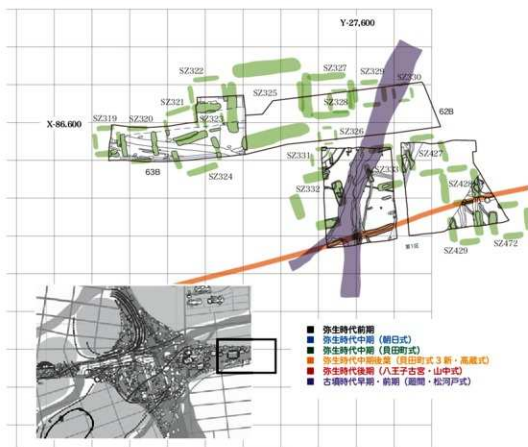


図 1.3-7 朝日遺跡東基域周辺の遺構配置 1/1000

1 調査の概要

2 遺跡の調査

3 編年表

4 特殊遺跡・遺物

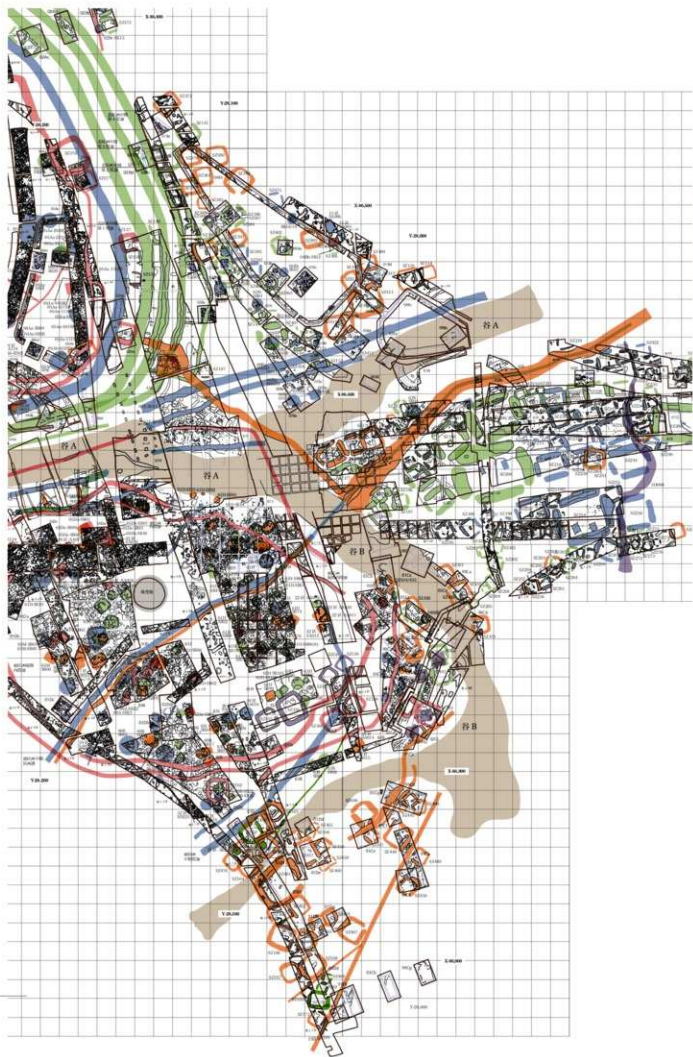
5 地方の歴史

6 時代別

7 総括



図 1.3-8 朝日遺跡主要遺構配置図 1/2000



1.3.6 谷A

朝日遺跡のほぼ中央部に存在する東西方向の旧河道。北東から南西に向かい、西墓域を南に迂回するかたちで朝日遺跡弥生前期環濠集落西辺を南流する。その形成は埋積浅谷上部の堆積層に基づき、幅約30m～50mを測る。朝日遺跡環濠集落形成期である朝日式期においては、谷底が標高零メートル付近となり、居住域との比高差は約2mほどの窪地状の地形をなしていたものと想定できる。なお弥生期の谷底以下マイナス0.6m付近では縄文後期の泥炭層が確認されており、マイナス1.8mでいわゆる「上部砂層」に到達する。弥生期の谷Aは地点により複雑な堆積層と遺構が錯綜し、多様な機能が見られる。特に北区画から北墓域の南西隅にかけての右岸付近には、弥生中期の貝層が大量に、かつ広範囲に堆積する。谷Aには中期後葉T-SA層を除くと恒常的な流水の痕跡は見られず、単発的な砂層の堆積と止水域による粘質土の堆積が広く見られる。

古墳時代中期以降には比較的安定した止水域が出現し、中世に至るまで窪地状の景観が存在したと思われる。

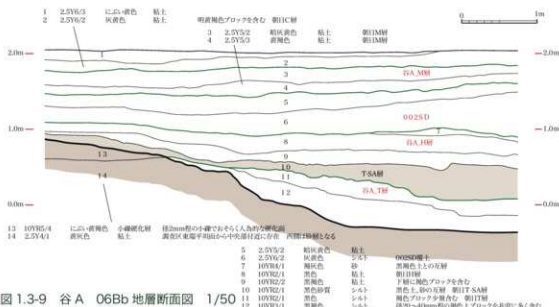


図 1.3-9 谷A O6Bb 地層断面図 1/50



図 1.3-10 谷A O6Bb 地層堆積写真

1.3.7 谷B

北墓城南西隅で谷Aから分岐する形で、東墓域と南区画の間を南流し、遺跡の南端部に複雑に拡張する旧河道。溝幅は約20mほどで谷底は標高零メートル付近。弥生期の墓域・居住域との比高差は約2mほどの窪地状の地形を呈していたものと思われる。ただ谷Aとは異なり、標高0.5m付近に至るも弥生期の堆積層は薄く、その上位は古墳時代前期以降の止水域による粘質土の堆積が認められる。したがって現状では谷Bの形成は、浅い谷状の地形を利用した可能性は残すものの、おおむね後期初頭段階での人工的な掘削により、水路としての機能をもたせたものであると評価したい。

その時期は、05Cb・06Cの調査成果から高蔵式期を遡ることはなく、山中式期の前半を降る時期ではないと思われる。なお、谷底には多量の土器片を含む砂層の堆積が見られ、強い流水の存在が想定でき、朝日遺跡の南端で大きく拡散するような広がりが見られる。

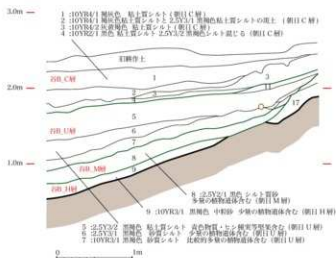


図 1.3-11 谷B 05Ca 地層断面図 1/50



図 1.3-12 谷B 06C 区北地層堆積写真

1.4 歴史的環境

地理的環境

朝日遺跡が所在する愛知県清須市朝日地区周辺の地理的な環境を概観しておきたい。現在の標高はおおむね2～3mを測り、ほぼ平坦な地形が広がり、つい最近までは名古屋市北部の水田地域として活用されてきた。しかし近年は、名古屋環状2号線・東名阪自動車道や名古屋市と岐阜市を結ぶ大動脈である国道22号線が交差し、まさに交通の要所として工場地帯へと急速に変貌しつつある。遺跡の西側には五条川が南流し、その自然堤防と後背湿地が展開する地域であるが、基本的には中世以後に旧河道が複雑に錯綜し、その自然堤防によって形成された微高地上に集落が営まれており、周辺の低地部は水田を中心とした耕作地に利用されるような典型的な沖積低地環境にある。

古環境

次に遺跡が立地する微高地について、調査成果を基にした古環境を整理しておきたい。現在までに二つの重要な視点が提示されている^{*)}。まず一つは、谷Aに代表される埋積浅谷についてである。その形成が縄文中期の小海退を基本に、縄文晩期～弥生前期の弥生の小海退を経て形成されたものであり、当該期には気候の寒冷化が引き金になっている点が指摘されている。谷Aの谷底面に堆積した黒灰シルト層上面から、縄文後期の土器とビットが確認されており、その傍証とされている。この二つの小海退

*) 森勇一1992「朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境」『朝日遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第31集

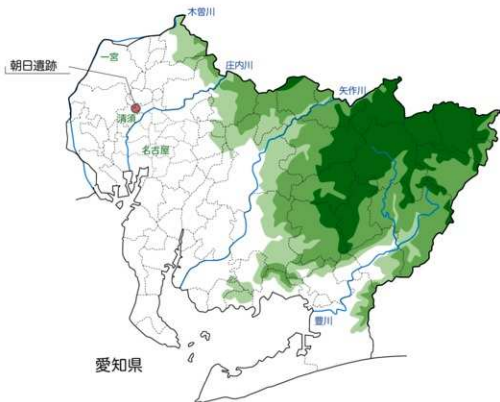


図 1.4-1 朝日遺跡位置図

の間には、縄文晩期の再海進が想定されている。その海水面が標高 1.5m 地点にあったものと結論づけられている。こうした縄文後・晩期の気候変動を経て、弥生の小海退を契機にして朝日遺跡では本格的な集落景観が整えられていったものと推測される。

今一つの視点は、朝日遺跡の居住域が展開する微高地の問題である。この微高地（黄色シルトや砂層により形成された基盤層）は、現在の五条川等の流路と直交する軸線をもち、海浜砂の粒度組成をもつ点などから縄文中期前半を中心とした縄文海進高潮期以降の汀線に形成された海浜性浜堤列と想定されている。朝日遺跡を取り巻く尾張低地部での浜堤列は大きく二つ存在すると想定されており、朝日遺跡は海岸線から数えて二つ目の第二浜堤列上に立地し、その東端部に位置するものと考えられてきた。したがって朝日遺跡以南では、第一浜堤列東端から名古屋台地部にかけて比較的遠浅の湿地帯ならびに潟状の景観が広がっていたものと思われる。ただし砂堆の成因については異なる見解もあり、基盤層の研究の進展をまちたい^{*1}。いずれにしてもこうした景観に、現在の庄内川をはじめ五条川や大山川、さらには矢田川などの旧流路群が流れ込み、肥沃なデルタ地帯を形成していたものと考えられる。

以上のように朝日遺跡は森勇一のことばをかりると、「朝日遺跡は縄文中期の頃に形成された浅谷地形と、それをわずかに遡る一時期に作られた微高地（浜堤）上に立地した」ことになる。

*1 鬼頭 剛 2007 「朝日遺跡における堆積および地形環境」、「朝日遺跡VI」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 138 集



図 1.4-2 朝日遺跡と周辺の地形復原

(国土地理院数値地図 5m メッシュ「濃尾平野」を利用。青色は海拔 2m 未満、緑色は 5m、褐色は 10m を表示)

歴史的景観

朝日遺跡が立地する標高2～3m地域の現在までの歴史的景観を概観し、整理しておくことにしたい。まず縄文の再海進期である縄文後期段階では朝日遺跡がおおむね汀線に立地するため、以南の遺跡分布は確認されていない。縄文晩期から弥生前期の小海退に伴い、本格的な集落景観が各地に見られるようになる。朝日遺跡から南東へ約5kmには名古屋市西区西志賀遺跡が存在し、東へ4km地点には名古屋市北区月繩手遺跡が、また朝日遺跡が立地する第二浜堤列上(砂堆)に立地するとされる稲沢市大塚遺跡が北西へ5kmの地点に存在する。

弥生中期

弥生中期になるとさらに集落遺跡が増大し、朝日遺跡から半径2km圏内には甚目寺町阿弥陀寺遺跡・森南遺跡、清須市松の木遺跡などの存在が見られる。そして弥生終末期(古墳早期)廻間様式期になると、こうした弥生中期以来の集落遺跡が大きく変貌あるいは消滅し、比較的小規模ではあるが、新たな集落遺跡が展開していく様子が確認できる。朝日遺跡においても例外ではなく、弥生後期中頃をもって集落の解体がはじまっている。その典型的な遺跡が清須市の廻間遺跡である。廻間I式期から住居が営まれ、集落内の墓域には最も初源のな前方後方型墳丘墓が見えられている。近接した土田遺跡とともに2世紀から3世紀の小集落が展開していく様子がうかがえる。このような景観は、朝日遺跡から北東約3kmの北名古屋市弥勒寺遺跡などでも認められる。おおむね標高5mコンターラインに遺跡の分布が想定できるようである。

古墳時代

古墳時代になると、朝日遺跡周辺部には安定した止水域が広がり、沼沢地とわずかに点在する微高地上に竪穴建物が点在する田園風景が続く。そしてやがて古墳時代中期後半から後期にかけて小規模ながら古墳が造営されていく。朝日遺跡内に点在する「検見塚」「貝殻山」などはそうした小規模な古墳の可能性が高い。さらに朝日遺跡の西北に存在する稲荷神社が鎮座する高まりが、前方後方墳の可能性が指摘されている。なお西5kmの美和町二つ寺神明社古墳は古墳時代前期に所属する70mクラスの大型前方後円墳と考えられている。

律令期

律令期においても朝日遺跡周辺は大きな変化は見られず、変わって朝日遺跡から南西へ4kmほどの甚目寺町には甚目寺、清林寺などの古代寺院が濫立し、上街道・甚目寺街道沿いに奈良・平安時代を通じて人・物流の流れが認められる。五条川と伊勢湾が出会う港街、古東海道の萱津宿・萱津の渡しはこうした物流の拠点として栄えることになる。

中近世

中世から近世になると、鎌倉街道そしてその後の美濃街道へと変貌し、萱津から五条川沿いに北上し、稲沢市域の国衙や下津へと物流の流れが変わっていく。朝日遺跡に近接した朝日西遺跡では11世紀から13世紀にかけての集落遺跡が存在し、徐々にであるが地域再開発が進められていく。やがて15世紀後葉に尾張守護所が清須に移り、当地域の中心的地域として、清須城を中心として再び大変革期を迎えることになる。朝日遺跡消失から約1300年の時を経て。

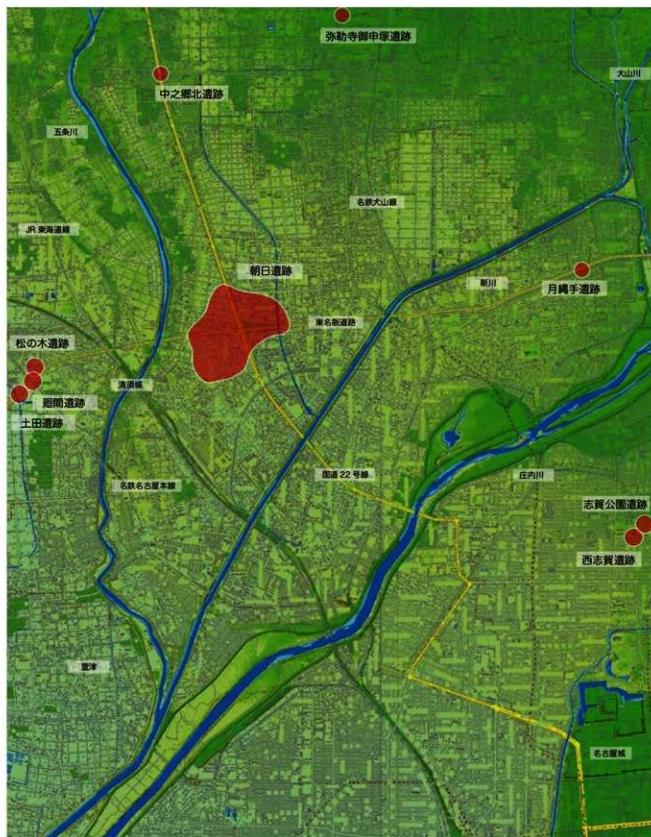


図 1.4-3 朝日遺跡周辺の遺跡 1/33000
 (国土地理院数値地図 5m メッシュ「濃尾平野」を利用)

2

遺跡の調査

2.1 標準層序

今回の朝日遺跡の発掘調査においては、事前に朝日遺跡としての標準層序を設定し、各調査区単位での層序区分の基本概念とし統一することとした。これにより、個々調査区単位で位置づけていた層序基準と層序名の不統一を解消し、同時に不規則で小規模な調査区間の大枠の層序を把握することができるようになったことは重要である。

朝日遺跡における地層の堆積は、遺跡の範囲が広範囲であり地区単位の特徴が見られるもの、おおむね以下のような層序を形成するものと思われる。まず砂堆形成の基盤層と考える地層は、青灰色から黄色を呈するシルトが遺跡の中央部から北部域、南・北区画や北・東墓域などに見られ、一方で南墓域などでは中粒砂が直接露出する状況が見られる。いずれにしる朝日G層として統一した。その上部には広域に「黒色シルト」が堆積する。こうしたシルト混じりの砂層を人為的に整地・盛土等を行った二次的な堆積土を、便宜的に朝日T層と位置づけた。

したがって朝日T層は黒色あるいは暗い褐色のシルト混じりの砂層で、多くは遺物が攪拌された状況で包含する。所属時期は高蔵式から朝日式期

朝日C層 シルト層（中世期）

朝日U層 砂を挟むシルト層・下位に不整合面（宇田式期を中心 古墳中～古代）

朝日M層 粘土層（下部に炭化物を含む薄い層が2つ存在）（松河戸式期 古墳前）

朝日H層 砂まじりシルト層（廻間式期～山中・八王子古宮式期 弥生後期～古墳早期）

朝日T層 シルトまじり砂層（高蔵式期～朝日式期 弥生中期）

朝日G層 シルトあるいは砂層（朝日遺跡基盤層）

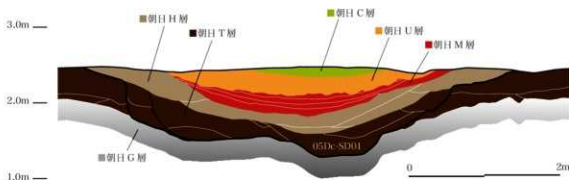


図 2.1-1 溝内に堆積した朝日遺跡標準層序模式図 05Dc-SD01

朝日 T-SA 層

を中心とするものと考えておきたい。複数の調査員が一律に識別可能な地層としては朝日 T 層という枠組であり、調査区・遺構単位でさらに詳細な区分が可能である。黒色シルトについては、火山灰起源のいわゆる「黒ボク」との関係で論じられる場合もあるが、明確にされているわけではない。朝日 T 層を中心とした異常な黒い土の成因については、まだ解明されてはいない。

さて、06Ba 区において朝日 T 層内に堆積した砂層に関して興味深い成果が見られた。それは谷 A 右岸を中心とした大量の砂層の堆積状況である。遺物はほとんど含まれていないが、時期的には貝田町式以降である点は遺構内の埋土関係を見ることにより明らかである。そしてさらにその時期を特定できる資料を 06Ba 区の調査にて得ることができた。すなわち 06Ba 区 005SD 溝内堆積層において、高蔵式期の遺物が含まれる地層の中から、洪水性の砂層が発見できた点である。さらに詳細に検討していくと、図 2.1-4 のように八王子古宮式期に所属する地層より下位であり、かつ高蔵式期に所属する地層の上位付近に砂層の堆積が見られる。堆積層に含まれていた遺物は高蔵式期に所属し、したがって洪水性の砂層の堆積が高蔵式期末葉段階に位置づけられる可能性が高いと判断できよう。

ここではこの砂層を朝日 T-SA 層と呼称することにする。したがって朝日 T-SA 層は、高蔵式期末葉期に勃発した洪水性の堆積層と考えておきたい。そこであらためて各地点での朝日 T-SA 層を確認していくと、この特徴的な砂の堆積状況がさまざまな地点にて確認できることがわかる。



図 2.1-2 朝日遺跡標準層序 05Dc-SD01

高蔵式末葉の洪水
朝日 T-SA 層

高蔵式末葉期に勃発した洪水性の堆積層は、朝日遺跡谷 A を中心にして多大な影響をあたえたものと想定できる。特に重要な点は北区画の南側に存在する環濠帯とその南岸に設置されていた逆茂木や乱杭帯を埋め尽くしている点は留意したい。また谷 B には基本的に朝日 T-SA 層に相当する地層が確認できないようであり、谷 B の整備がこの時期以降に開始された可能性が高いことになる。また高蔵式末葉期の洪水は他の遺跡でも確認できるようであり、広域的な自然災害という評価も想定しておきたい。

朝日 H 層

朝日 T 層の上位には砂まじりのシルト層が堆積することが多々見られる。朝日 H 層と呼んでいる。やや明るい灰黒色を呈する場合が多いようであるが、環境によって色調は大きく異なり、基本的には粒度の観察と朝日 T 層との関係において判断する。朝日 H 層には山中式～廻間式期の遺物を中心に包含されており、その下位には八王子古宮式期に所属する資料が発見される事もある。おおむね弥生後期から終末期（古墳早期）までの地層と考えておきたい。

朝日 M 層

朝日 M 層は粘土が堆積する層で、複数の炭化物のラミナ状の地層が見られる場合が多い。朝日 M 層は比較的識別が容易であり、朝日遺跡全域においての鍵層的な存在となる。灰白色を呈する場合が多く、一般的には無遺物層となる。おおむね古墳時代前期の松河戸式期を中心とした時期と想定できる。朝日遺跡では広範囲に止水域が広がる環境であった。

朝日 U 層

朝日 M 層上位に堆積する朝日 U 層は、砂を挟むシルト層である場合が多く、朝日 M 層との間に不整合面が見られる。やはり無遺物層であるが、谷 B などでは朝日 M 層が厚く堆積し、その下位には宇田式期の遺物が、上位には奈良時代の遺物の包含が認められる。

宇田期の大洪水
大毛池田層

ところで濃尾平野での発掘調査において古墳時代中期に大量の砂層の堆積が見られる場合が各地域で報告されている。最も著名なものが一宮市大毛池田遺跡の古墳時代水田を覆い尽くした砂層である^{*)}。松河戸Ⅱ式末葉段階の良好な遺物とその下位で検出されており、宇田Ⅰ式期内での出来事と想定されている。この宇田期大洪水が朝日 U 層に関係する砂層であると想定したい。今後の調査成果をまたねばならないが、比較的広域的な現象と思われ、葉栗・中島・海部郡を巻き込んだ大災害の可能性も指摘できる。したがってまた鍵層として位置づけが可能でありここであらためて大毛池田層と仮称しておきたい。所属時期を古墳時代中期前葉段階と考え、おおむね西暦 400 年前後を想定しておきたい。

さて、朝日遺跡では耕作土を除去するとただちに露出する層として、シルトを主体とした朝日 C 層がある。若干ではあるが、中世の無軸腕を伴う場合が認められる。西暦 800 年以降の堆積と想定し（6.1 朝日遺跡標準層序の暦年代を参照）、朝日遺跡周辺部においては、止水域が広がる環境にあったようである。

^{*)} 武部真木編 1997「大毛池田遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 72 集



図 2.1-3 朝日遺跡 07A-004SD 逆茂木を覆う砂層

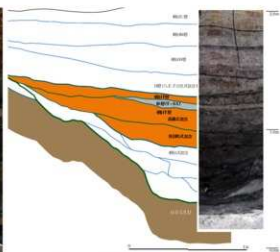


図 2.1-4 06Ba-005SD 断面写真



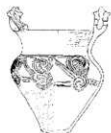
図 2.1-5 06Ba 谷 A 右岸 砂層 (T-SA) と貝層の堆積状況

■2.2 第1ステージ（縄文後期）

朝日遺跡の最古の土器

朝日遺跡周辺地区に、人々の営みが確認できるのは縄文時代中期の終わり頃と推定されている。発掘調査によって、これまで朝日遺跡の中央部に存在する谷A周辺部を中心として縄文土器が散見されており、おおむね縄文中期末葉の山の神式から後期前半期の堀之内Ⅰ・Ⅱ式併行期にまともが見られる点が指摘されている¹⁾。

縄文時代の遺構



現在までに縄文時代の明確な遺構等が散見できる状況にはないが、数カ所の地点において後期前半期の遺構が確認できている。まず谷A右岸である63A区では溝状遺構であるSX01と貯蔵穴と想定されているSK01・SK02（図2.2 右上）が調査されており、円形プランをもち袋状を呈するSK01からは、ドングリを含む層序堆積が確認されている。また堀之内Ⅱ式の深鉢が供伴している²⁾。さらに北墓域では、弥生中期の方形周溝墓が造営される以前に営まれた竪穴状遺構が確認されており、後期の深鉢が伴っていたことが報告されている³⁾。

縄文中期の小海退

以上のように単発的ではあるが、遺構の存在が確認されている。そして出土地点を概観すると、朝日遺跡北区画の北方や谷Aに近接する西墓域周辺、さらには貝殻山貝塚地点などにも点在する。しかしその分布密度等を考慮すると、おおむね谷A左岸を中心に分布にまともが見られることがわかる。縄文土器が出土する地層は黄色シルトの朝日遺跡G層上位からである点を踏まえると、縄文中期の小海退と晩期の再海進の間に起こった気候変動を契機にして、人々の営みが朝日遺跡周辺におよび始めた事を推定することができる。しかしその後の縄文晩期の再海進により再び水位の上昇や海の影響を強く受けていたことによって人々の往来が消え、この地での生活の営みの再開は、弥生時代前期を待たねば成らなかったようである。

今回の調査でもやはり縄文土器が若干ではあるが出土している。所属時期の概要にはほとんど変化は認められず、従来の見解を踏襲する事ができた。出土地点の中心は、05Ab区環濠帯付近に集中し、谷A右岸付近に営まれた弥生時代の遺構埋土に混在する形で発見されている。なお、中期に遡ると思われる資料が1点認められる。

*1 中川真文 1982『縄文土器』朝日遺跡Ⅰ」愛知県教育委員会

*2 石黒立人編 1991『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30～35集

*3 佐藤好司 2002『朝日遺跡第11次発掘調査報告書』平田公室住宅新築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書 名古屋市教育委員会

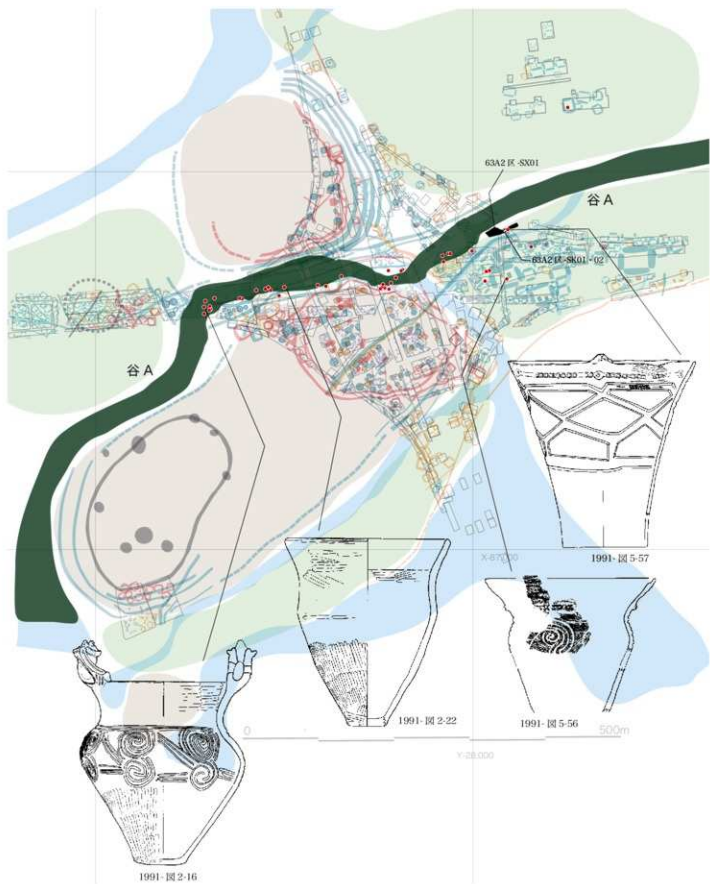


図 2.2 縄文土器の分布（朝日 1991 を中心に）と縄文後期の遺構

■2.3 第2ステージ（弥生前期） 前期環濠集落の出現



貝殻山式期

前期環濠集落の出現

南北 250m
東西 150m の環濠集落

条痕紋系土器

朝日遺跡の本格的な集落景観としての開闢時期は、おおむね弥生前期後半期である西志賀式期にあることが報告されている。しかし、それ以前にも明確な遺構が確認されており、環濠集落への変貌以前に人々の営みの痕跡がうかがえる。そしてこれらの遺構群の分布の中心は、明らかに現在の貝殻山貝塚地区を中心とした地点に集約される。そこで以下、朝日遺跡の貝殻山貝塚地区を中心とした近年の調査成果を整理しておきたい^{*)}。

まず前期環濠集落への展開過程以前で幾つかの遺構が存在する。朝日遺跡「新資料館地点」（貝殻山貝塚地区）の調査成果に基づくと、弥生前期前半期の土器様式である「貝殻山式」に所属する遺物群が確認されており、朝日 95・96 区竪穴建物 SB07 や SK118 等の土坑群が存在する。これらの遺構群は若干の時期幅を保ちつつ、ほぼ連続的に営まれつつあった小規模の集落景観の存在を類推することが可能である。また複数の溝状遺構なども営まれていたようであり、現状では小範囲ではあるが環濠集落への黎明期として評価しておきたい。

明確な環濠集落を形成する段階は、朝日 95・96 区 SD101 の掘削期である。幅 2.5～4.5m、検出面からの深さが 1.4m を測る断面 U 字形ないし箱形の大溝が確認されている。溝内から出土した土器群は大きく三層に区分されて報告されており、その掘削時期は最下層の西志賀式 1 期に所属するものと思われる。そして史跡貝殻山貝塚を廻る周辺では、弥生前期の土器を伴する貝層の存在が確認されており、これらをつなぐとおおむね南北 250m 東西 150m の環濠集落（前期集落域 A）が推定できる。現在の段階では環濠内における居住域等の情報はほとんどなく、建物等の確認に至っていない。

なお、SD101 が掘削される段階において、ほぼ同じ時期に谷 A をはさんだ右岸に弥生前期の包含層の広がり方が確認されている（前期集落域 B）。また同時期に所属するであろう溝 56A 区 SD01（61 区 SD273）が存在する。加えてこの地点での出土土器が、いわゆる遠賀川系土器の頻度が低く、かわって条痕紋系土器が比較的多い点が指摘されている。谷 A をはさんで分布する前期集落景観に、多様な形が存在した点を想定することができよう。いずれにしても貝殻山貝塚地区に出現した環濠集落を起点に、朝日遺跡は弥生中期の段階に飛躍的な発展を遂げることになる。

^{*)} 宮澤健司編 2000「朝日遺跡VI」
愛知県埋蔵文化財センター調査報告
書第 83 集



図 2.3-1 弥生前期（紀元前 5 世紀前後の様相）

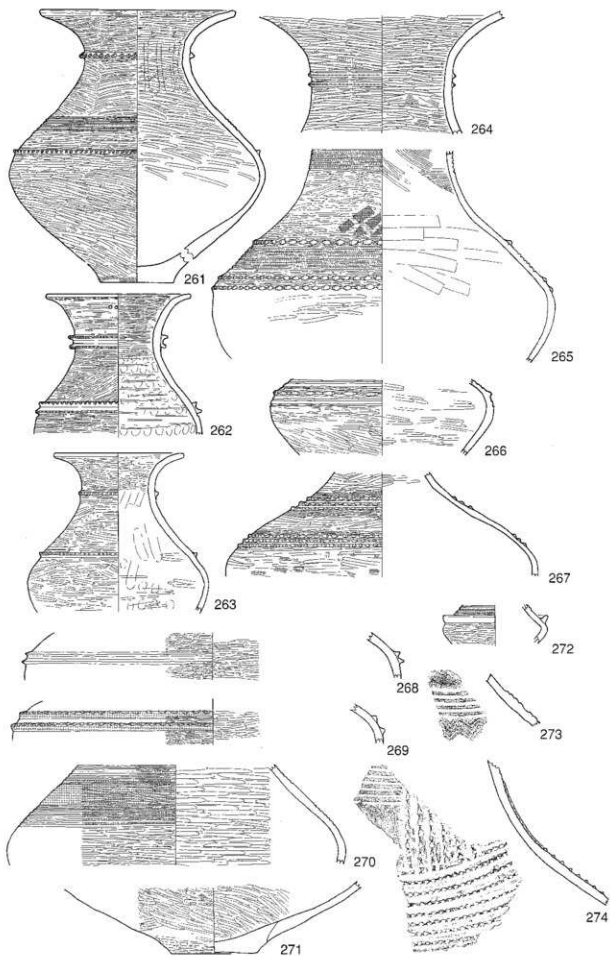


図 2.3-2 弥生前期 95・96区 SD101 3層 (朝日 2000 より) 1/4

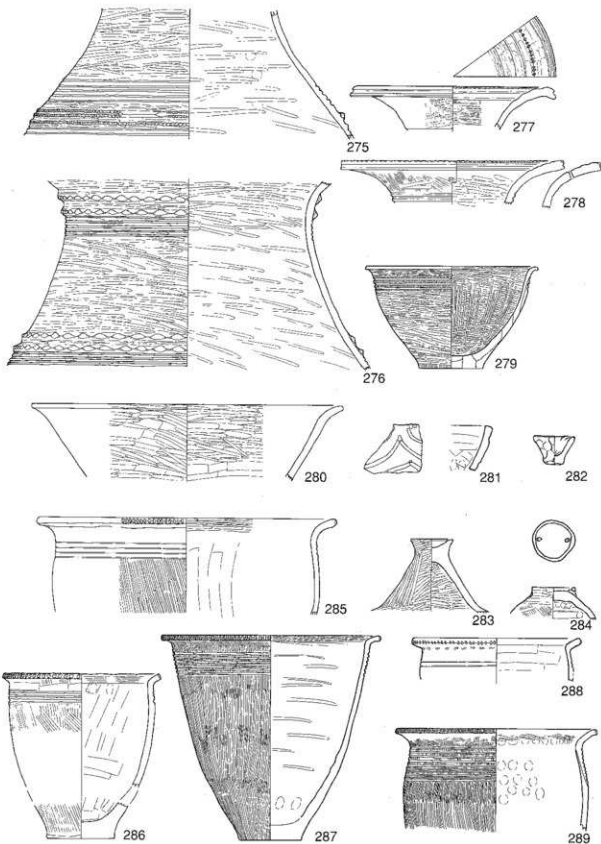


図 2.3-2 弥生前期 95・96区SD101 3層(朝日2000より) 1/4

■2.4 第3ステージ（弥生中期） 朝日式から貝田町式

朝日遺跡が拡大・盛行する中心的な時代が弥生中期であり、多様な遺構・遺物群の集合体としての評価は、今後も動くことはない。しかしその段階に至る過程と各土器様式間の主要遺構の変遷等は、調査成果の蓄積により大きく変化する可能性が高い。そこで、ここでは中期前葉の朝日式期から中葉の貝田町式期を一括して取り扱い、その大まかな変遷を概観するに留める。すでにその具体的な評価は既刊報告書にて報告されているが、ここでは特に「朝日2000」^{*1}で提示された内容を前提として、その後の調査により変更ないし再検討が可能になった箇所について言及することにした。図2.4-1は中期主要遺構群の配置図を示したものであり、谷Aをはさんで北と南に大きな区画が存在し、さらに東西には大規模な墓域が形成されていた事がわかる。

2.4.1 朝日式期の集落概要

弥生中期前葉である朝日式期になると、集落構造が大きく一変する。谷Aをはさんで左岸には弥生前期の環濠集落を取り込む形で東方に拡大し、巨大な環濠集落へ変貌したものと推定されている。南区画と呼ぶ東西600m、南北250mから300mの楕円形状の区画が存在した。ただ、居住空間としてはさらに谷Bの北東へ拡大する傾向が見られる。そして注目すべきは、谷Aをはさんで右岸には独立して一条の環濠が廻る北区画が出現する点である。加えて谷A右岸でありかつ北区画西側には方形周溝墓が群集する墓域が設定（西墓域）される。そしてさらに谷A左岸でありかつ南区画東には巨大な方形周溝墓が群集する特異な墓域（東墓域）が出現することになる。北区画を画する溝（北区画・中期第1環濠）は02Ab区SD09と01Aa区SD12・16の調査成果から断面U字形の溝幅5m深さ2mを測る大溝であり、01Aa区では最深部標高1.04mを測る。朝日遺跡の中では最も巨大な大溝の掘削と位置づけることができる。なお外側に土盛状の土塁痕跡が認められる。同様に南区画を画する溝（南区画・中期環濠）は、谷A左岸にはやや複雑に錯綜するもどちらかという二条の環濠として機能していた可能性が指摘されている。一方で南側の溝は27区211・212と05Dc区SD03・SD32において、幅4m深さ1mほどの断面U字形の大溝であり、おおむね朝日式と貝田町式期の2回に溝の掘削と整備が実施されている。この地点においても内側にやや小規模であるが溝が設定されていた可能性もうかがえ、南区画は二重の環濠による居住域を構成していた可能性を想定しておきたい。

以上のように朝日式期に至り、朝日遺跡の基本的な集落構造がほぼでき

*1 宮崎健司編 2000『朝日遺跡VI』
愛知県埋蔵文化財センター調査報告
書第83集

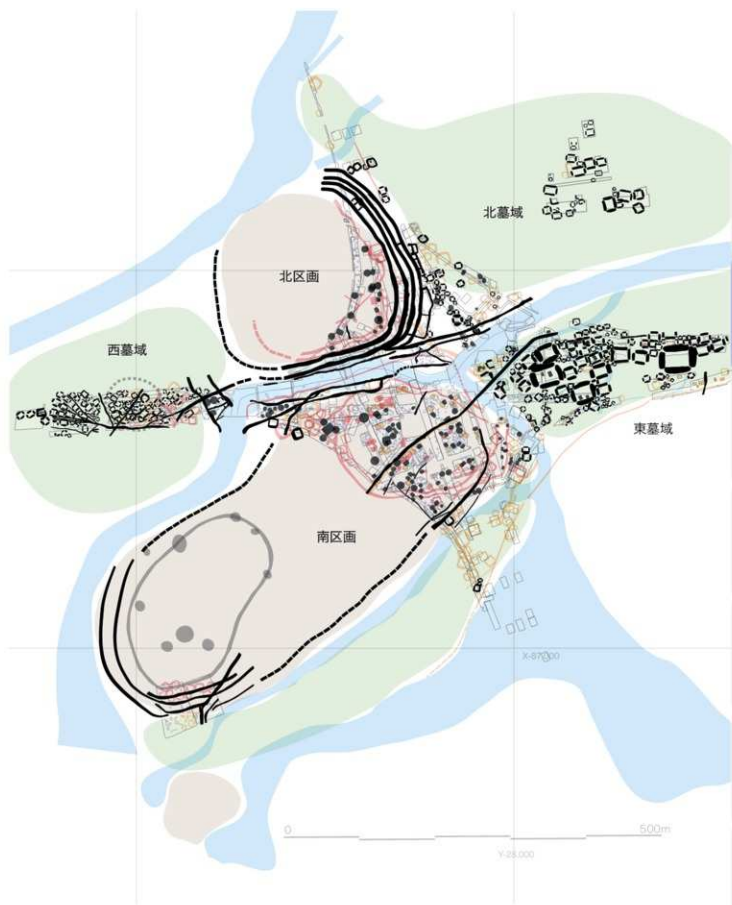


図 2.4-1 弥生中期（紀元前 4・3 世紀前後の主要遺構配置図）

- 1 調査の概要
- 2 遺跡の紹介
- 3 編年表
- 4 特殊遺構・遺物
- 5 土器の分布
- 6 埋年代
- 7 総括

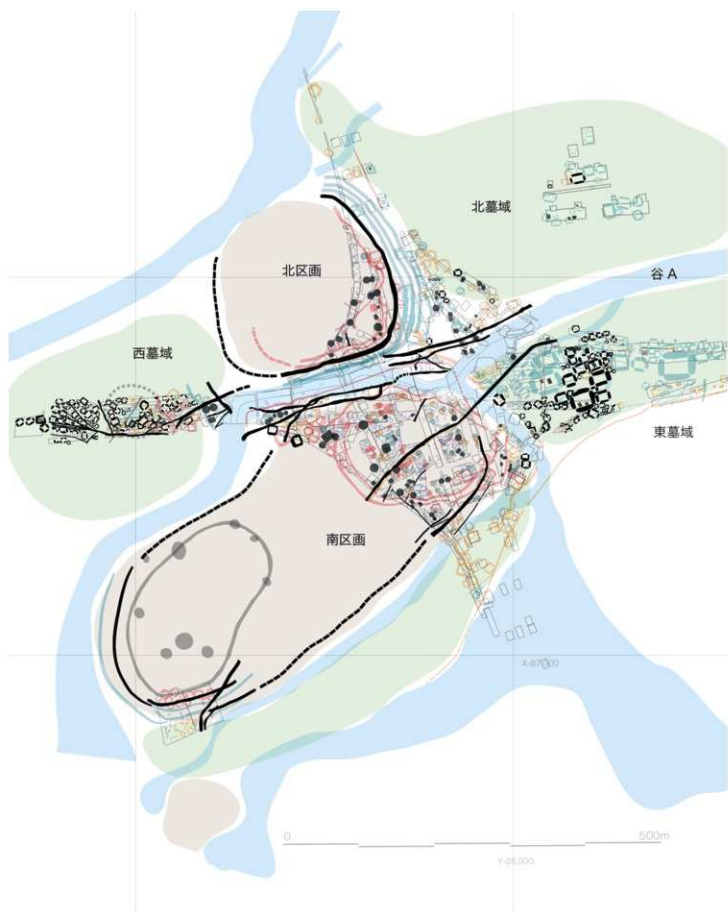


図 2.4-2 弥生中期（朝日式期の主要遺構配置図）

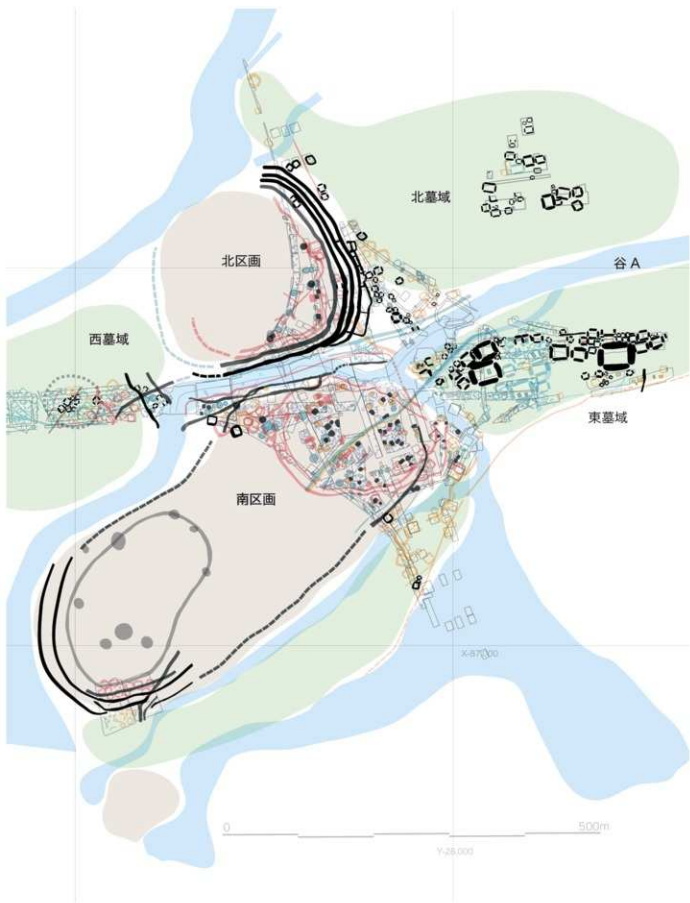


図 2.4-3 弥生中期（貝田町式期の主要遺構配置図）

1 調査の概要

2 遺跡の概要

3 編年表

4 特殊遺構・遺物

5 柱穴の位置

6 埋年代

7 掘法

北区画

あがった時期と評価できるものと思われる。その範囲は、東西 1.4km 南北 0.8km を越える広大な面積を占有する巨大集落へと変貌した。

北区画の巨大な大溝に囲まれた空間には、大型円形竪穴建物や矩形の竪穴建物が点在し、加えて調査範囲内では 2カ所に貝塚が形成されている。居住空間と位置づける事が可能である。なおこの貝塚形成場所はその後にほとんど利用されることがなく、弥生後期に至るも貝塚状の高まり（図 1.3-1 貝塚 A・B）がそのまま存続したものと推測できる。

南区画

南区画はおおむね二重の環濠により区画された広大な空間に、やはり円形竪穴建物と矩形の竪穴建物が点在し、掘立柱建物を交えて多様な構造の建物が散在していたことが類推できる。南区画の中央部には東墓域を貫き谷 A に連する区画大溝が存在する。この 61H 区 SD X は断面箱形を呈し、溝幅約 4m ほどで深さ 1m ほどの大溝であり、北側に盛土の存在が指摘されている。その他、南区画には区画溝が数カ所で認められる。

谷 A とその周辺

谷 A 付近には興味深い遺構が点在する。まず西墓域と南区画との間の谷 A 両岸には複数の円形竪穴建物を配した空間が存在し、緑色凝灰岩の原石や剥片などが出土しており玉造を中心とした工房と想定されている。後の北墓域となる北区画東側には谷 A に沿って東西の大溝が二条存在した。06Ba 区 005SD・006SD の調査では北側に存在する 005SD は幅 4m 深さ 1.3m の底面箱形を呈する大溝で、006SD は幅 3m ほどで深さ 1.3m の断面 U 字形の溝であるが、後者は中期後葉段階で人為的な埋め戻しを伴う。谷 A にはほとんど水の流れは見られず、その窪地全体を利用する形で大量の貝層が堆積する。

東西墓域の特徴

西墓域には中・小規模の方形周溝墓が列状に配され、特に西墓域西側では放射状の区画溝が存在し、顕著な列状配置が認められる。一方で東墓域では、大型の方形周溝墓がほぼ長軸を東西に合わせて集合配置されており、その周囲に小規模な方形周溝墓が営まれる構造が認められる。なお墓域内には掘立柱建物が点在しているようであり、大型方形周溝墓との関連が指摘されている。

小規模居住単位群

ところで、注目したいのが、北墓域として展開する北東地区である。小規模な方形周溝墓と竪穴建物が組み合う形でのまとまりが散在的に認められ、北・南区画内の居住域とはやや異なる状況が見られる。あるいは小規模居住単位群というべきあり方を構成しながら、北区画東側を取り囲むように当地区周辺に広く集住する傾向が類推できるようである。また、銅鐸鋳型が出土した名古屋市区浮野地区での調査成果を踏まえると、玉作り作業を含めた各種の専門性豊かな技術者の抱え込みも想定できる。

2.4.2 貝田町式期の集落概要

弥生中期中葉である貝田町式期になると、朝日式期の集落景観を基本的には踏襲しつつ、大きく二つの変革を見せ始める。まず一つは北区画の東側に多重環濠帯が出現する点である。現状では新たに三重の大溝を掘削し、景観として残存する朝日式期の第1環濠を加えると四つの溝を廻らす幅80mの巨大な環濠帯が造られる。なお南区画については大きな変更は見られない。そして、もう一つの大きな変化は墓域の再整理にある。大型方形周溝墓が群集する特異な東墓域のあり方には基本的な変化は見られず、その墓域構造は踏襲されていく。しかし一方で西墓域がほぼ終焉し、新たに北墓域が設定されていく様子が見られる。大きく見れば、朝日遺跡としての墓域が北区画の東側に限定されていき、谷Aをはさんで北と東墓域に集約されていく。区画外に点在した小規模単位集落域を撤去して一般的な方形周溝墓がまとまる北墓域と、大型の方形周溝墓を中心として造墓活動を継続する東墓域という位置づけがより鮮明になっていくようである。

北区画に出現した巨大な環濠帯は、区画東面に特化するかのような特徴的なあり方を見せる。その内容は三重の大溝に加えて、不整形な小区画を持つ溝がその外郭部に設定されていく。北東部を強く意識した遺構配置のようにも思われ、一方で他の谷A周辺部の構造には目立った変化は見られないようである。大溝に囲まれた空間には、やはり大型円形竪穴建物や矩形の竪穴建物が点在するが、朝日式期に比べてやや散漫化する傾向が読み取れる。居住空間としての基本的な区画内に、何らかの変化が生じ始めている可能性が高い。

南区画内については、大型円形竪穴建物が急速に消失し、矩形を基本にした竪穴建物群が密集する傾向が強くなる。

東墓域では朝日式期に出現した大型方形周溝墓を中心として群集する特異なあり方が踏襲されていく。具体的には前代の方形周溝墓群を取り囲むように巨大な方形周溝墓が次々に造営され、中には30mを越す超大型墳が登場し、さらに東側に向かって墓域の拡大が認められる。

新たに登場した北墓域は、前代まで小規模な竪穴建物と小規模な方形周溝墓が組合う形の単位居住区を形成していた場所であるが、墓域の設定に伴い竪穴建物群は確認できなくなる。北墓域は北区画環濠帯と谷Aにより囲まれた広大な範囲を想定しているが、現状では調査地点が限られており不明瞭な点が多い。ただ名古屋市西区浮野地区の調査成果^{*)}を踏まえると、10mから15m規模の方形周溝墓群が密集しながら大きく墓域が展開していく様子が見られる。なお現状では区画溝等の配置は見られない。一方で、北区画環濠帯周辺部では小規模な方形周溝墓が造営されており、あるいは幾つかの大きなまとまりが組合う形で北墓域内が設定されていたとも推測できる。

環濠帯の出現

北墓域の設定

北区画と北東部の備え

東と北の墓域

^{*)} 野澤剛幸・伊藤正人編 2006 『埋蔵文化財調査報告書54』朝日遺跡(第13・14・15次)名古屋市教育局委員会 名古屋市文化財調査報告書69

■ 2.5 第4ステージ（弥生中期後葉） 貝田町式末から高蔵式



三つの劇的な変化

弥生中期後葉である高蔵式期を中心とした主要遺構の配置を概観すると、前代に比較してその踏襲された規範を逸脱するかのような遺構配置が見られ、朝日遺跡において極めて特徴的な変化が勃発した時期と評価したい。なおここでは集落変遷から考慮して、貝田町式3期新（3.2参照）に所属する遺構群を含めて取り扱うことにしたい。

この段階での変化を大きくまとめると三つ指摘することができる。まず第一に北区画・南区画での新たな環濠の掘削は見られず、特に北区画では居住のための竪穴建物群がほとんど見られなくなる。第二に方形周溝墓を造営する墓域が再び拡散し、特定地域に限定して営むという傾向が消失する。また新たに南墓域が設定される。そして最後に谷A周辺部を中心に特異な遺構が次々に築かれていき、やがて当該期の終わり頃に谷Aとその周辺部で洪水性の砂層（T-SA層）の堆積が見られる。

北区画内では05A区632SDの方形区画溝以外には遺構がほとんど確認できない。また遺物の出土も少なく、環濠帯では貝層にもなった土器廃棄が散在的に見られるだけである。一方で南区画では、新たな環濠の掘削は見られず、主に矩形を呈する竪穴建物が広く営まれていく様子が読み取れる。

方形周溝墓は北区画以外の場所に、数基のまとまりを単位として散在的に営まれていく傾向が見られる。そしてこの時期に特徴的なあり方は、前代の方形周溝墓と大きく重複する形で墓域が散見できる点である。これまでの墓域では、主に周溝を共有する形で配置する場合はあっても破壊する形で造営する事はまったく見られない。また方形周溝墓の形に画期が見られるのもこの時期である。すなわち長軸をもつ長方形墓から正方形墓に変化する傾向が著しくなる。四隅に陸橋部を持つ形が優先された前代までと異なり、陸橋部のあり方も多様化する。その形の多様化から前方後方形が誕生するようである。また30mクラスの超大型墳が墓域の中から姿を消す。新たに設定された墓域としては南墓域がある。

さて、この時期の特徴的な特異な遺構が、谷A周辺部に点在する。まず敷葉工法と杭列を伴う方形壇状遺構（61E区SX01）がある。さらに北区画の谷A右岸斜面に造られた逆茂木と乱杭列に代表される。こうした谷A周辺部での杭列やその構築物は総じて大量の砂層によって覆い尽くされている様子が報告されている。以上の状況を考慮すると、水害対策を主要な目的とした備えであった可能性も考慮する必要がある。なお、この砂層の堆積（朝日T-SA層）は高蔵式末葉段階に位置づけられる。

先代の方形周溝墓の破壊

水害への備え



図 2.5 弥生中期後葉（紀元前 2 世紀前後の様相）

■ 2.6 第5ステージ（弥生後期） 八王子古宮式から山中式



2.6.1 最後の集落景観

朝日遺跡での最終的な集落景観と考えられる、弥生後期前半期の概要を整理しておきたい。土器様式としては八王子古宮式から山中式期を中心に考えておき、おおむね西暦1世紀を中心とする時期を想定しておきたい。なお遺構の状況は山中Ⅰ式期を主体とし、山中Ⅱ式期になると急速に消失する傾向が読み取れる。

第5ステージにおける朝日遺跡の景観は、前段階である高蔵式期とは大きく異なり、再び谷Aをはさんで二つの区画をもつ旧来の基本集落構造を踏襲する形に回帰する点にある。すなわち谷Aをはさんで北・南区画の再整備と限定された場所に墓域を設定するような状況が見られるようになる。

北区画では環濠としての最後の溝の掘削が行われる。弥生中期に存在した環濠帯は景観として残存するようだが、全体におよぶような既存の大溝の再整備が行われる事はない。変わってその内側に新たな大溝が掘削される。北区画内環濠と外環濠である。ただし北区画に明確な二重環濠が整備されるのは谷A周辺部に限定される。そして北区画内部の南側には内郭区画溝によって特異な空間が設定される。この区画内には数棟の竪穴建物以外には明確な遺構が確認できず、大きな広場的な空間が造られていたものと思われる。

南区画ではほぼ二重の内・外環濠が新たに掘削されることになり、谷A左岸付近だけに限定して、その外側に方形の外区が設定（長方形区画溝）される。南区画の大きさは二重環濠の規模で、東西230m南北150mを測る。内環濠の内側には正方形を基本とした竪穴建物が多数展開する状況が確認でき、内環濠内に方形周溝墓の造営は行われることはない。

墓域としては従来の北墓域と東墓域の使用はほとんど見られず、西墓域のみが利用されていくようである。なお高蔵式期に活用された南墓域においても同様であり、山中式期に所属する方形周溝墓は確認できない。集落としての分離された墓域景観というより、どちらかという居住域の周辺墓域としての空間の再活用という側面が強く認められる。

方形周溝墓の造営は、北区画では外環濠と景観として残存する中期環濠帯の凹みを利用する形で小規模な周溝墓が造られており、南区画においても内環濠と外環濠の間を利用する場合や外環濠の周辺部に小規模な方形周溝墓を造営することが見られる。特に南区画の東西の環濠周辺部に谷との空間が利用される（周辺墓域A・B）。なお、注目したいのが貝殻山貝塚地点での等質的な規模の方形周溝墓の造営とその群集である。八王子古宮

北区画と特殊空間

南区画と方形外区
環濠は120×80m

周辺墓域と第三の区画



図 2.6-1 八王子古宮式～山中Ⅰ式期（西暦1世紀前半期の様相）

式から山中 I 前半期に限定された造営であり、あるいは周囲に第三の居住域が存在する可能性も想定できるかもしれない。

この段階で大きく景観が変化したのは谷空間である。

南と北の区画を画していた谷 A 東部は、前段階の砂層の堆積等や中期の大量の貝層や廃棄物等の堆積などにより埋め尽くされつつあったと思われる、この段階では皿状の窪地がわずかに残存する程度の景観であったと想定したい。変わって水の流れを意識した水路の掘削が行われた。谷 B として報告されているもので、幅約 20m で居住域との比高差が 2m ほどの窪地状の地形である。

谷 B の掘削を八王子古宮式前後を中心とした時期に求める必要がある。その根拠は谷 B 周辺に造営された方形周溝墓が高蔵式期であり、その周溝を破壊する形で谷 B の流路が確認されている。また谷 B には朝日 T-SA 層が存在せず、最下層中粒砂からは山中式を中心とした遺物が見られる。こうした調査成果を考慮すると、谷 B は北東からの水の流れを南西方面に流路を変更するために設定された治水対策用の人工的な水路であると評価しておきたい。なおこの段階で杭列 61M2 区 SX01 が設定される。

2.6.2 後期区画溝の特徴と墓域の終焉

後期環濠について、その特徴を整理しておきたい。北区画・南区画ともほぼ溝幅 3m から 3.5m ほどで、深さ 1.2m 前後の U 字形の溝が基本形であるが、一部には V 字状を呈する場所（北区画 05Ab 区の内環濠）もある。中期環濠は緩やかな彎曲を保ちながら基本は直線的な区画溝であったのに比べ、後期環濠は蛇行や屈曲が著しい。特にいくつかの突出部状や、その逆の特徴的な内側への凹み（環濠凹面）などが見られる。また出入口を想定しての掘残し部が数カ所にわたって設定されている。南区画は環濠と環濠の空間が広く、かつ不定形でありやや複雑な構成を成す。

さて、北区画南側に設定された特殊な空間について整理しておきたい。まず内郭区画溝には出入口部が存在し、その周辺では特徴的な遺構・遺物が発見されている。まず 99Aa 区で報告されている懸垂用の破鏡（龍龜文鏡）やガラス小玉の存在が目玉される。さらに 05A 区では大量の完形土器が出土した 455SK と竪穴建物 557SB、さらに周辺部では小型粗製土器が散在し、円形土坑 111SK が存在する。これらは周辺のピット列と伴に特異な空間を形づくっていたものと想定したい。その西側には大きな広場が存在し、山中 I 式期の装飾性豊かな土器類が発見されている方形周溝墓 SZ132 が唯一存在する。朝日遺跡において環濠内に営まれた方形周溝墓は、この SZ132 のみであり、興味深い存在である。

最後に北・東墓域内に単独で発見される竪穴建物の存在に注目しておきたい。そして加えて方形周溝墓上、あるいはその周辺部において墓前祭と思われる状況の土器配置が各所で確認されている。山中式期を中心としたこれらの痕跡は、朝日遺跡の終焉に伴い旧墓域内の各所で執り行われた何らかの祖霊祭祀を想定する場面であった可能性を指摘しておきたい。



图 2.6-2 北・南区面 (八王子古宮式~山中式期) 1/300

- 1 調査の概要
- 2 遺跡の調査
- 3 編年表
- 4 付体遺構・遺物
- 5 出土の古銭
- 6 同年代
- 7 総括

■2.7 第6ステージ（弥生終末期・古墳早期） 廻間Ⅰ式 朝日集落終焉後の景観



最後の方形周溝墓

土器廃棄空間 A と B

弥生時代の朝日遺跡としての集住した集落景観は消失し、前段階までの北区画や南区画内とその周辺部には、散在的に竪穴建物が点在する状況が見られる。この段階では新たな環濠の掘削や、小規模な区画空間などを設けた形跡は見られず、かつての環濠は景観として残存し、部分的な改変はあっても溝全体を再整備するような状況は確認できない。そしてその場所は廃棄場や多様な空間として活用されていくようである。遺構に伴う出土土器は廻間Ⅰ式前半期が中心であり、廻間Ⅰ式後半期以後は急速にその出土量が少なくなり、遺構そのものの存在も極めて希薄となる。

主要な遺構としては、北区画内では小規模な竪穴建物が数棟と土坑、南区画内ではやはり竪穴建物や土坑、そして最後の方形周溝墓の造営が廻間Ⅰ式前半期に見られる。かつての周辺墓域 B の内環濠内に営まれ、以降墳墓の造営は見られない。

特に注目したいのが南区画北東側の内環濠内での土器廃棄状況である（土器廃棄 A）。多量の完形土器を伴い、溝上部の堆積層内から発見されている。その時間幅は、主体が廻間Ⅰ式前半期にある点は動かないが、そのほか廻間Ⅱ式前半期まで存続する。これと対照的なあり方を示すのが、かつての東墓域の巨大方形周溝墓の溝内に廃棄された土器群である（土器廃棄 B）。貝田町式に造営された SZ301 北溝を利用する形で、その上部の堆積層から大量の土器が出土している。その内容は廻間Ⅰ式後半期からはじまり松河戸Ⅰ式前半期まで継続されている点である。廃棄 A が北区画の最後の祭祀関係の資料と思われる 455SK 一括資料の直後段階から開始されている点を踏まえると、集落終焉に伴う各居住単位での片付け作業を想起させるものである。一方で、土器廃棄 B は周辺における新たな小集団の居住区の設営、あるいは何らかの継続的な祭祀の土器処置場としての位置づけ等を想定しておきたい。

いずれにしろ廻間Ⅰ式前半期を境に、残された空間を利用して生活を行いつづけた最後の残存集団が一定の時間を経て、朝日遺跡を後にして去っていった。この段階をもって朝日遺跡から人の姿が消失する。



図 2.7 朝日集落終焉後の景観（過間1式期）2世紀中頃

- 1 調査の概要
- 2 遺跡の調査
- 3 編年表
- 4 特殊遺構・遺物
- 5 社会背景論
- 6 閉年代
- 7 総括

■2.8 第7ステージ（古墳前期） 廻間Ⅲ式から松河戸式

廻間Ⅲ式・松河戸Ⅰ式期



朝日遺跡においてほとんどその状況が不明瞭である廻間Ⅱ式期を経て、廻間Ⅲ式期になると再び人々の形跡が見られるようになる。

廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式期にかけて、かつての南区画を中心に散在的に竪穴建物が見られる。その概要はS字壜C類古段階の良好な資料が見つかった61H区SB109を中心にして、廻間Ⅲ式期の小集落が存在して行くようである。加えてSB110周辺ではS字文鏡が出土している。あるいは集落空間という位置づけより、かつての大集落の記憶が残るその場所に、祖先を祀る哀惜的な記念碑を残していったものかもしれない。

その後の松河戸Ⅰ式期になると南区画東端部の谷B右岸である05Ce区などにやや大型の竪穴建物が整然と配置されていく様子が見られる。しかし、松河戸Ⅰ式期以降はほとんど人が居住した痕跡は見られず、わずかに遺物の出土が散見できる地点が見られるだけとなり、当地域は静かな荒野と化していったものと思われる。

朝日遺跡基本層序である朝日M層は、この段階を中心にして堆積した地層であり、ラミナ状の粘土層が各地点で見つかっている。水位が増し、止水域が広がっていたことが想定できる。また、朝日遺跡北部では古墳時代の旧河道と思われる大溝が見つかっている。その周辺部では小規模なアゼ状の高まりが確認できており（水田A）、あるいは限定された小区画水田が営まれた可能性が推測できる。さらに名古屋市西区浮野町地点での調査成果からは古墳時代早期から前期にかけての水田施設に伴うと考えられる溝や杭列等の遺構が確認されており、水田域（水田B）の広がりも推定できる¹⁾。

なおその後、古墳時代中期にいたると、この地域には小規模な古墳が営まれていく様子がうかがい知れる。その痕跡は検見塚地点と貝殻山貝塚地点で確認できており、須恵器や埴輪片の出土とともに小円墳の痕跡が見つかっている。

古墳時代の水田

古墳中期

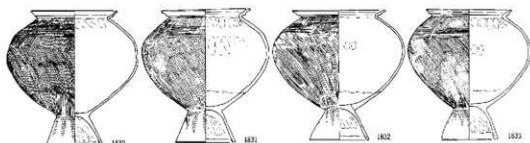


図2.8-1 S字壜C類(61H-SB109 朝日遺跡1991より) 1/8

佐藤好司・大杉規之 2002 『朝日遺跡第12次発掘調査報告書』平田公堂住宅新築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書2 名古屋市教育委員会

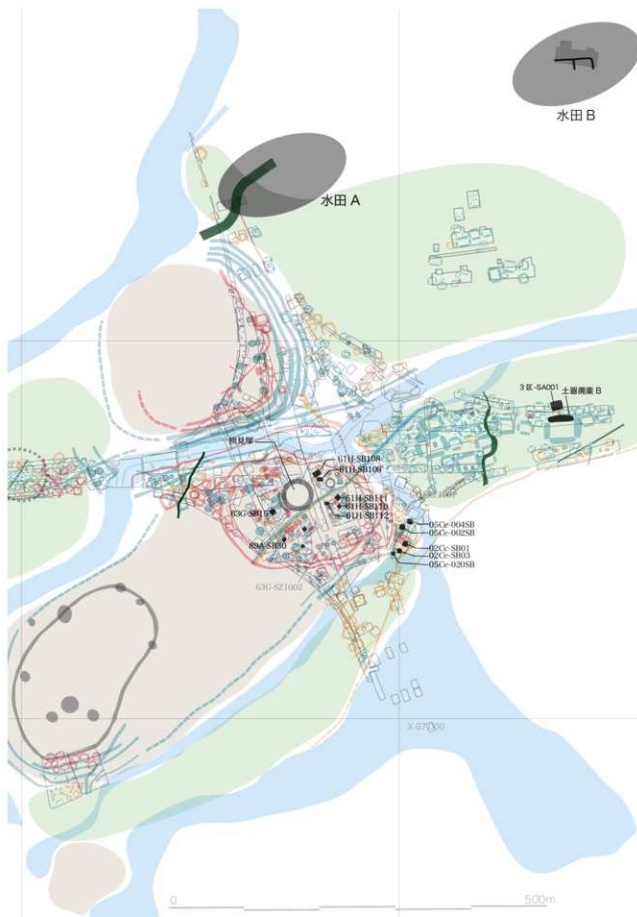


図 2.8-2 古墳時代前期の景観（廻間Ⅱ式から松河戸式）

- 1 調査の概要
- 2 遺跡の調査
- 3 編年表
- 4 特殊遺構・遺物
- 5 出土の器器類
- 6 周年代
- 7 総括

3.1 弥生前期

貝殻山式

貝殻山式は朝日遺跡内に数ヶ所確認されている貝塚（貝層）の1つ、貝殻山貝塚地点出土の下層土器を標識とした（池田 1955）。尾張平野における最古の弥生土器として指定された遠賀川式土器東端の土器を含む型式名である（紅村 1956）。

3.1.1 貝殻山式

朝日遺跡1期（様相1）が相当する。貝殻山式は貝殻山貝塚南地点を中心に出土している^{*)}。朝日式以降、朝日遺跡の中心となる谷Aを挟んだ北居住区画からの出土はない。したがって、縄文時代後期を除けば、朝日遺跡の集落は貝殻式が出土する貝殻山貝塚南地点に出現したと言える。

貝殻山式を2つに分け、1期をさらに古新に2分した。古段階と新段階の大きな違いは突帯紋系土器の有無である。古段階は濃尾平野唯一、貝殻山貝塚南地点において突帯紋系土器と遠賀川系土器の共存が確認できる例である。新段階は段手法より削り出し手法の壺が優位となる。突帯紋系土器様式の後続である条痕紋系土器様式の壺王式はこの段階から共存する。朝日遺跡では貝殻山貝塚地点の同一層序による再検証が行われているが、確たる共存関係を示すにいたっていない（高橋 1985）。

貝殻山式2期は三ツ井式（石黒・宮腰 2007）の深鉢である水式系削痕深鉢が新たに加わる。三ツ井式の壺は突帯紋系変容壺の系統が充てられているが、朝日遺跡には存在しない。また、金剛坂式の壺が朝日遺跡で共存する可能性がある。類例の増加を待つべきであるが、金剛坂式の前型式は三重県から滋賀県に存在する可能性がある。おそらく馬見塚式の後続する未命名型式が想定でき、これを継承する型式として金剛坂式が成立する。

3.1.2 西志賀式

朝日遺跡1期（様相1）が相当する。南地点調査以前は、西墓域の中央に位置する56B区資料を朝日遺跡1期の新相に充てていた。西志賀式は貝殻山貝塚および南地点を核に、環濠を伴う集落として拡大する時期にあたる。南地点環濠資料の下層を1期、上層を2期とした。条痕紋系土器様式の水神平式が一定量共存する。

1期の壺は幅の狭い貼付け突帯と多条化した削り出し突帯、そして多条沈線帯を主体とする紋様帯が主流となる。水神平式は壺と深鉢に加え、内傾口縁土器の頻度が目立つ。朝日遺跡は他の出土遺跡に比べ出土量が際立っている。

2期は金剛坂式の壺が減少する一方、代替するように大型の壺や甕が組成する。大地系土器が共存するのはこの段階からである。柴山出村類型の深鉢変容壺が最古段階として出土している。

西志賀式

西志賀式は名古屋市区西志賀町に所在する西志賀貝塚（遺跡）の調査により、下層の力牛層である「西志賀層」を標準に設定された型式名である（杉原 1949）。同一地点より出土した中期中葉の土器は中層のハマグリ層である「貝田層」を基準に貝田式と呼ばれている（杉原 1949）。

*1 愛知県教育委員会 1972 『貝殻山貝塚調査報告』

高橋信明 1985 『15. 朝日遺跡貝殻山貝塚地点』『く条痕文系土器』文化文化をめぐる諸問題、愛知考古学談話会

石黒立人・宮腰健司 2007 『伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概観と課題』『伊勢湾先史学古事記』考古学論文集、同刊行会

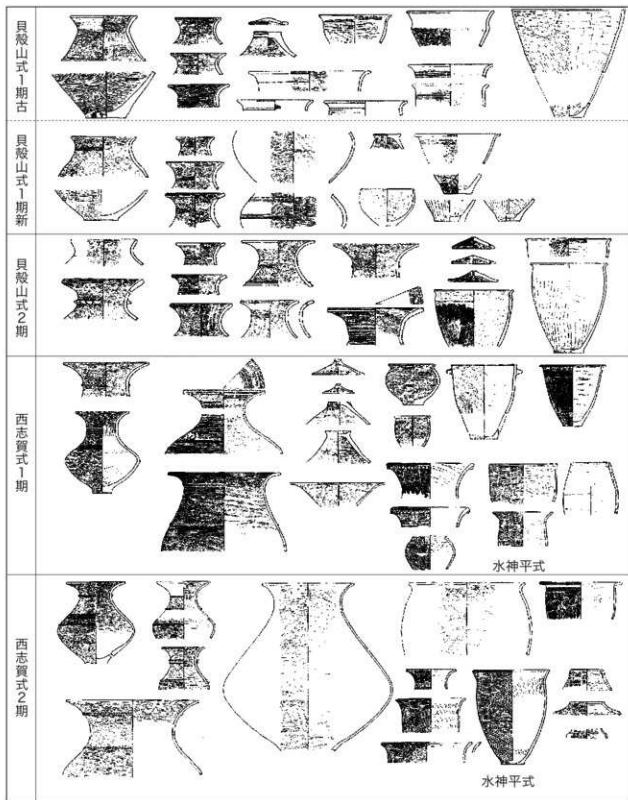


図 3.1 朝日遺跡出土資料編年表(前期)

3.2 弥生中期

朝日式

朝日式は西志賀貝塚の調査で明らかになった西志賀層の底に傾斜して重なり、あるいは貝田町層の下に存在した貝層を前提として、朝日遺跡各地点で出土していた土器をもとに設定された(紅村1956)。その後松ノ木遺跡の資料が提示され、より具体的に型式内容が明らかにされた(田中1967)。

3.2.1 朝日式

朝日式は2期に区分した。朝日遺跡Ⅱ期(様相2・3)が1期・Ⅲ期(様相4)が2期に相当する。条痕紋系土器様式は岩滑式が共存する。

1期は2段階に細分可能である。遠賀川系土器様式の西志賀式、金剛坂式が一部残存型式として共存する可能性が指摘されている。事実、西志賀式の壺は頸部沈線が多条化し、櫛描紋に接近する紋様帯の発達が見取れる。紋様は二枚貝を多用する。

金剛坂式の甕を系譜にもつ朝日形甕が成立する。特徴としては、体部のハケ調整後に二枚貝による左上がり斜位方向の「条痕紋」を付加し、さらに底部付近にタテ方向のミガキを加える。

2期は櫛描紋を多用する時期である。岩滑式は二条一对の平行沈線紋を多用する時期に相当する。朝日遺跡の南北区画が確立し、朝日遺跡が最も盛行する時期にあたるので、「朝日遺跡Ⅲ期」として独立した遺跡の時期区分が使用されてきた。巨大な貝層が形成されるは2期を中心とする。櫛描紋が多用されるとともに、後続の貝田町式へ繋がる細頸壺が出現する。この時期を境に条痕紋系土器様式は小地域の類型が進行し、同時に広範囲な分布圏を形成するようになる。岩滑式に系譜をもついわゆる条痕深鉢はこの時期に出現し、貝田町式併行に盛行する。厚口鉢および大地系土器はこの時期に消滅する。

3.2.2 貝田町式1・2期

貝田町式は3期区分した。そのうち、朝日遺跡Ⅳ期(様相5~6)が1期、Ⅳ期(様相7)とⅤ期(様相8)が2期に相当する。

1期は朝日式2期と共存する古段階(様相5)と付加沈線研磨技法が確立する新段階(様相6)に細分可能である。今回の資料群では貝田町式1期古段階に相当する資料群は見られなかった。受口状口縁細頸壺に代表される櫛描直線帯の胴部紋様は時期比定の基準として有効である。櫛描直線が複帯で1帯か2帯→2帯から3帯の複帯構成→単帯の5帯以上、3段階の変遷が辿れる。甕は朝日形甕が存続する。朝日遺跡出土の有紋鉢は斜格子紋や羽状紋など繊細な紋様構成をもつ。銅鐸紋様に関連した紋様要素が朝日遺跡では注目できる。

2期は今回の資料から一括資料群を抽出するのは困難であった。全体のわかる、単体資料を中心にあげた。壺の付加沈線研磨技法は崩壊し、直線帯の緑取り沈線が脱落傾向にある。横位の紋様は頸部から体部下位の屈曲部まで単調に続く傾向がある。一方、縦方向の区画単位が明確になる細頸壺が増える。朝日形甕が消滅し、体部上位に最大径をもつ体部上位が丸みを帯びた器形のハケ甕が目立つようになる。

貝田町式

貝田町式は西志賀貝塚の調査によって発見されたハマグリ貝層を地層をとって貝田町層と呼んだ。この層から出土した櫛目文土器前期に相当する土器群を貝田町式とした(杉原1949)。当時はまだ西志賀式との間に1型式「朝日式」を想定していないことに注意が必要である。その後紅村弘や田中穂により、朝日式とともに詳しく型式内容が構築された(紅村1956、田中1968)。

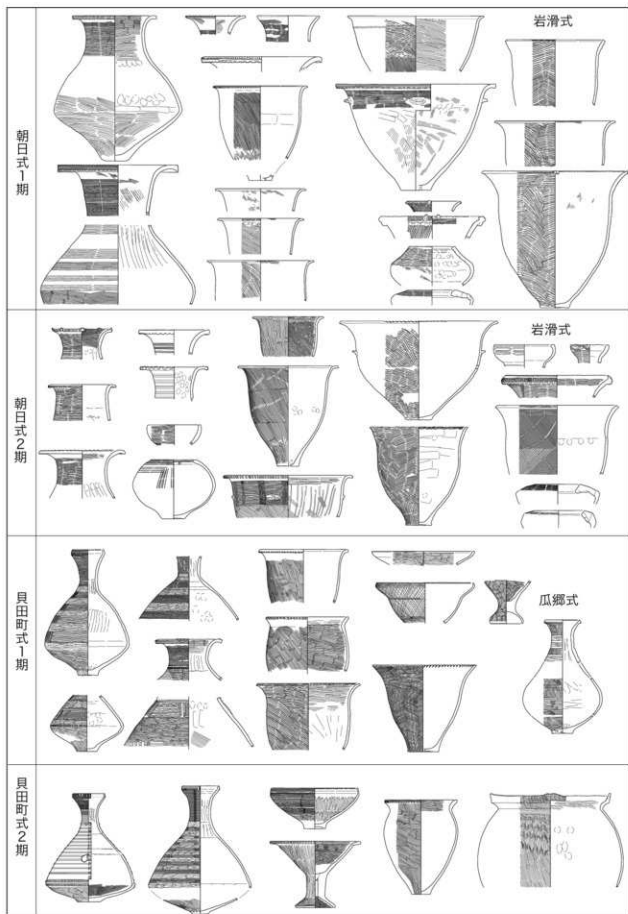


図 3.2-1 朝日遺跡出土資料編年表（中期1） 1/10

3.2.3 貝田町式3期

今回の資料で最も注目したい時期である。朝日遺跡V期(様相9)が3期古段階, VI期(様相10)が3期新段階に相当する。

古段階と新段階の違いは凹線紋系土器と共存するかしないかである。2期と3期の違いは台付甕の有無である。この2点は濃尾平野および伊勢湾岸域以東の地域に大きな土器組成の変化を与えた。これらの現象は遠賀川系土器の波及より大きな画期と考えたい。

台付甕の出現は平底甕の下に設置する台盤状土製品と合体した結果生まれたとする森泰通の見解が指示されている(森1996など)。一方で、台盤状土製品の偏在も問われている。朝日遺跡が群を抜いて多いこと、周辺遺跡および遠隔地の遺跡において特定の遺跡のみ出土する傾向が指摘されている(石黒2008)。もう1つ、朝日遺跡から生成した円窓付土器はこの時期から増加する。

凹線紋系土器は畿内を含まない近畿北・西部から近江・美濃西部を介して朝日遺跡周辺に導入される(深澤1994)。伊勢湾西岸地域は近畿南部地域からの波及が指摘されており、西岸域から尾張平野南部に持ち込まれる場合もあり、凹線紋系土器は単一系譜ではない。特に出現期の様相は、凹線紋系土器が共存する遺跡とそうでない遺跡がある。朝日遺跡の場合は貝田町式3期新段階には凹線紋系土器が共存している。

04Ab区SK03資料はほぼ単一時期の一括資料であり、注目できる。調査時に堆積状況を細分して取り上げているが、今回は大きく3期新段階として一括りにした。幅広い凹線紋を口縁端部に入れ、頸部に数条の沈線を入れるだけで縦方向の整ったハケ調整が目立つシンプルな細頸壺と台付の接合部の円盤充填技法が未調整のため明瞭に残る台付甕が特徴的である。一方凹線紋系土器は壺の口縁部に2~3条の凹線紋をもつ壺とタタキ甕が貝田町式に共存する。

3.2.4 高蔵式

典型的な高蔵式は2期からであるという(石黒・宮腰2007)。ここではその1段階前も含めて高蔵式として扱う。朝日遺跡VI期(様相11・12)が相当する。したがって様相12が本来の高蔵式である。

朝日遺跡では貝田町式の器種構成が崩壊し、ほとんど凹線紋系土器に代替する。ただし、櫛条痕紋深鉢は一定量残存し、組成の一部となる。凹線紋は2期に多条化傾向が進行する。また壺に脚が付くものが新たに加わる。最大の特徴は平底のタタキ甕に台が付くものが誕生したことであろう。ここに土器製作において、在来系と外来系の要素が折衷して共存する実態が機能面にも達したことを示している。「朝日ブランド」である円窓付土器と台盤状土製品は高蔵式をもってほぼ消滅する。

高蔵式

高蔵式は高蔵貝塚(遺跡)の外土器地区の溝状遺構を基準資料として設定された(遺田1955)。それ以前に高蔵式と呼ばれた土器群が西志賀貝塚の調査(杉原1949)で「高蔵式」として使用されている。基本的には凹線紋系土器によって組成する土器型式であるが、貝田町式の系譜をもつ土器群が一部存続する。貝田町式と高蔵式の間には外土器式が設定されている(田中1951)。貝田町式の系譜を強く引き継ぐ土器型式として、本来単独型式の扱いをすべきであるが、高蔵遺跡の資料群以外は明確ではない。今回は貝田町式3期に含めて考えておく。

森泰通1996「台盤状土製品から台付甕へ」「櫛と壺・そのデザイン」東海考古学フォーラム

石黒立人2008「貝田町式土器原論」『生産と流通の歴史学・考古学』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター発生源会公開研究会資料)

深澤芳樹1994「尾張における凹線紋出現の経緯」『朝日遺跡V』

条痕紋系土器

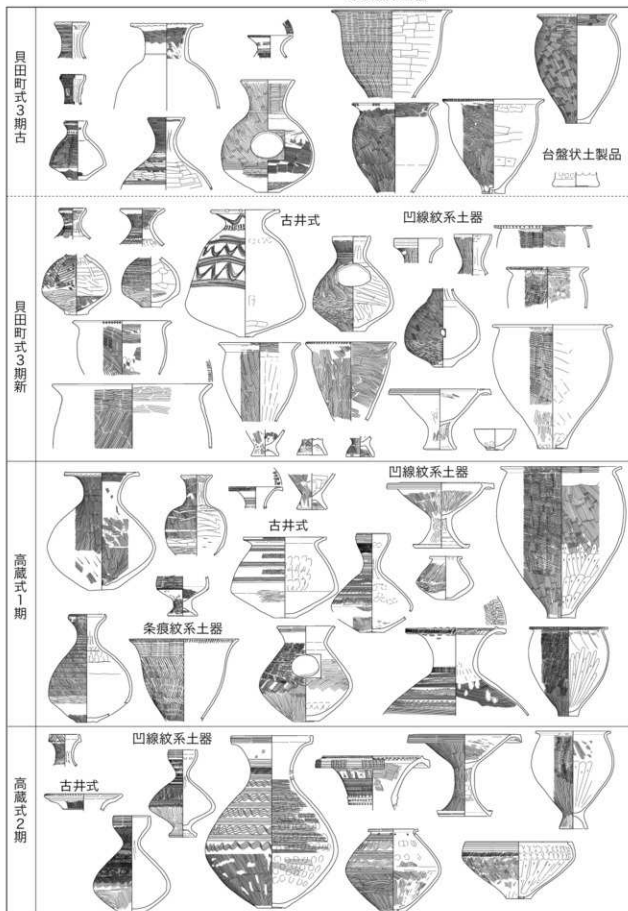
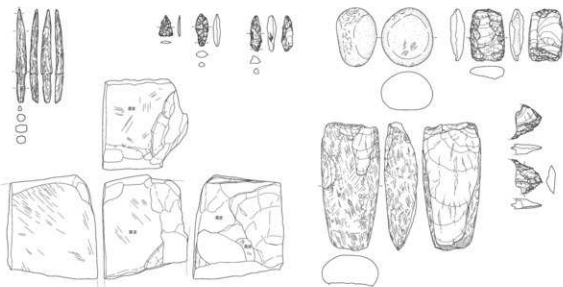
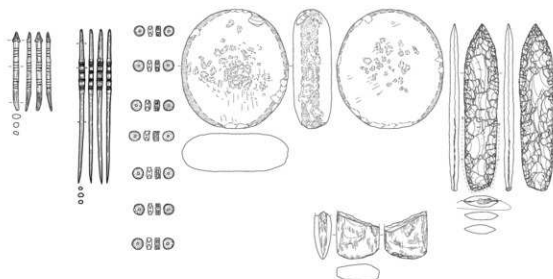


図 3.2-2 朝日遺跡出土資料編年表(中期2) 1/10

朝日式



貝田町式



高蔵式



図 3.2-3 朝日遺跡出土資料編年表 (中期: 骨角器、石器) 1/4



図 3.2-4 朝日遺跡出土資料編年表 (中期：木器) 1/8

3.3 弥生後期

八王子古宮式・山中式

八王子古宮式

一宮市八王子遺跡古宮地区周辺の遺構群を標識として設定された弥生時代後期初期の土器群（赤塚2002・2003）。近江湖型甕が参入するI式。近江との近親性が希薄化するII式に区分される。ただし、八王子遺跡以外にII式期の良好な資料を欠き、「後続する山中I式前半期との関係は依然として不明瞭のまま」である。なお、名古屋市見崎台遺跡の土器群を標識として設定された見崎台式とは地域的様式を異にするともされるが、両式期間の関係も今後の研究に待つところが大きい。

朝日遺跡においては、SX162・SX179（県教育委員会調査）等の土器群が関連すると思われるが、絶分に見えるような良好な土器群は、十分に抽出されていない。

山中式

一宮市山中遺跡を標識として設定された弥生時代後期の土器群（大野1968）。その後、5段階（赤塚1992）、I・II式各3段階（赤塚2002）に絶分・補訂された。様式の成立には瀬戸内・日本海沿岸地域の影響も想定される。八王子古宮式を経て、様式が規格化する前半、様式が弛緩し、進階的に継続する後半に大別される。これに加えて、有段高杯、加飾広口壺の変化が段階区分の基軸となる。

朝日遺跡新資料館地点（95・96区）の土器群は、八王子古宮式から山中式への転換を示唆する良好な資料で、北区西南東地点（044b区等）の土器群もそれに比肩する。

弥生時代後期、八王子古宮式・山中式に相当する朝日遺跡（本報告分）の土器を大略5段階に区分した。本様式は供膳器種の増加、加飾の手法、台付甕への置換といった諸要素によって、前後の様式と画することが可能である。

弥生時代後期I段階は、八王子古宮式～山中I式I段階（八王子古宮式）、朝日遺跡VII期（様相13）にほぼ対応する。多系統の土器の置換、淘汰が十分に達成されず、様式的に不安定な段階。加飾は広口壺以外の各器種では塗りか中心で、多彩な塗り分け手法が用いられる。甕は湖南型甕？、山中型粗形甕？によって構成されると思われるが、不明瞭。高杯は基本的に盤状・皿状高杯によって構成される。加飾広口壺は口縁部文様帯に凹線、頸部から体部上半の文様帯に直線文と波状文を多用し、頸部裝飾帯、扇状文も多い。

同2段階は、山中I式1～2段階（山中I式前半）、朝日遺跡VII期（様相14）にほぼ対応する。様式が規格化する傾向にある段階。各器種には塗りかと工具施文による多彩な加飾が用いられる。塗り分け手法は円文列、帯状など一定の定型化を示す。有段高杯は加飾性に富み、口縁部に加飾帯を付したワイングラス形高杯が組成する。加飾広口壺は口縁部文様帯の文様が多彩で、体部文飾帯には直線文と波状文を多用する。これら各器種は加飾法をしばしば共有する。体部最大径が上位にある古相の山中型台付甕が認められるが、形状、技法に多様性を内包する。

同3段階は、山中I式2～3段階（山中I式後半）、朝日遺跡VIII—1期（様相14）にほぼ対応する。様式が最も安定化する段階。広口壺、長頸壺、有段高杯等の各器種で加飾技法が定式化、塗り分けは帯状になる。加飾広口壺は口縁部文様帯に擬凹線、体部文様帯に直線文と刺突文を多用する。長頸壺が組成し、ワイングラス形高杯は口縁部の加飾帯を消失し、定型化する。この段階以降、中空の中・小型器台が定着する。有段高杯は波状文と直線文による加飾に限定される。台付甕は典型的な山中型台付甕にほぼ画一化、体部最大径が下降した器形が多い。

同4段階は、山中II式1～2段階（山中II式前半）、朝日遺跡VIII—2期（様相15）にほぼ対応する。安定を維持しつつも、様式が単純化する段階。加飾器種の限定、固定化が進行する。塗り分け手法は加飾広口壺を除く各器種から脱落し、壺に特化する。有段高杯は口縁部上段が大きく外反し、無文または屈曲部付近のみ文様が萎縮したものが多く。

同5段階は、山中II式2～3段階（山中II式後半）、朝日遺跡VIII—3期（様相16）にほぼ対応する。様式が弛緩する段階。加飾広口壺を除いて、加飾は消失する傾向にある。甕は退化した山中型台付甕を含め、多様な甕によって構成される。体部最大径が中位付近にある器形が多い。

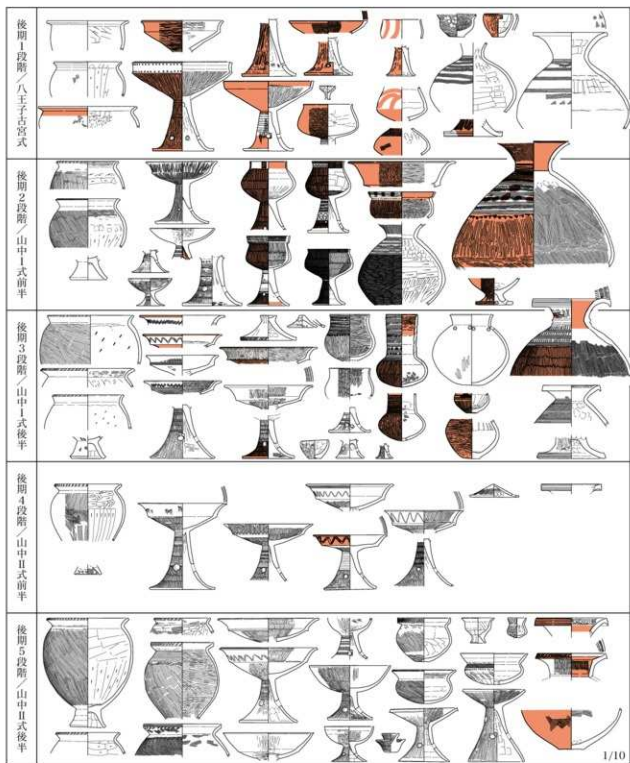


図 3.3-1 弥生時代後期の編年 (1) 1/10

- 1 調査の概要
- 2 遺跡の調査
- 3 編年表
- 4 特殊遺物・遺物
- 5 土器の分類
- 6 弥生時代
- 7 総括

後期1段階／八王子古宮式

後期2段階／山中1式前半

後期3段階／山中1式後半

後期4段階／山中II式前半

後期5段階／山中II式後半

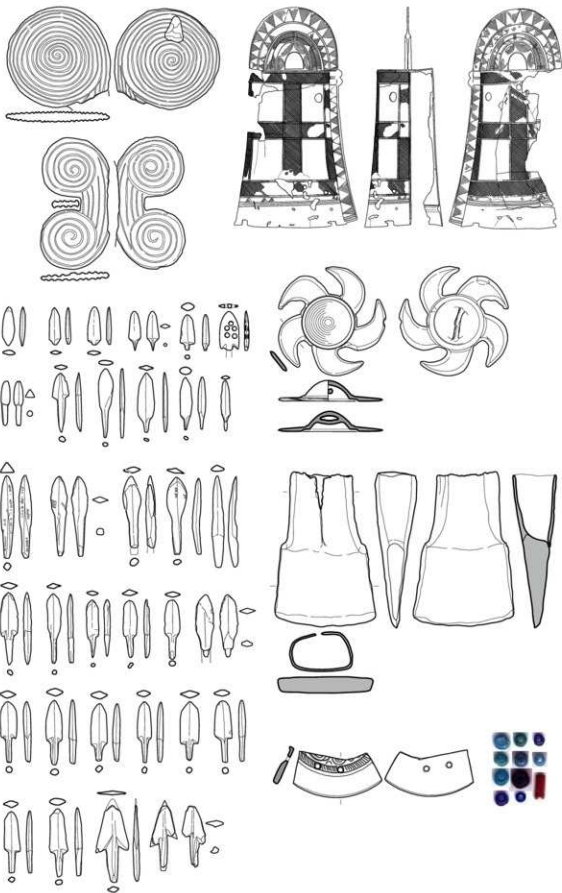


図 3.3-2 弥生時代後期の編年 (2) 1/2 銅鐸 1/6



図 3.3-3 弥生時代後期の編年 (3) 1/8

- 1 調査の概要
- 2 遺跡の調査
- 3 編年表
- 4 特殊遺物・遺物
- 5 出土の銅器類
- 6 銅器類
- 7 銅器類

3.4 古墳時代

廻間式

清須市廻間遺跡を標準として設定された古墳時代初期・前期前半の土器群（赤塚1990）。従来の小坂井町穴山遺跡、一宮市元屋敷遺跡をそれぞれ標準とした山式、元屋敷式（大塚1968）をほぼ包摂する。I～III式各4段階に区分され、その後、一宮市八王子遺跡SK73の土器群をもって、廻間I式0段階が追加設定され、西上免遺跡の土器群をもって廻間I・II式が再編されている。（赤塚1997）。

廻間式・松河戸式・宇田式

古墳時代前期・中期、廻間式・松河戸式・宇田式に相当する朝日遺跡（本報告分他）の土器を大略5段階に区分した。各段階は、S字甕・宇田型甕の消長、供膳器種の置換、装飾性の脱落等を指標とする。ただし、朝日遺跡では既調査分を含めて、段階区分を満足させる良好な土器群には恵まれていない。

古墳時代I段階は、廻間I式、朝日遺跡IX期（様相17・18・19）にほぼ対応する。この段階の土器群は比較的豊富であるものの、本報告の土器群から細分を提示するには至らなかった。前半は軽量薄甕としてのS字甕0類を含む多様な甕によって構成され、後半はS字甕A類が一定量組成するようになる。内彎志向、細部彎曲調整を相互に共有する多彩な精製器種群が盛行する。有段口縁甕、有段高杯、内彎長頸壺等の各器種には、局所的な加飾が施されることも多い。加飾広口壺を含めた広口壺は、体部が下膨れとなり、底部が突出する形状に変化する。

同2段階は、廻間II式、朝日遺跡X期（様相20）にほぼ対応する。S字甕はB類に変化し、主要な甕形式となる一方、単純口縁甕も一定量組成する。内彎志向は顕著でなく、細部彎曲調整は消失する。有段高杯の杯部下端の径は縮小し、全体に小型化する。甕、有段高杯などの加飾は簡素化、脱落する。

同3段階は、廻間III式、朝日遺跡XI期（様相21）にほぼ対応する。S字甕はC類に変化し、いわゆる山陰系口縁を付すものが加わる。平底甕や布留系を含めた丸底甕もわずかに組成する。有段高杯はより小型化する。小型丸底鉢、小型丸底壺、小型器台といった小型精製土器群が定着する。加飾壺として柳ヶ坪型壺が組成する。小型器台や二重口縁壺には多彩な形式が認められる。

同4段階は、松河戸式に相当し、朝日遺跡XI期（様相21）に後続する朝日遺跡XII期（様相22）として仮に対応させる。S字甕はD類に変化する。高杯は無透孔屈折脚に交替し、小型器台、二重口縁壺、柳ヶ坪型壺は段階的に消滅する。後半には宇田型甕1類が登場し、高杯は法量化する傾向を示し始める。その他、小型壺、中型の直口壺、有段口縁壺が組成する。

同5段階は、宇田式に相当し、朝日遺跡XII期（様相22）に後続する朝日遺跡XIII期（様相23）として仮に対応させる。主として貝殻山貝塚、二反地貝塚等の地点貝塚周辺に散在する既出の土器群を充てた。前半は宇田型甕2類を含む多様な甕によって構成され、後半は宇田型甕3類が主要な甕形式となる。小型壺はごく少ない。高杯は腕状杯部高杯が多い。後半には供膳器種が須恵器高杯・蓋杯に段階的に置換する。朝鮮半島系の土器が見られることも特徴的である。

松河戸式

春日井市松河戸遺跡を標準として設定された古墳時代前期後半・古墳時代中期前半の土器群（赤塚1994）。北名古屋市古墳遺跡を標準とした石塚式（大塚1968）を代替する。I式は、名古屋市月鏡手遺跡の遺構群、北名古屋市中之郷北遺跡等の層位資料等をもって、4段階に区分されている。II式とそれに後続する宇田式の前半は、名古屋市志賀公園遺跡等の土器群をもって再編され、I・II式を2段階の区分が提示されている（赤塚・早野2001）。なお、宇田遺跡の土器群は宇田式の後半にほぼ相当する。

宇田式

岐阜市宇田遺跡を標準として設定された古墳時代中期後半の土器群。安城市上条遺跡、知立市荒新切遺跡を標準とした上条式・荒新切式を代替する。宇田式の前半は、名古屋市志賀公園遺跡等の土器群をもって再編され、I・II式を2段階の区分が提示されている（赤塚・早野2001）。なお、宇田遺跡の土器群は宇田式の後半にほぼ相当する。

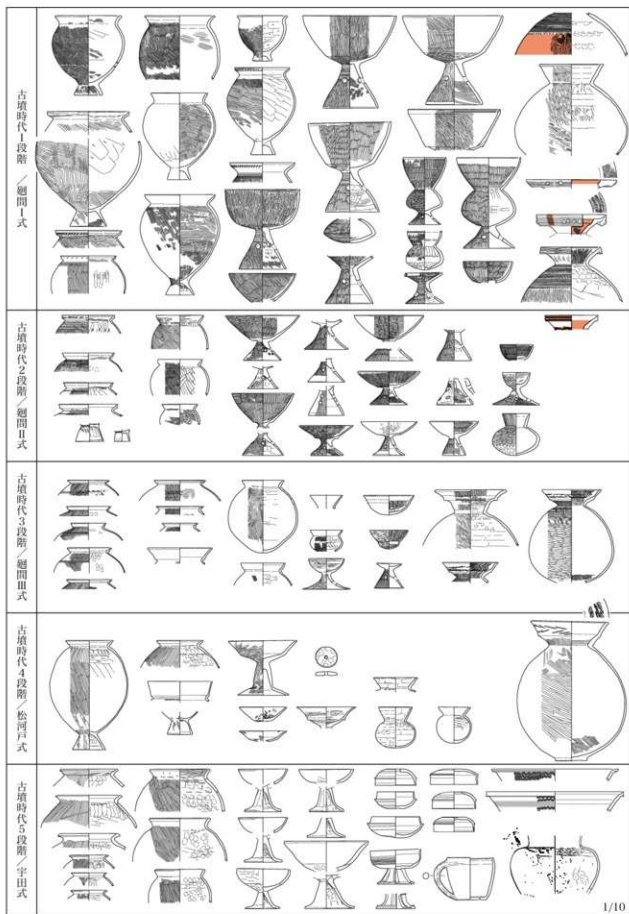
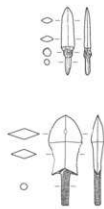
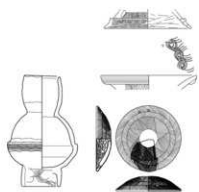


図 3.4-1 古墳時代の編年 (1) 1/10

古墳時代1段階 / 廻間1式



古墳時代2段階 / 廻間Ⅱ式



古墳時代3段階 / 廻間Ⅲ式



古墳時代4段階 / 松河戸式



古墳時代5段階 / 宇田式



図 3.4-2 古墳時代の編年 (2)

古墳時代1段階／廻間1式

古墳時代2段階／廻間II式

古墳時代3段階／廻間III式

古墳時代4段階／松河戸式

古墳時代5段階／宇田式

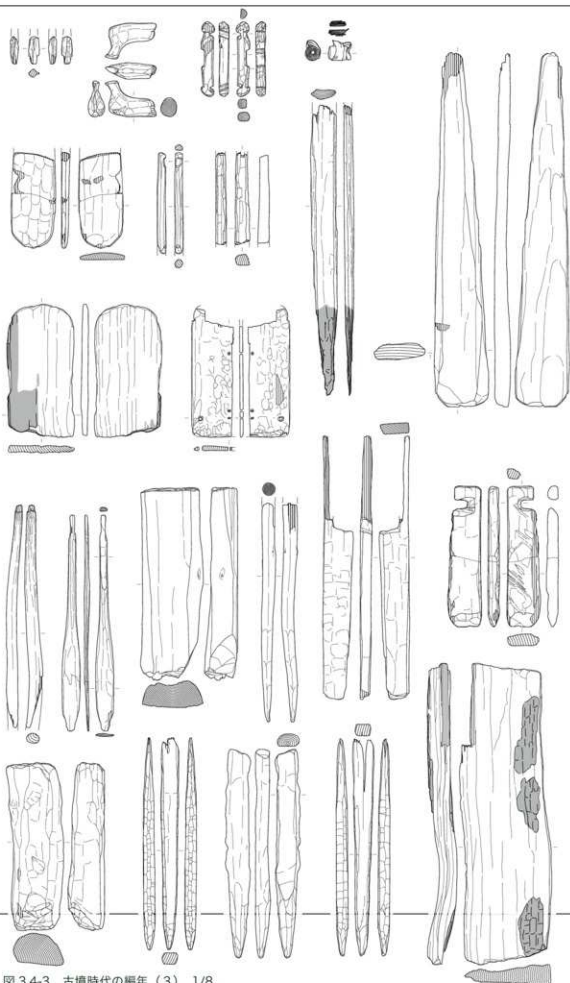


図 3.4-3 古墳時代の編年 (3) 1/8

4

特殊遺構・遺物

朝日遺跡を特色づけるモノ

■ 4.1 金属製品

朝日遺跡でのこれまでの金属製品を概観すると、現状では弥生後期を中心とした資料にほぼ限られ、これを著しく遡る資料は見られない。ただ名古屋市域で発見された石製銅鐸鋳型¹⁾の存在は、極く限られた製品に対して、弥生中期初頭段階からの金属器生産の可能性を想定させるものである。

朝日遺跡が所有する金属器の特徴として青銅製品の多様性が指摘できる。多量の銅鏝を除くと、巴形銅器・破鏡・筒状銅製品・銅鐸飾耳片・銅鐸・帯状銅釧・インゴットや銅滴等が確認できる。いずれも1・2点で数の多さというよりも種類の豊富さが注目される。

分布にも特徴が見られ、銅鐸と巴形銅器を除くと、おおむね北区画内およびその周辺部に集中して出土する。特に加工品・部分品が存在する点や、銅滴や土製品（鋳型状）の出土が加わり、やはり青銅製品の製作工房が北区画内に設定されていた可能性が高いと思われる。ところで、朝日遺跡での青銅製品の種類の多様性は、この地域がもつ青銅製品の受け止め方を具体的に表示しているものと言えよう。特定素材と特定形式を中心に青銅器が分布する通常の地域社会とは明らかに異なる。つまり地域を越えた多様な製品を受け入れ、その写しを青銅や土器・木製品といった多様な素材を視野に入れて作り出していったものと考えたい。なお銅鏝は、調査報告されているものが37点であり、その他の資料を加えると40点近くにのぼる。分布には特徴的なあり方が見られ、北区画の内郭区西溝と南区画東部に集中している。また銅鏝のカタチには北区画からは多様な銅鏝の形態が出土するが、南区画からはおおむね東海系銅鏝が多く出土する。区画内での部族社会のあり方を反映しているものと推定したい²⁾。

銅鏡は、山中Ⅱ式期に所属する破鏡（融龍文鏡）と廻間Ⅲ式期に所属するであろうS字文鏡（面径71mm）の2点が出土している。

次に鉄製品であるが、朝日遺跡ではほとんど出土しない素材であり、あるいは保存環境や使用形態などに起因する可能性も考えられる。いずれにしても明確な製品としては、有肩袋状鉄斧と刀子状鉄製品だけである。加えてやや扁平な小型の製品（ヤリガンナなどの工具類の一部）が存在する。なお袋状鉄斧³⁾は、弥生後期山中Ⅰ式期を降ることはない。

以上のように朝日遺跡からは多様な金属製品が発見されており、おおむね弥生後期での北・南区画を中心に分布する。

青銅製品

銅鐸	1
巴形銅器	1
筒状銅製品	1
銅鐸飾耳片	2
鏡	2
帯状銅釧	1
インゴット	1
銅滴	1
銅鏝	37

銅鏝

倭鏡

鉄製品

¹⁾ 野澤剛幸・伊藤正人編 2006 『埋蔵文化財調査報告書 54 朝日遺跡（第13・14・15次）』名古屋市文化財調査報告書 69

²⁾ 赤塚次郎 2007 『朝日遺跡における金属製品の分布とその特徴について』『朝日遺跡Ⅷ』愛知東洋文化財センター調査報告書第138集

³⁾ 村上恭通 2007 『朝日遺跡 O2Bd 区出土袋状鉄斧と東アジアの鉄斧製作技術』『朝日遺跡Ⅷ』愛知東洋文化財センター調査報告書第138集



図 4.1-1 朝日遺跡出土の金属製品分布

朝日銅鐸
四区製鉄所突線組 1 式銅鐸
東海洲、三道式銅鐸の前身鐸
鐸高 46.3cm、身高 33.2cm
身幅 (現状 26.3cm)
底部直径 (現状 23.4cm)
底部増径 16.2cm
総高 13.1cm、総孔高 3.5cm
総孔幅 3.8cm
舞長径 (現状 15.0cm)
舞直径 11.8cm
鍔部下幅 2.9cm

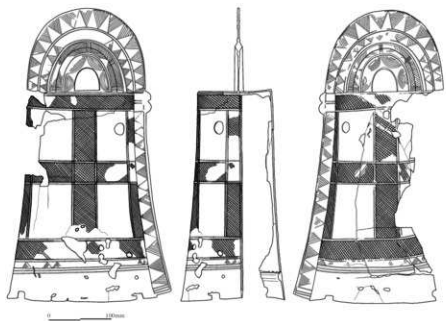


図 4.1-2 朝日銅鐸 1/6

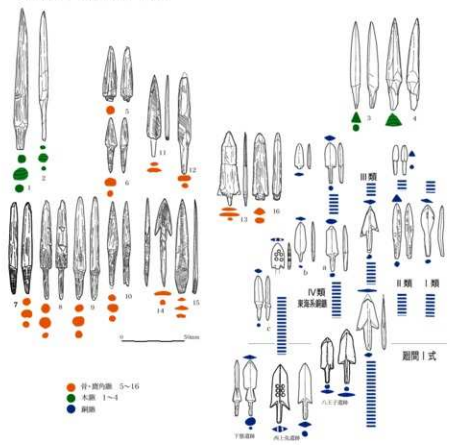


図 4.1-3 朝日遺跡 鉄形製品の変遷 1/3

図 4.1-4
1～38 は銅鐸で、6 が多孔銅鐸、
39 は巴形銅鐸、40・42 は青銅鐸、
41 は筒状銅製品、43・44 は銅鐸
耳片、45～48 は銅製品で、49 は
インゴットの可能性が高い、49 は
帯状銅器片、50～52 は鉄製品で、
50 は有肩状鉄片。

朝日遺跡出土の鉄形製品は、素材的に石製をのぞくと木製・骨あるいは鹿角製・銅製に区分できる。その中で木製鐵は中期前葉に供伴資料があり、中期後葉から後期にいたると骨・鹿角製が増加する傾向がうかがえる。朝日遺跡が存在する低地部においては、むしろ素材的に石や青銅に比べより優位にある素材と考えておきたい^{*1}。

*1 津波次郎 2007.4 「東海・沖積低地の弥生時代の武器とその素材」『稲作とともに伝わった武器』大阪府立弥生文化博物館図録 35

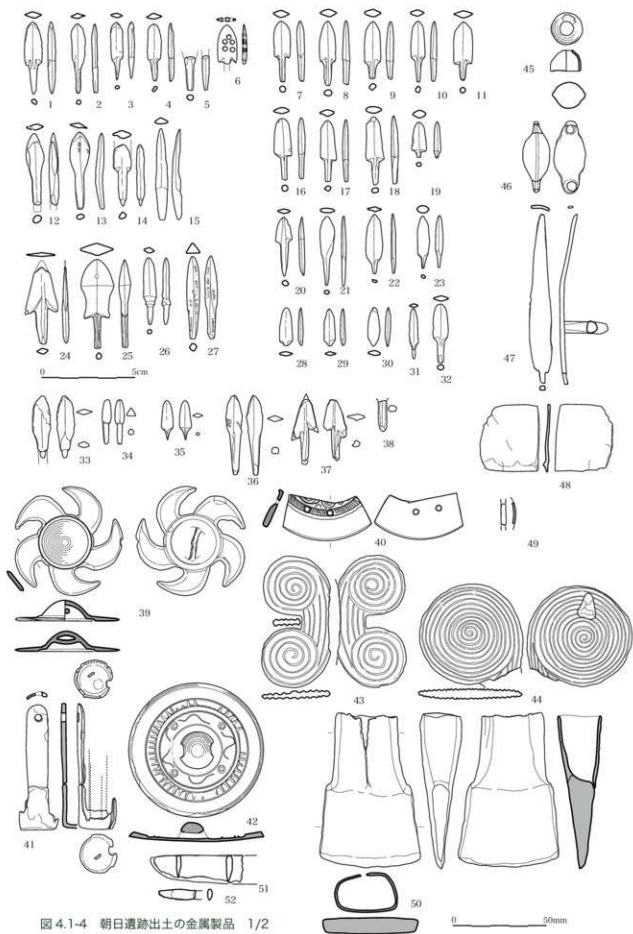


図4.1-4 朝日遺跡出土の金属製品 1/2

4.2 ガラス小玉と顔料

ガラス小玉

朝日遺跡より出土したガラス小玉は総数 306 個である。色調は水色、黄緑色、藍色があり、各色の個数は、水色 283 個、黄緑色 2 個、藍色 21 個である。遺構ごとの出土状況を確認すると、61D SZ126 では 74 個、63 区 SZ101 では 120 個と大きなまとまりがみられ、他の遺構では、99Ac SB02 で 7 個と桁違いに出土数が減少する。

図 4.2-3 に、まとまった出土状況を示した 2 つの遺構のガラス小玉の形状の分布図を示す。色調の違いによってまとまりが確認される。これらのガラス玉の作り方を比較すると、より強いまとまりを示す 63 区 SZ101 の試料は、気泡が螺旋状に分布するものが多く、61D SZ126 気泡が一列に線状に配列するものが多く見られた。このことは製作技法の違いによるものと考えられる。遺構の所属時期は、61D SZ126 が山中 I 式期、63 区 SZ101 が山中 II 式期である。

次に色調と化学組成との関係を見る(表 4.2-1)。水色と藍色では若干成分の違いがある。紺色を呈するものは、水色のものに対して MnO 、 Fe_2O_3 、 CoO 、 CaO が増える。また対して Al_2O_3 、 CuO 、 PbO が減る傾向が確認された。肥塚 (1995)¹⁾によると、 SiO_2 - K_2O 系ガラスにおいて Co が含まれるものは、コバルト 鉱石の影響を受けているとき、その原材料により Mn と Fe の比率が異なる可能性を指摘している。朝日遺跡で確認されている Co を含む藍色のガラス小玉は 15 個であり、遺構のまとまりは見られない。図 4.2-2 の分布図において青い点が出土地点となる。分布域は北部に多く見られる。遺構の時期は山中 II から廻間 I となる。

5 世紀頃のガラス小玉として烏帽子遺跡 (東海市)²⁾のもの 28 個、6 世紀末から 7 世紀のもので荒山古墳 (豊田市) のガラス小玉 68 点との化学成分の比較を行う。朝日遺跡では全ての試料が K_2O の多い特徴を示すのに対し、他の遺跡では Na_2O を多く含むものが多く、朝日遺跡で見られるような K_2O の多い試料は数個しか見られなかった。朝日遺跡の試料が 2 世紀頃と仮定するならば、5 世紀までの間に、ガラス小玉の製作技法や原材料に大きな違いが生ずるイベントがあったと推測される。特筆すべき試料として、06Bc 014SZ と 04Ac Ti より黄緑色の小さなガラス小玉がそれぞれ 1 点ずつ出土している。これらのガラスの成分は、Cu と Pb を多く含み、他の時期の遺跡からも出土しない成分を示している。

表 4.2-1 各時代のガラス玉の科学組成

	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	PbO	試料数
朝日遺跡	5.4	0.1	3.9	75.7	11.5	0.7	0.2	0.0	0.6	0.0	1.4	0.5	33/38
	6.8	0.6	1.2	74.0	11.4	1.6	0.3	2.0	1.9	0.1	0.0	0.0	5/38
烏帽子遺跡	22.6	3.1	2.4	64.9	1.2	3.9	0.2	0.1	1.2	0.0	0.1	0.1	18/28
古瀬田遺跡	20.4	0.7	7.7	64.9	1.7	1.9	0.5	0.1	1.1	0.0	0.6	0.3	8/28
古瀬田代前期	2.4	0.5	2.1	82.5	8.2	1.2	0.2	1.3	1.6	0.0	0.0	0.0	2/28
荒山古墳	17.7	3.0	4.4	67.8	1.4	4.1	0.1	0.1	1.0	0.0	0.1	0.1	48/68
古瀬田代前期	19.4	0.2	7.9	67.2	1.2	2.2	0.4	0.1	0.9	0.0	0.4	0.1	10/68
古瀬田代後期	0.6	0.3	2.9	82.6	10.3	1.0	0.2	1.0	0.8	0.0	0.0	0.0	3/68

*1 肥塚隆保 1995 「古代埋蔵物ガラスの研究」『文化財調査Ⅱ』奈良文化財研究所、929-967。

*2 小村美代子 2003 「烏帽子遺跡の土坑出土ガラス小玉。ガラス製勾玉の成分分析」。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 117 号「烏帽子遺跡Ⅱ」。愛知県埋蔵文化財センター、53-54。

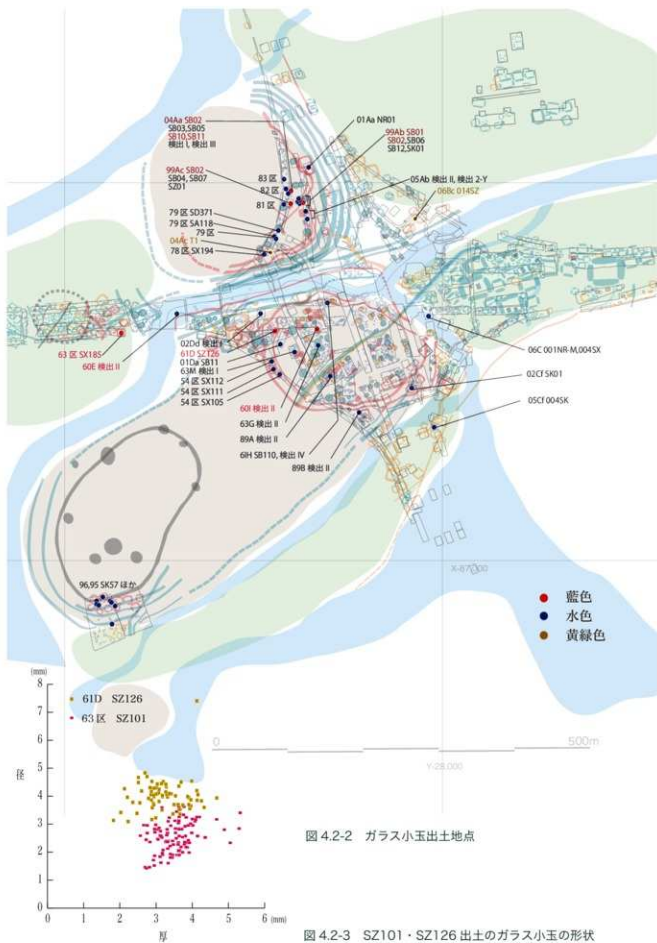


図 4.2-2 ガラス小玉出土地点

図 4.2-3 SZ101・SZ126 出土のガラス小玉の形状

赤色顔料

調査にともなって出土した赤色物質や赤色顔料が付着した試料についても、蛍光X線分析を実施した。分析試料は48点である。試料の内訳は、遺物に付着した赤色物質および遺構面から検出された赤色物質である。分析の結果、48点中47点がFeを多く含む物質であり、1点のみHgが確認された。Hgを検出した試料は05Ab区063SB d-436の高杯である。赤色物質はかなり大量に塗布されていたようで、高杯を取り上げた跡の土壌にも赤色物質が残存した。

パレススタイル土器

またこれまでの調査において、朝日遺跡からは赤彩を施したパレススタイル土器が大量に出土している。そこで、パレススタイル土器66点に塗布された赤色顔料を部位を違えて採取し、合計113点の分析試料に対し分析を実施した。その結果、Hgを含む赤色顔料はなく、すべてFeを多く含む赤色顔料であることが判明した。この赤色顔料はFeを多く含んでいることからベンガラであると推測される。このベンガラについては、ここ数年、濃尾平野北東部の大垣市金生山に産する赤鉄鉱を原料にしたとする説がささやかれている。根拠は金生山の赤鉄鉱にはAsおよびCuが微量ながら含まれていることから、これらをキーの元素として産地推定の根拠となすものである。朝日遺跡の分析結果を見ると、Asが含まれているものもパレススタイル土器の赤色顔料には見受けられたが、いずれも含有量が少なく、安定した検出状況ではなかった。このようなことから、朝日遺跡でみつまっているベンガラについて、金生山とのつながりを積極的に指示する情報は得られなかった。また、ベンガラとしての特定を行う場合は、蛍光X線による主要成分の分析以外に、電子顕微鏡などによる粒の形状観察が不可欠である。

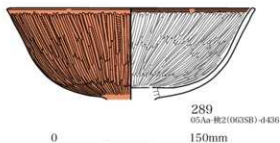


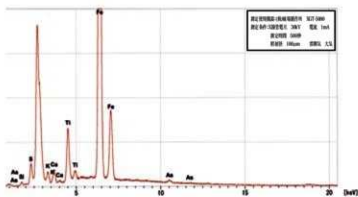
図 4.2-4 水銀朱付着土器



図 4.2-5 赤色顔料出土地点

00228 0P1 023 01-0408 00-1000

図 4.2-6 ヒ素が確認された試料



* 朝日遺跡 V(1994) 上 9

■4.3 筒形・鳥形土器

筒形土器



朝日遺跡からは、筒状・袋状の容器を土器に写したと想定される土製品が出土している。形状がほぼ推定できる資料として十数点が確認でき、筒形の容器状を呈するものが一般的で、口縁部は大きく斜めにカットされた形状を留める。供伴資料や外面裝飾文等から、その多くは弥生時代中期を中心 to 所属するものと考えられる。

最も新しい資料と考えられる図4.3-3の9は、竪穴建物に近接する土坑から発見されたもので、供伴する土器から高蔵式の新相から八王子古宮式に所属する。表面には鋸歯文と綾杉文が繊細に施されており、中央部や上部には、鹿を描いた文様帯が伴う興味深い資料である。高さ156mm幅66mmを測る。

筒形土器は形態的に二つに分類されており、1類は丸底で全体に膨らみのある球形を志向するもので、2類は体部底部に明瞭な平坦面を伴い、ほぼ直線的に近い体部をもつもの。表面には編物状を表現したものや鋸歯文等の直線文を組み合わせるものも見られる。また図4.3-3の5・6のように赤彩を施した資料も見られる。2・10には土器文様と共通する貝殻刺突文を組み合わせる特徴的な資料が存在し、そのことから中期中頃を中心とした作品であることがわかる。分布からは、南区画を中心に分布するようであるが、基本的には居住空間において使用された容器類と理解しておきたい。

鳥形土器

朝日遺跡から出土する鳥形土器は、大きく大小の二つのまとまりが見られる。100mm以下の小型の鳥形土器については、ほぼ形態や作りが同一で統一性が認められる。すなわち通常の土器底部と同様な円形のやや突出した底部をもち、その上部に中空の袋状を呈する鳥形を粗雑に作り付けるものである。さらに小型の60・70mm前後のものは特にその傾向が著しい粗製品である。一方で、やや大型の鳥形土器は形態が多様化するようであり、特に図4.3-2の1の資料は壺形土器の口頸部に、丁寧な鳥形の意匠を作り付けた興味深い資料である。

分布における特徴は明確ではないが、筒形土器と比較すると、逆に居住域からの出土というよりも、その周辺部での発見が多い傾向がうかがえる。また南区画からの出土は少なく、逆に北区画からの集中的な出土は留意したいところである。特に弥生後期に設定された内郭区画溝と後期環濠との間にまとまりが認められる。すでに指摘されているように¹⁾、供伴資料や分布等からも、鳥形土器の製作は中期末葉から後期前半期に中心を置くものと想定でき、画一化された小型の粗製品については、八王子古宮式から山中I式期を中心とするものと考えておきたい。

¹⁾ 宮澤健司編 1994『朝日遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集

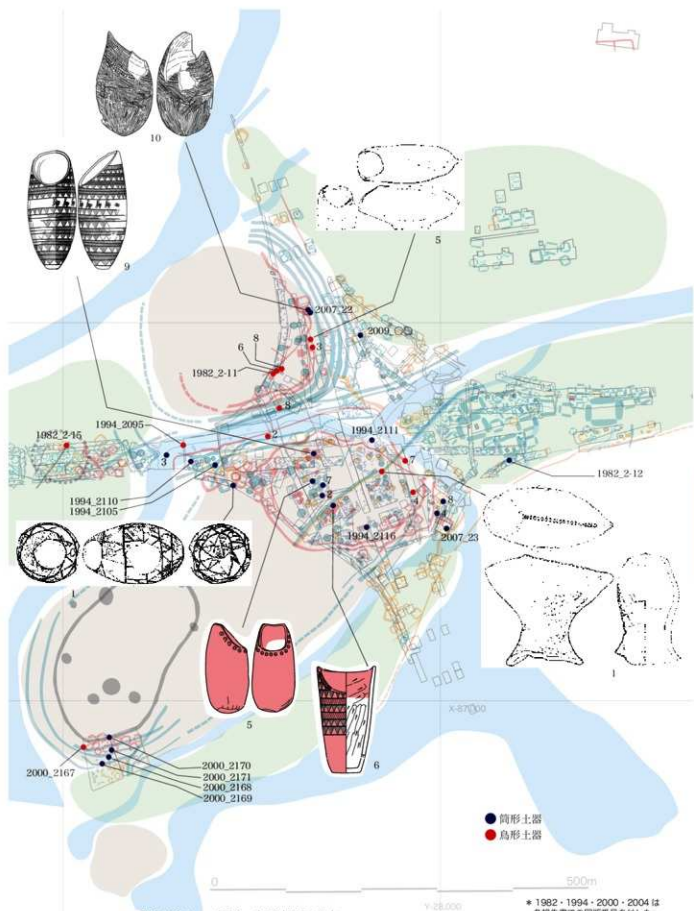


図 4.3-1 筒形・鳥形土器の分布



筒形土器 (4.3-3の6)



筒形土器に刺まれた跡 (4.3-3の9)



鳥形土器 (4.3-2の1)

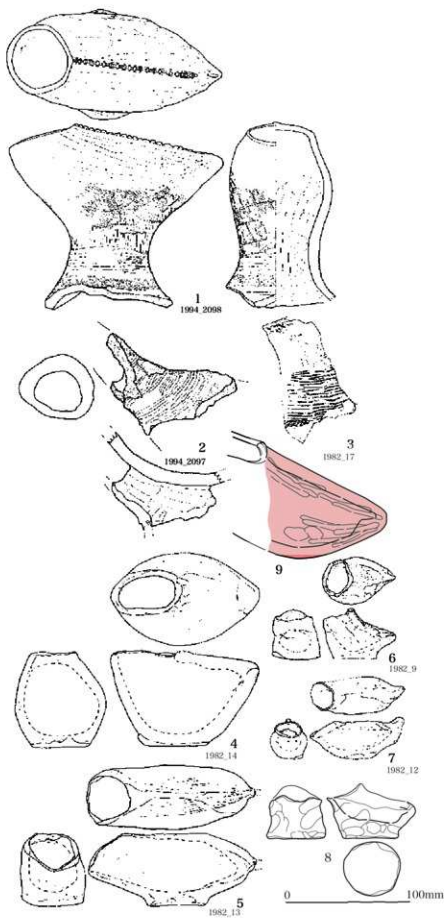


図 4.3-2 鳥形土器 (1/3)

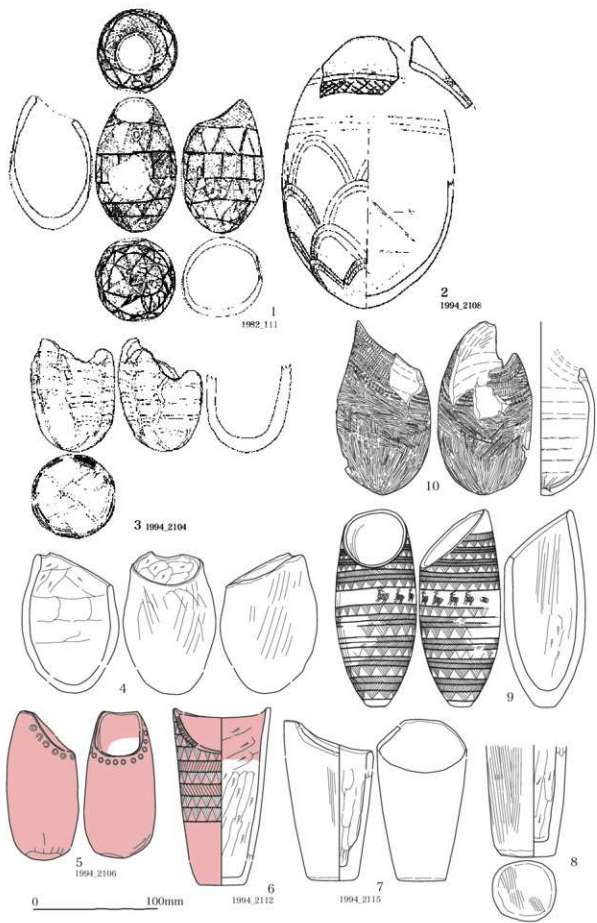


図 4.3-3 筒形土器 (1/3)

■ 4.4 特殊土器・土製品、絵画・線刻文土器

ここでは、後期以降の独特な意匠をもつ土器・土製品と、絵画・線刻文と総称される意匠をもつ土器を扱う。

後期初頭から前葉に相当する特殊な土器・土製品として、貝輪形土製品、合子形土器等がある。前者は南海産？貝輪、後者は木製容器に関連することは明らかで、両者は材質転化を経て、赤彩の手法を駆使して製作される点において共通する。

貝輪形土製品は、北区画を画する環濠帯付近（04Bb区）において出土した。表面は貝表上の放射肋を模倣するように放射状に赤彩され、表面の外縁部、裏面、内孔側面は全面が赤彩される。なお、放射状に赤彩される部分には、彩色前のごく細い線刻がある。岐阜県今宿遺跡¹に類例がある。合子形土器は、遺跡南西の貝殻山貝塚地点南（新資料館地点）の墓域（95区）において出土した。蓋の上面は圓線と綾杉文によって装飾される。身は体部が直立し、圈脚装飾を伴う。蓋と身の外面全面と身の体部内面、蓋の口縁部内面は赤彩される。同様の土器は、南区画周辺（78緊急調査区）においても出土している。他の遺跡では、愛知県川原遺跡等²で確認される一方、同鹿乗川流域遺跡群、岡山県百間川兼基遺跡³等の土器は、材質転化の対象とされた木製容器が異なっていたと考えられる。他に朝日遺跡では、精製の木製高杯と関連すると思われる高杯も散見される。

また、赤彩の手法を用いて製作された他の特徴的な土製品として、摘み蓋状のもの、把手状のもの、筒形のもの（4.3参照）、樽形のもの等がある。これらの土製品は、北区画とその周囲にやや多く分布する傾向がある。同時期、北区画の南東入口付近に涙滴状の透孔がある赤彩大型器台、黒色の渦文を筆彩する壺、赤黒の円文列を配するパレス壺（04Ab区）といった特徴的な意匠をもつ土器が集中することをも考慮すると、北区画周辺では（瀬戸内・日本海方面等との）広域交流を背景とした意匠の模倣や材質転化が盛んに試行されていたと考えられる⁴。材質を違えて表現が共通する人形製品も、同時期の意匠の扱いに共通の背景があったことを示唆する。

後期以降の土器に描かれた絵画・線刻文は、人面文、弧帯文、その他の記号文等が主体である。絵画・線刻文土器は、中期から継続する絵画的な意匠を除いて、南区画内にその多くが集中するが⁵、弧帯文との関連が深い意匠がその例外となる点は興味深い。その一例である西墓域に近い谷から出土した弧帯文パレス壺は、廻間Ⅱ式に相当する。

帰属時期は未詳ながら、複合鋸歯文と綾杉文を上面に配した蓋が南区画南東において出土している。この蓋も、他の材質の容器との関連が想定される一方で、類似の複合鋸歯文と先述の弧帯文の両者は、韓国忠南大学校博物館所蔵の有蓋形土器⁶にも採用されていることは注目される。これらは、廻間Ⅱ式段階の広域交流を示唆する意匠である可能性がある。

特殊土器・土製品

*1 春日井勉編 1998『今宿遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター調査報告書第37集

*2 赤塚次郎編 2001『川原遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター調査報告書第91集

*3 神谷真佐子編 2005『鹿乗川流域遺跡群III 安城市古井町上横下・下横下地区』安城市埋蔵文化財調査報告書第15集

*4 藤上宗雄編 2003『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集

高畑知功編 1982『百間川兼基遺跡1 百間川今宿遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書51

*5 正岡勉夫編 1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書56

平井勝編 1996『百間川兼基遺跡2 百間川今宿遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書114

絵画・線刻文土器

*5 中川真文 1982『壁刻の付く土器』『朝日遺跡』愛知県教育委員会

*6 朴淳登 2000『加那と漢城百済』『加那と百済』金海市

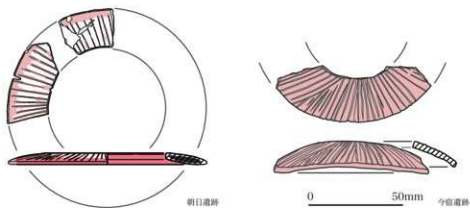


図 4.4-2 貝輪形土製品とその類例

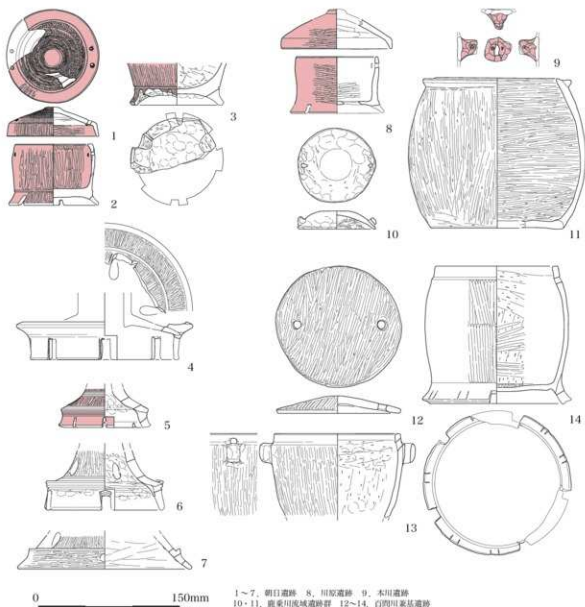
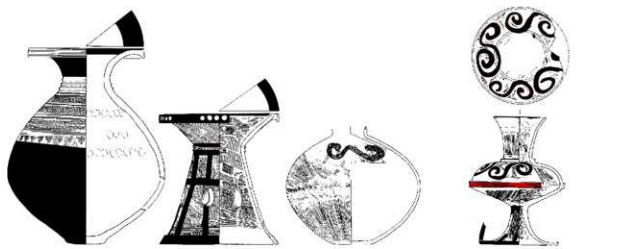
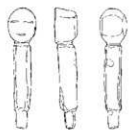


図 4.4-3 木製容器に関連する土器の諸例



朝日遺跡北区西南東地点の土器

白河川尾尾島遺跡井戸16の黒文彩色台付長頸瓶



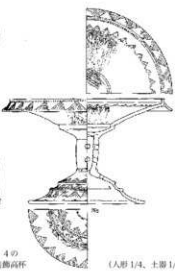
朝日遺跡の人形木製品



朝日遺跡の黒文文広口壺



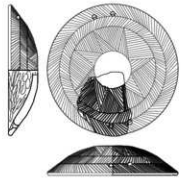
白河川基基遺跡土器部より3・4の
人形木製品と黒文文樽形土器・装飾高杯



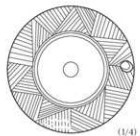
(人形1/4、土器1/8)



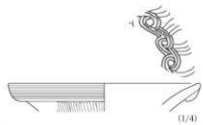
朝日遺跡の樽形土器



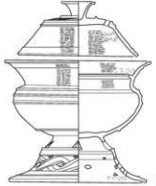
朝日遺跡(複合黒文文と幾何文)



(1/4)



(1/4)



(1/8)

図 4.4-4 特殊な意匠とその関連資料

朝日遺跡(弧帯文)

忠南大学校博物館蔵有蓋形甲土器
(複合黒文文と弧帯文)

4.5 円窓付土器

円窓付土器

焼成後の小孔



図 4.5-2 29



図 4.5-2 29



図 4.5-3 8



図 4.5-3 8

1) 高橋信明 1995 「円窓付土器考」『考古学フォーラム』6 愛知考古学談話会、伊藤淳史 2002 「円窓付土器からみた弥生時代の交流」『川から海へ1』(平成14年度秋季特別展図録)一宮市博物館ほか

2) 例外もある。例えば北居住域の東側に縦列配列する墓域(貝田町式~高蔵式)と石製銅鐸型が出土した宇田荘地点(朝日式~高蔵式)がある。これらの墓域は貝田町式以降から継続することに注目すれば、円窓付土器の集中する4ヶ所とは異なる墓域と言えよう。

円窓付土器は朝日遺跡の中期後葉を代表する土器である。貝田町式に出現し、山中1式に消滅する、体部上位に楕円形の孔をもつ土器である。中心となる時期は貝田町式終末から高蔵式である。形は壺形土器に類似するが、独自の形式を持ち型式変化を遂げる。装飾的な特徴はほとんどなく、口縁部と頸部にわずかな紋様を加え、ミガキ調整を体部下半の屈曲部付近に施す程度である。したがって、他の器種と比べると独特な器形や簡素な紋様構成がかえって目を引き、抽出しやすい。

高橋信明や伊藤淳史らの集成から次の指摘がある。尾張平野を中心に出土し、特に朝日遺跡の出土頻度は他の遺跡に比べて桁外れに高い¹⁾。現在は300点を超す。今回は破片資料を除外した完形品を中心に朝日遺跡のなかでどこで出土する傾向があるか、あるいは出土地点から一体どのような使用が想定できるのか、分布図から抽出してみよう。

一見して読み取れるのは、居住域からの出土が極端に少ないことであろう。次いで25点出土した貝殻山貝塚南地点が目にとまる。少し細かく見ていこう。まず、貝田町式終末から高蔵式にかけて展開する墓域とその周辺に偏在する傾向がある。貝殻山貝塚南地点は墓域とその北側に展開する環濠帯を中心に出土している。南居住域周囲に3ヶ所集中する地点がある。居住城南側と北西に展開する墓域、さらに竪穴住居と方形周溝墓が接近している東側である。最後にもう1ヶ所、南居住域と谷を挟んで対岸に位置する北居住域の環濠帯周辺がある。北居住域内の調査が進めば、より明確な分布が判明するであろう。

ところで、墓域および墓域の端に円窓付土器が集中することを指摘する一方で、朝日遺跡の大規模な東西両墓域から出土しないことは見過してはなるまい。つまり、朝日式から貝田町式を中心に連続と続く墓域では円窓付土器が出土しない。逆に貝田町式終末から高蔵式の小規模な墓域に円窓付土器を伴うと言えよう²⁾。

特徴的な出土を示す例としては、2次調査SX104から出土した2例がある。山中1式に比定できる方形周溝墓の供献土器の可能性、さらに朝日遺跡としては最後の円窓付土器であると指摘できる。

円窓付土器の使用痕跡を2点取り上げる。

第1として焼成後穿孔が小さく1ヶ所ある個体に注目する。今回確認できたのは6点と全体数からすれば決して高頻度ではない。しかし、使用痕跡としては方形周溝墓から出土する細頸壺などの底部付近に穿たれる1cm前後の小孔と類似することを指摘しておきたい。円窓付土器の場合は円窓のすぐ近くにある、つまり体部上~中位に穿たれることが多い。穿孔の位置に相違点があるものの、焼成後に小孔を穿つ点で共通する。

第2として器面に「風化痕」が認められる完形品に注目する。土器の表



図 4.5-1 朝日遺跡出土の内窓付土器分布

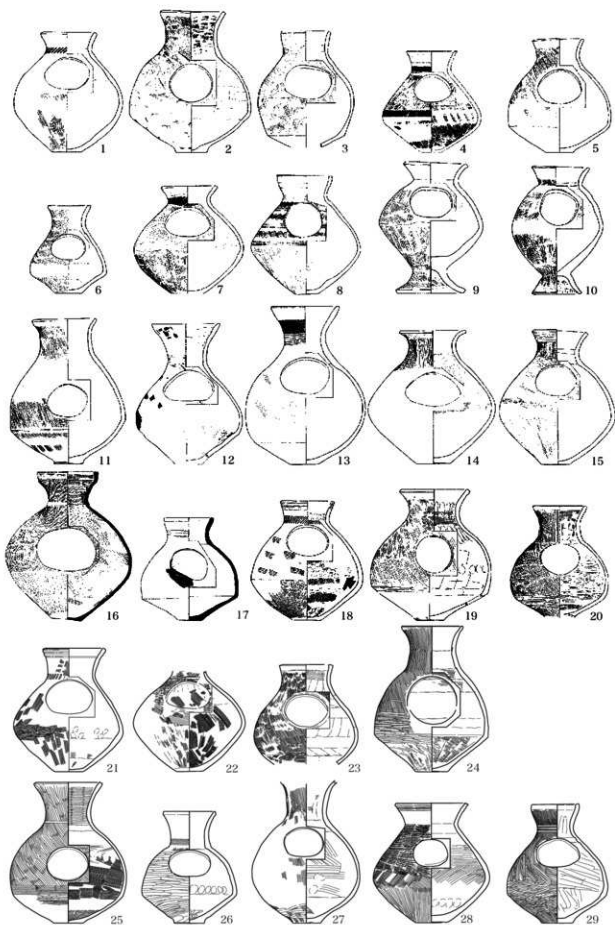
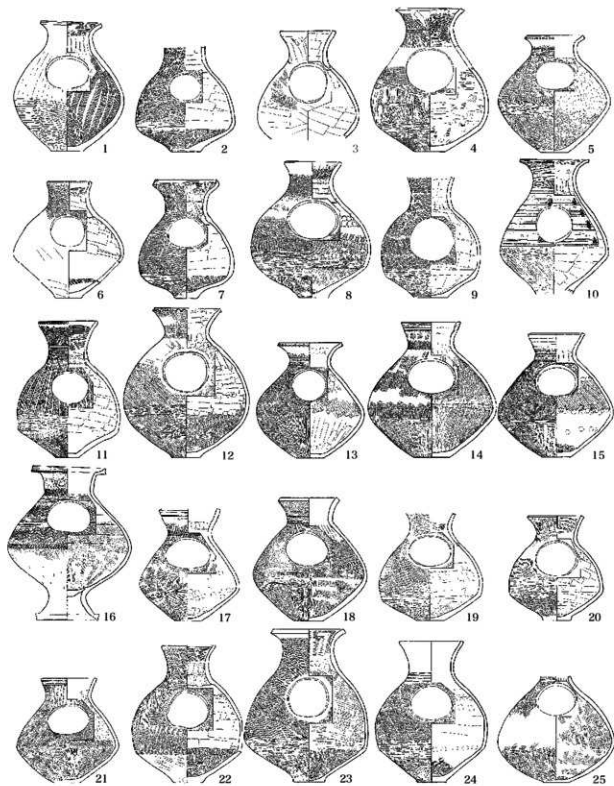


図 4.5-2 朝日遺跡各所出土の円窓付土器 (1/8)



0 300mm

図 4.5-3 貝殻山貝塚南地点の円窓付土器 (1/8)



図4-5-3 1



図4-5-3 11

面の凹凸、調整などが剥離している状態は様々な要因が想定できる。いわゆる「ローリング」を受けた土器、流水などによって表面が削れ調整痕をはじめ土器片の端が丸みをもつ。この場合、土器の内外面が摩擦することが多い。一方今回注目した「風化痕」は、土器表面に3mm前後を測る不定形の浅い凹みが外面全体に広がる状態を指す。さきの例とは異なり、内面が剥離することはない調整痕など観察できる^{*)}。いまだ「風化痕」の定義が不確定ではあるが、使用状況としては、墓への供献を典型例とする雨風にさらされた屋外などへの放置状態を想定しておく。

以上、2点の使用痕跡と遺跡内での偏在する出土状況から、墓域およびその周辺での使用が浮かび上がる。墓域内で出土する場合は供献土器の可能性が高い。一方、墓域と集落域の間、環濠帯に代表される廃棄をどのように捉えたらよいか。この点は伊藤淳史の予察が参考になる。伊藤は独特の器形でありながら、外来要素である凹線紋系土器の口縁部紋様を採用したり、体部下半の屈折部など来器種と共通した技法をもつといった「こだわり」のなさを指摘する。つまり「出土量の多さや出土状況の普通さをも考慮すると、むしろ、日常性や継続性といった言葉で説明されるような役割」を想定している(伊藤2002)。

私は、伊藤の指摘する「土器製作上の流動的かつ独創的な器形」について賛同する。しかし、「日常性や継続性」については異なる側面を強調しておきたい。それは墓との関わりである。円窓付土器を日常的、継続的に墓地と居住地の往復で使用していたとするならば、ある個体が不用になれば廃棄されるであろうし、墓地への長期間放置もあろう。ここでは居住地からの出土が極めて稀である点を強調すれば、墓地あるいは墓地に隣接する空間に出土する付帯条件にもなる。そして、朝日遺跡が発信地であることは出土量から明らかであろう。つまり朝日遺跡の仮説が他の遺跡においても重要な参考例となりうる。

円窓付土器の出土遺跡を取り上げていく。

まず尾張平野に視点を広げてみよう。高蔵式前後の尾張平野部を中心に出土する。朝日遺跡に隣接する阿弥陀寺遺跡は8点、森南遺跡は2点、大洞遺跡は3点、一色青海遺跡は2点出土している。出土量としては阿弥陀寺遺跡がやや多いものの、朝日遺跡に匹敵する量ではない。むしろ朝日遺跡に集中して出土し、周辺遺跡に散見することが、円窓付土器の偏在する出土を物語っているようだ。

次いで名古屋台地部に目を向けると、高蔵遺跡が目玉になる。円窓付土器が最初に出土した遺跡としても著名であるが、遺跡の実体、特に貝田町式から高蔵式にかけての遺構と遺物が極めて少ない。ところが円窓付土器の完形土器は4点以上出土していることに注目しておきたい。名古屋台地から庄内川・矢田川水系の沖積地にかけての遺跡からも1点あるいは数点している。その中で西志賀遺跡(平手町・志賀公園を含む)の6点は注目できる。これらの遺跡から出土する円窓付土器が朝日遺跡で製作されたと

*1 今後この状態について、「風化」に起因する痕跡を明確にする必要がある。例えば円窓付土器に限らず、沖積地の極めて遺存状態の良い土器の中に外部のざらついた土面の含まれている場合がある。いずれにしても、「風化」と認識できる状態がどのような環境のもとに、どのくらいの期間あったのか、検出する手立てを導き出さねばならない。したがって、「風化」状態が前提の議論であることを断っておく。

判断できれば遺跡間の交流を解く鍵になろうが、そう簡単ではない。

矢作川流域に目を向けてみよう。鈴木とよ江の集成に拠れば、三河地域の円窓付土器（鈴木A類：焼成前穿孔をもつ土器）は8点ある¹。そのうち2点は後期山中式併行なので除外すると、すべて矢作川流域の遺跡から出土し、高蔵式の凹線紋系土器と考えられることから、尾張平野からの搬入品の可能性が高い。参考例として、焼成後穿孔をもつ土器（鈴木B類）が鹿乗川流域遺跡群では方形周溝墓の一角にまとまって出土している。円窓付土器に焼成後穿孔の土器も含めるべきかは意見の分かれる所だが、鈴木指摘するように三河地域の場合は「円窓付土器とそれを模倣しての行為」とする考えに傾聴しておくべきだ。そして鹿乗川流域遺跡群のように墓域出土例が多いことは朝日遺跡における完形品出土地点と共通項が見出せる。

近畿地域の出土例を見ていこう。伊藤による集成（伊藤2002）以降若干類が増え、14例ある。姫路市八代深田遺跡の1例を除き、すべて高蔵式併行期の在来品であるという。分布上で興味深い点は、大方の出土例が滋賀県野洲川下流域を介しているところである²。近畿の出土例は朝日遺跡からの出土量がもっとも多い高蔵式併行期の円窓付土器である点に注目しておきたい。

最後に、朝日遺跡出土の分布図と使用痕跡から想定できる円窓付土器の特徴を整理しておこう。

1 円窓付土器は墓地あるいは墓地に隣接する地点で出土することが多い。特に、貝田町式終末から高蔵式に形成された小規模な墓域およびその周辺から出土することが多い。

2 円窓付土器の使用痕跡として2つの指摘をした。1つは、焼成後穿孔が小さく1ヶ所ある個体に注目した。墓地の供献土器にみられる穿孔と共通した意図が想定でき、円窓付土器の使用法を解く事例である。もう1つは、「風化痕」をもつ個体に注目した。長期間にわたり、風雨にさらされた状態が考えられ、廃棄というより放置されたと指摘できる事例を含む。

3 以上の2点から、居住地と墓地との日常的な持ち込みと持ち帰り、つまり反復行為を想定し、改めて墓地への使用頻度の高さを指摘しておく。破片として他器種の土器と雑多に出土するのは破損した円窓付土器と考え、完形品が墓地および隣接する地点からの出土するのは供献あるいは長期間放置などを可能性として指摘した。

4 朝日遺跡に特徴的な文物として特筆すべき土器であることは言うまでもない。隣接する遺跡あるいは矢作川流域や近畿への円窓付土器の拡散期が瀬戸内起源の凹線紋系土器の定着期、つまり高蔵式の段階であることは、この段階が朝日遺跡の集落変遷を捉える上で大きな節目であることを付言するものである。

*1 鈴木とよ江 2007 「土器に窓を穿つこと」『地域の多様性と考古学』（青柳洋治先生退職記念論文集）建山閣

*2 近畿の事例と所見は伊藤厚史氏にご教示いただいた。また、一部実測図の原因も提供していただいた。

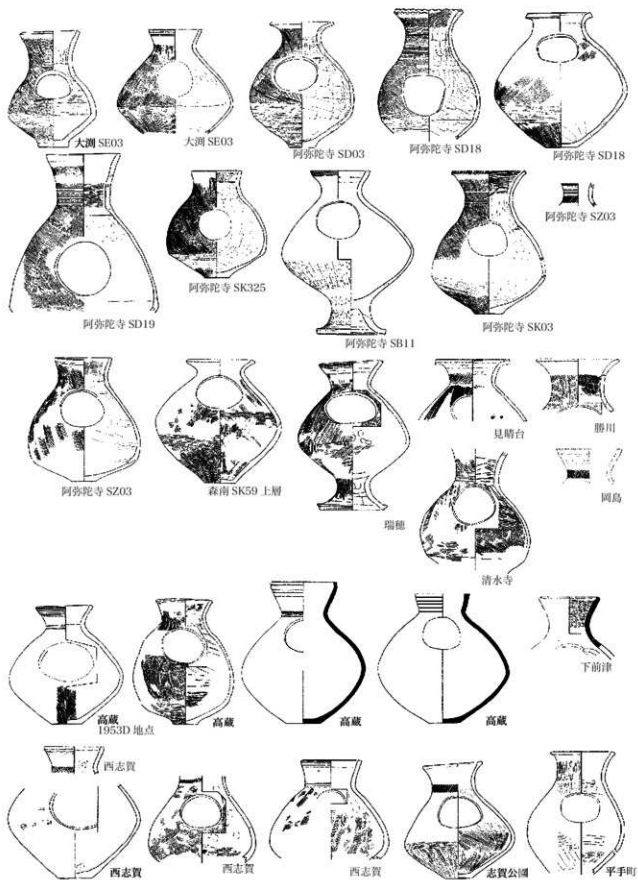


図 4.5-4 愛知県内出土の円窓付土器 (1/8)

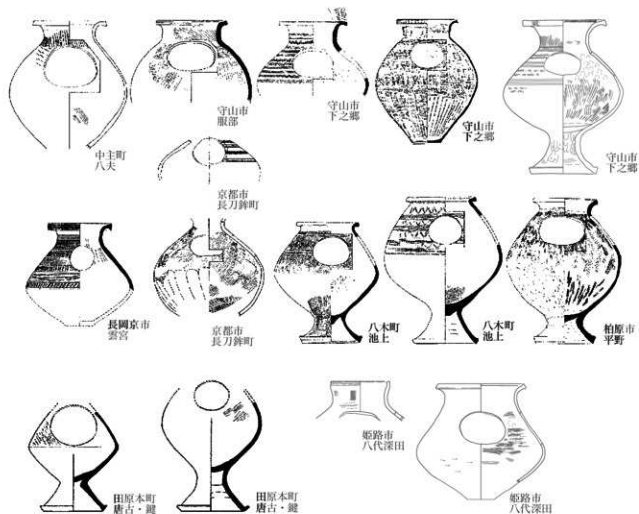


図 4.5-5 近畿出土の円窓付土器 (1/8)

0 300mm



■ 4.6 台盤状土製品

台盤状土製品



A類



B類



C類



D類



R類

1/6

森 1996a の分類を基本的には踏襲している。R類については森の指摘する「底脚転用支脚」（森 1996）のことである。転用品であるから参考資料として集成に追加した。

朝日遺跡の中期を代表する土製品として、台盤状土製品がある。今川焼（回転焼）と大きさや形が酷似する中実のもの（A・B類）と側面観が逆台形でコップを上下逆にしたもの（C類）、そしてドーナツのように環状のもの（D類）、大きく3つに分けられる。朝日遺跡2次報告では土器づくりの回転台あるいは作業台として想定されていた¹⁾。その後、台付甕の出現期との因果関係から甕底を持ち上げる台盤あるいは脚台として使用したとする森泰通の一連の研究が最も指示されている²⁾（森 1989 ほか）。

以下、森の分類（左図参照）をもとに朝日遺跡出土資料を概観する。今回報告する資料を合わせて341点³⁾となった。もちろん1つの遺跡から出土する点数では群を抜いている。A類が圧倒的に多く、全資料341点、約8割271点を占め、C類の38点が次ぐ。B類は限りなくA類に近いC類との中間形態で、朝日遺跡以外に2遺跡しかない。したがって、少数派のD類とR類を除けばA類とC類に二分できる。そして型式学的にはA類からC類への変化が想定できる。朝日式に遡る可能性もあるが、共存資料が確定しているのは、名古屋城三の丸遺跡SB101など貝田町式1期例である。終末は高蔵式と考えられる。そして共存資料からC類は凹線紋系土器の出現期以降と判断できるので、C類がA類より後出することは明らかである。

朝日遺跡内では、偏在して分布する傾向が見て取れる。まず、貝殻山貝塚南地点をみてみよう。全体の約3割近くに相当する112点がこの地点から出土している。次いで目に留まるのが、南北居住区の間を走る谷Aが東西方向から南へ屈曲する地点である。右岸はA・B類のみが出土するので、貝田町式のみと想定できる。また、この地点に朝日式末の玉作関連遺構が重なることを付記しておく。左岸は谷岸沿いに展開する朝日～貝田町式の溝群周辺に多い。この辺りは骨角器の優品が多く出土している点も注目しておきたい。貝層を伴う巨大な廃棄処分場であったともいえるが、谷Aを挟んだ両岸は朝日遺跡のなかでも特別な「生産と廃棄」空間であった可能性がある。南居住地からの出土は散漫としているが、北居住区は調査面積の割合からすると比較的多い。最後に、出土しない地点を指摘しておく。それは東西の墓域、そして北居住区と谷Aに挟まれた朝日遺跡北東地区の3地点である。

視点を他の遺跡に向けてみよう。出土点数の多い遺跡は浜松市角江遺跡71点、伊場遺跡群（梶子北・梶子北三永・中村）53点、阿弥陀寺遺跡17点と続く。点数の多い遺跡は出土地点が集中する傾向にあるようだ。角江遺跡の場合はほぼ全資料が自然流路SR01の出土である。朝日遺跡以外にも偏在して出土する傾向が予測できる。共存資料から朝日遺跡で指摘したA類とC類の時期的傾向は梶子北遺跡（A類のみ）と角江遺跡（A

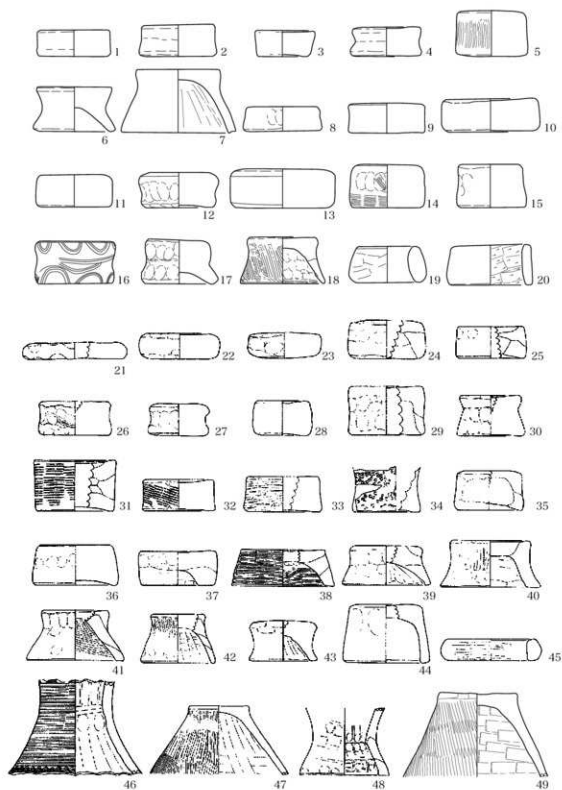
*1 中川真文 1982 「台盤状土製品」、「朝日遺跡」、『愛知県教育委員会』

*2 森 泰通 1989 「台付甕の出現」、「古代文化」41-11 古代学協会、森 泰通 1996a 「台盤状土製品から台付甕へ」、「甕と蓋・そのデザイン」考古学フォーラム、森 泰通 1996b 「台付甕の発生と消滅」、「考古学ジャーナル」No.409 ニュー・サイエンス社、森 泰通 1998 「台付甕の出現Ⅱ」、「橋本彰一先生古史学論文集」同刊行会真跡社

*3 森が不明として扱った破片資料は暫定的にA類とした。したがって、B類とC類を含む可能性がある。



図 4.6-1 台盤状土製品出土位置図



1982年報告(1~7)
朝日遺跡V報告(8~20)
朝日遺跡VI報告(21~49)

0 150mm

図4.6-2 台盤状土製品集成1：朝日遺跡(1/4)

類とC類)からも追認できる。台盤状土製品は、出土遺跡に限られている^{*1}。つまり朝日遺跡と関わりの深い遺跡から出土するようである。例えば稲沢市一色青海遺跡はR類2点出土しているが、A類とC類がない。

台盤状土製品は機能面を重視した森の示した見解とは別の側面、つまり朝日遺跡オリジナルの製品「朝日ブランド」として位置付けが可能である。紋様などの加飾がほとんどない単純な形であることは裏腹に、極めて特殊な出土傾向が予測される。今後の資料増加は朝日遺跡との関係を考えてみていく必要がある。

表 4.6-3 台盤状土製品
出土遺跡一覧表

	A	B	C	D	R	
朝日	271	21	38	3	8	341
阿弥陀寺	8	1	7	1		17
森南	1		1			2
西志賀	3					3
名城三の丸	3					3
高蔵			1		1	2
勝川	1		6			7
岡島	2					2
篠栗			1	1		2
東前	1					1
角江	25	1	44	1		71
梶子北三永	9					9
梶子北	39					39
中村	5					5
符監名	1					1
野原	2					2
鶴松	10					10
新本西原	1		4			5
加瀬台	1					1

*1 石黒立人 2008 「貝田町式土器
原産」「生産と流通の民族学・考古学」
(南山大学人類学博物館オープンリ
サーチセンター-発掘部会公開研究会
資料)

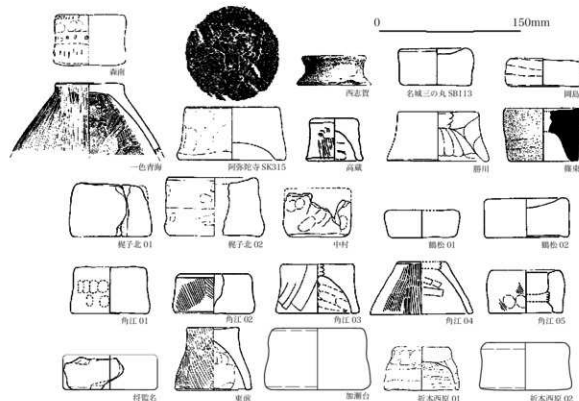


図 4.6-4 台盤状土製品集成 2 (1/4)

■4.7 固定鉆・ヤス

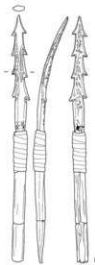
朝日遺跡におけるポイント状の骨角製刺突具には、固定鉆とヤスがある。両者とも一般に漁具と考えられているものであるが、特にヤスに関しては、狩猟具としての使用の可能性も考えられるものが含まれている。

固定鉆は、両側辺に人為的な逆棘が施されているものである。すべて鹿角製であり、鹿角半截材を素材としている。朝日遺跡の事例は弥生前期から中期後葉の間に属すると考えられる。弥生前期に属するものとしては、貝殻山貝塚地点出土例(10)がある。片側側辺のみに連続した逆棘を6カ所施したもので、他の資料と比較するとやや異質な感がある。中期前葉から中葉に属するものが資料として最もまとまっている。この時期には法量的に大きい資料が存在しており、なかには長さ10cm以上・最大幅2cm以上を越える事例もある。最大厚を測る部分での断面形状は、扁平な楕円形あるいはカマボコ形を呈している。使用による磨滅も著しくなく、かつ出土状態も全形を留めている資料が多い。柄付きの事例が1例出土している(1)が、この事例および他資料の基部形状からも、鉆頭は単体での装着が基本ではなかったかと考えられる。中期後葉になると、それまでの時期と異なり、法量の大きい事例は少なくなること、翼状の逆棘(9・12・13)が出現すること、欠損資料が多くなることなどが、特徴として挙げられる。朝日遺跡において、東海地域で特与とされる翼状の逆棘を呈するものが固定鉆全体では少ない傾向にあるが、ひとつには資料の帰属時期によるのであろう。

一方、人為的な逆棘のない刺突具として、ヤスがある。ヤスにはシカ中手・中足骨を中心とする管状骨製のものとエイ尾棘製とがある。シカ管状骨製においては、細身で幅・厚さが均一、かつ長い資料の存在が特徴的である(21・22)。このような全体の形状は、装身具類と考えられているヘアピンの様相に酷似しており、同一素材による複数器種の製作を窺う事例として重要である。なお、使用による磨滅・欠損や再加工の結果の法量変化に関しては、エイ尾棘製および鎌と呼ばれる刺突具類をも含めて対比した検討が必要であろう。

両器種ともに加工痕の検討が大きな課題として残されている。固定鉆では、引っ挿くような筋状の加工痕を残すものがあり、また稜線が明瞭な加工痕も実際存在する。器面調整からは使用工具と動作の検討が行なえる可能性を有しており、石器・金属器やその他の工具など、詳細な観察・検討が今後も必要となろう。

固定鉆



ヤス



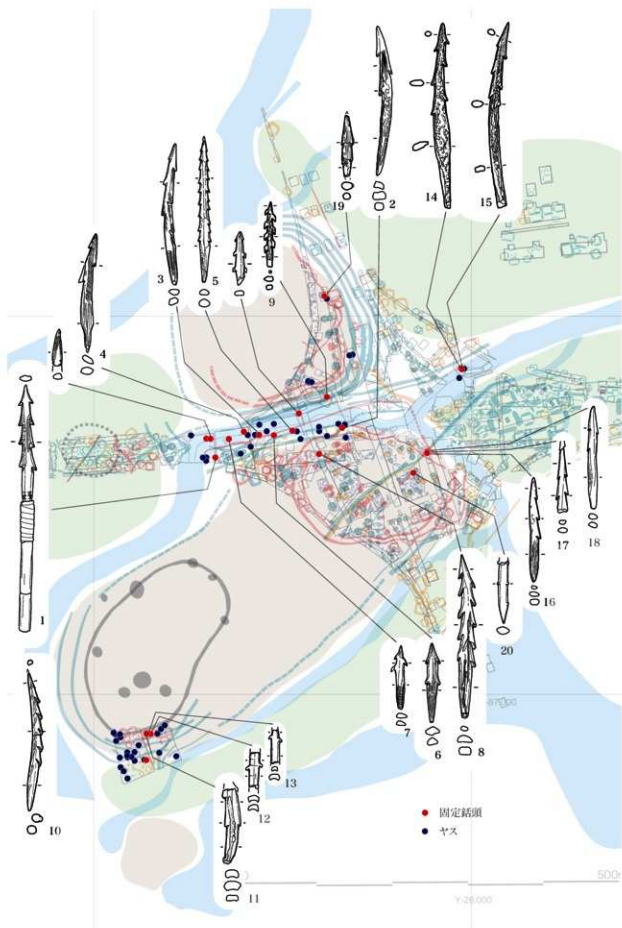


図 4.7-1 固定話・ガスの分布

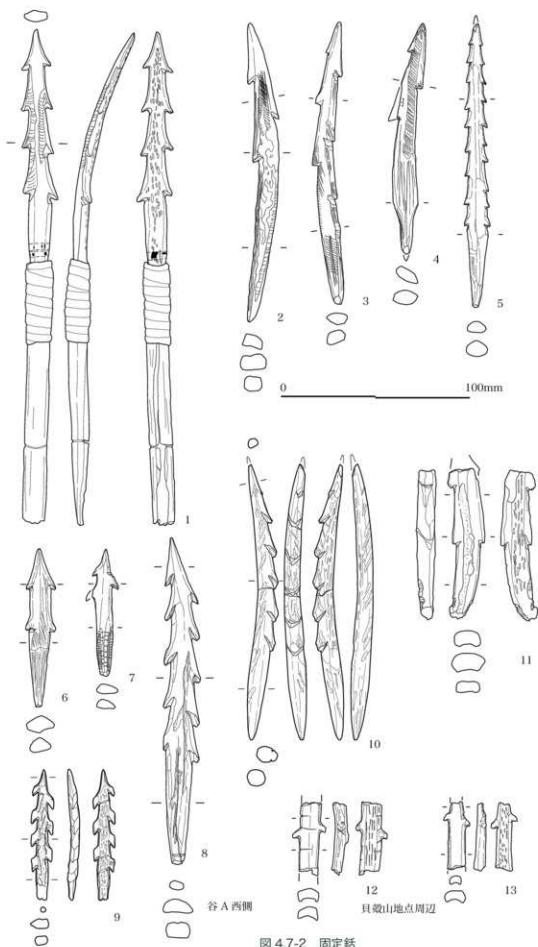
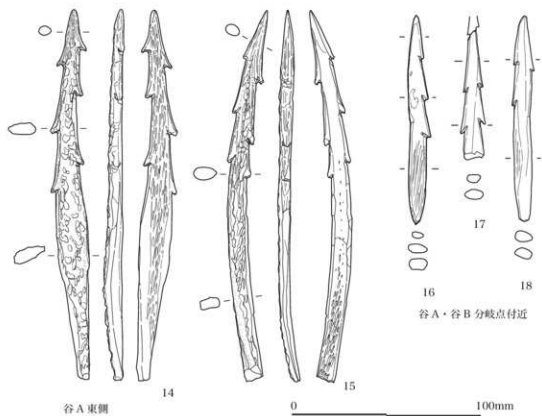
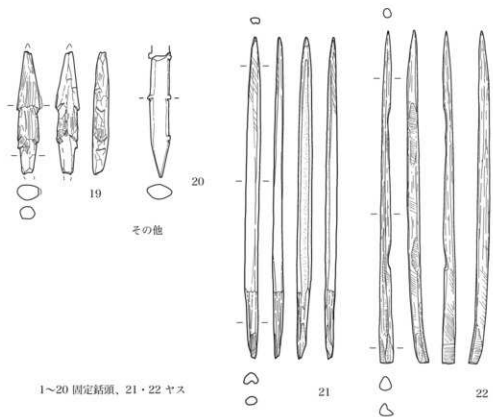


図4.7-2 固定括



谷A・谷B分岐点付近



1~20 固定鋸頭、21・22 ヤス

図 4.7-3 固定鋸・ヤス

■4.8 骨角製装身具類 I (ヘアピンおよび棒状・鉤状鹿角製品)

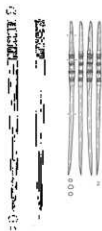
朝日遺跡では、多種多様な装身具類が出土している。その中でも、ここでは3器種について取り上げる。

ヘアピン(1~16)は、シカ中手・中足骨製を主体とする管状骨製である。一端側には線刻・彫刻などによる装飾が施されており、反対側はポイント状に刺突具様になっている。細長い形状で、かつ最大幅・厚さが器種全体を通して均一となっているのは、図4.7-3(4.7)でみた骨製ヤスと共通している。朝日遺跡においては、シカ中手・中足骨の近位端・遠位端を巡るように溝を切って横方向に擦り切りを行なっている事例が圧倒的に多く、縄文時代以来の敲打による除去が極めて少ない。これは、シカ中手・中足骨という素材から長く素材を作出しようとする意図の結果と考えられ、同素材の素材作出の技法として朝日遺跡では定着したのではないのかと、考えられる。このような作出技法は、弥生時代中期を通して朝日遺跡のみならず東海地域に広く認められるようである。

鹿角製の装身具類として、朝日遺跡では棒状鹿角製品と鉤状鹿角製品とが出土している。両器種とも装身具というよりはむしろ儀器的な性格を有するものかもしれない。棒状鹿角製品(17~22)は、鹿角の角幹を中心に非半截材から作られているものである。この器種は、上端部から、部位I:上端の作り出し部、部位II:部位Iと部位IIIの中間帯、部位III:装飾帯、部位IV:棒状部分と部位構成がほぼ定まっている。部位Iには垂下用の穿孔が、部位IIには盲孔などの装飾が施される例もあり、部位IIIでは浮線網状文様の文様が彫去によって施されている事例(21)もある。素材として非落角を用いて、角座部分を部位IIIに当てている事例(19)もある。一方、鉤状鹿角製品(23)は、角座部分から第一枝および角幹部分を素材とし、全体としては半截した材を使用しているものである。角座部分には垂下用の穿孔が施されており、第一枝側の先端部は線刻が一条巡っている。角幹部分が欠失しているが、意図的な行為の結果の可能性も考えられる。

棒状鹿角製品は、朝日遺跡を西端として、西志賀遺跡・荒海貝塚・椿貝塚など東海・関東・東北地域に分布し、縄文時代晩期末から弥生時代中期後葉頃までの時期に存在しているようである。一方、鉤状鹿角製品は朝日遺跡・法海寺遺跡を東端として、入江遺跡・唐古遺跡など西日本域に分布が認められる器種である。鹿角材を大きく用いた東西に分布する2器種が共存しているのは朝日遺跡のみであり、やや広域的に朝日遺跡の位置づけを考える上で、注目される資料であろう。

ヘアピン



鹿角製の装身具類



棒状鹿角製品

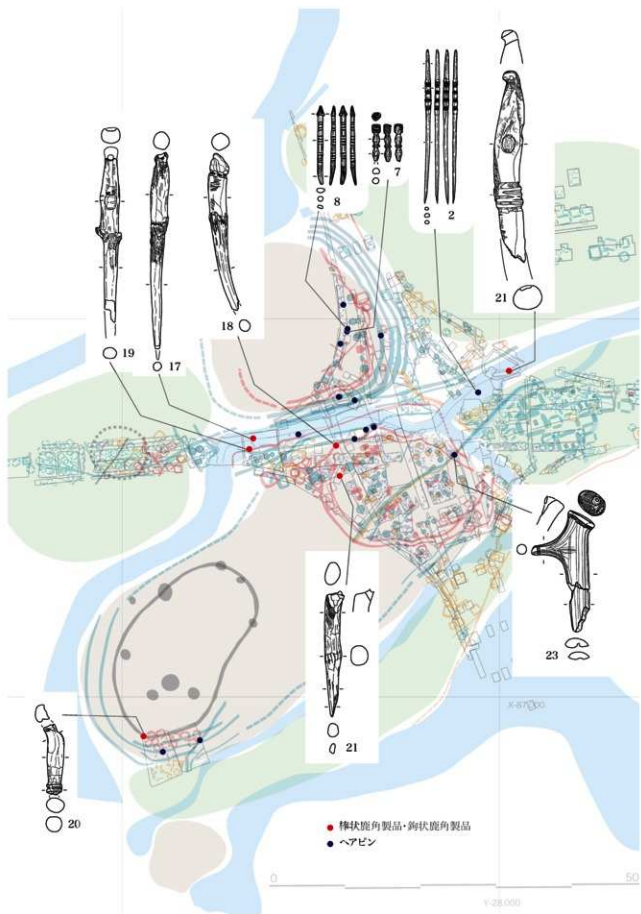


図 4.8-1 骨角製装身具類の分布 1

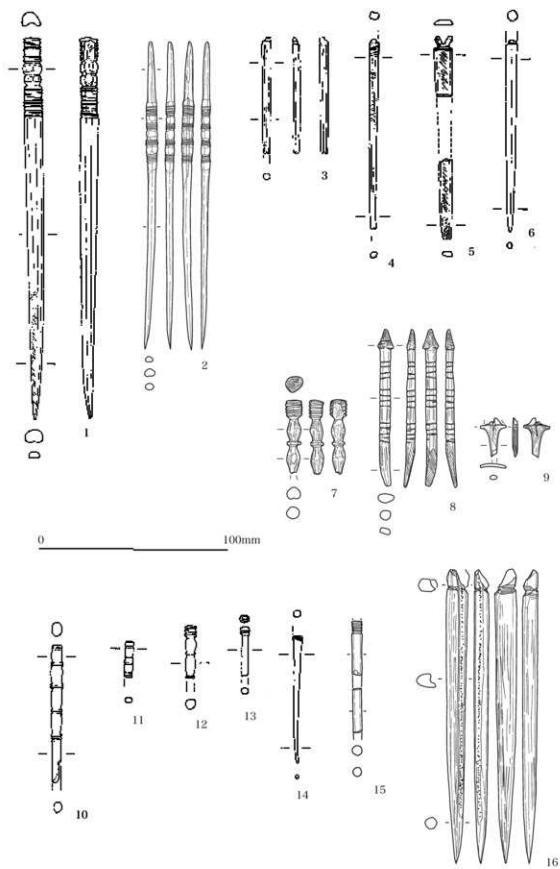


図 4.8-2 骨角製装身具類 (ヘアビン) 1/2

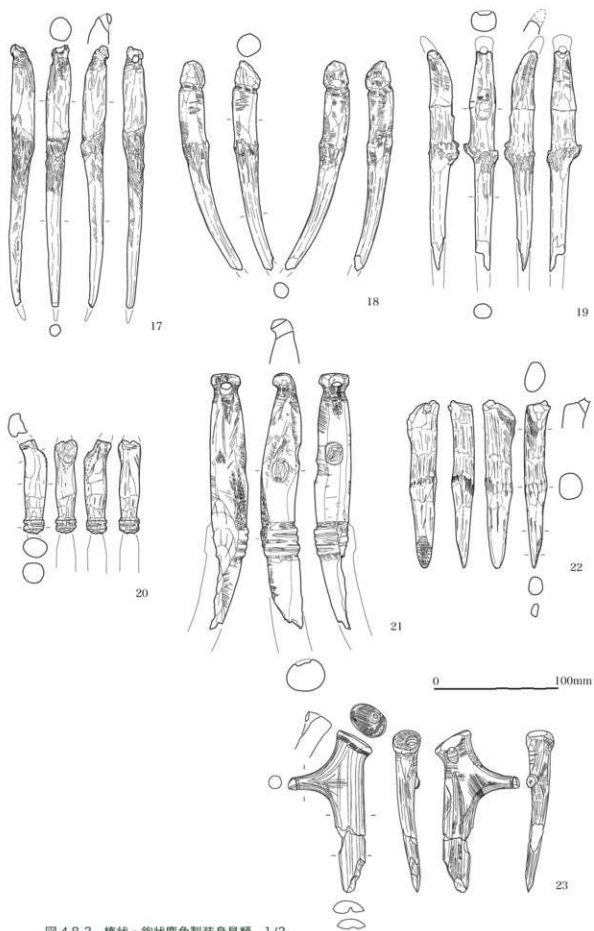
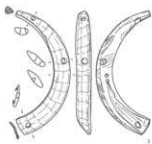


図 4.8-3 棒状・鈎状鹿角製装身具類 1/3

■ 4.9 骨角製装身具類 2

前項 4.8 で概観した器種以外にも、朝日遺跡では多様な装身具類が出土している。その中でも、牙製装身具類・鳥骨製装身具類・軟骨魚類製装身具類・貝輪について取り上げる。

牙製装身具類



牙製装身具類では、イノシシ牙製とそれ以外に大きく二分され、イノシシ牙製は素材の状態から、半截系（1～6）と非半截系（7～9）に分けられる。非半截系の事例では、半環状を呈するように素材をそのまま使用したものが認められる。両端さらには中央にも穿孔が施されており、使用のため穿孔が欠失し再穿孔が施されている事例もある。近接して出土している事例が2例（1・2, 3・4）あり、セットでの使用が考えられるもので、恐らく同一個体の左右犬歯と考えられる。イノシシ牙製以外では、犬歯に穿孔が施された垂飾と考えられ、素材としてはイヌ・タヌキ・キツネ・ツキノワグマが認められる。

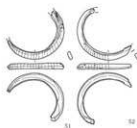
鳥骨製装身具類

鳥骨製装身具類は、管状骨を輪切りにして管玉状に加工したものである（15～29）。際立った装飾が認められる事例は少ないものの、端部に横方向に線刻が施されているものなどが装飾になる可能性がある（15～17）。端部は使用により磨滅しているものが多く認められ、二叉状を呈しているものがある（16など）。

軟骨魚類製装身具類

軟骨魚類製装身具類は、脊椎骨に穿孔が施されているもので、サメ類と考えられる（30～50）。穿孔は平面中央の凹部に1カ所施される事例が多く、周囲には使用による磨滅痕が認められるものもある。土坑内から一括して出土する事例（33～39）もあり、多数を1セットにして使用された様子が窺えられる。

貝輪



貝輪は、現在までのところ、イタボガイ製・フネガイ科製・ベンケイガイ製が存在する。イタボガイ製（53）は貝殻山貝塚地点出土で、弥生時代前期に属する可能性があるほかは、弥生中期の事例である。ベンケイガイ製に関しては、近接して2例（51・52）が出土しているが、ほぼ同一の法量で左殻・右殻がそれぞれ1点ずつであることから、2点は一組で使用された可能性が高いと考えられる。イノシシ牙製装身具類の一部との関連性が考えられる。また、中期後葉の方形周溝墓群の中から、赤彩によって放射状の装飾が施された、オオツツノハガイを模したと考えられる土製腕輪が出土した（図 4.4-2 上段）。

朝日遺跡では、他の遺跡に比べて、骨角製装身具類の出土器種数および総点数が多いことが大きな特徴である。しかし、東海地域における縄文時代晩期の骨角製装身具類との比較・検討は、今後の課題として残されているといえよう。

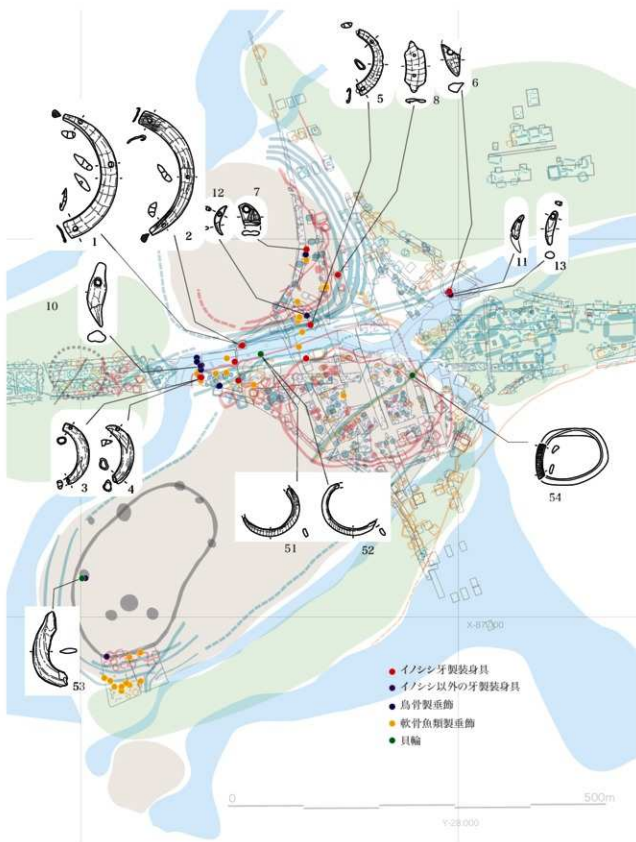


図 4.9-1 骨角製装身具類の分布 2

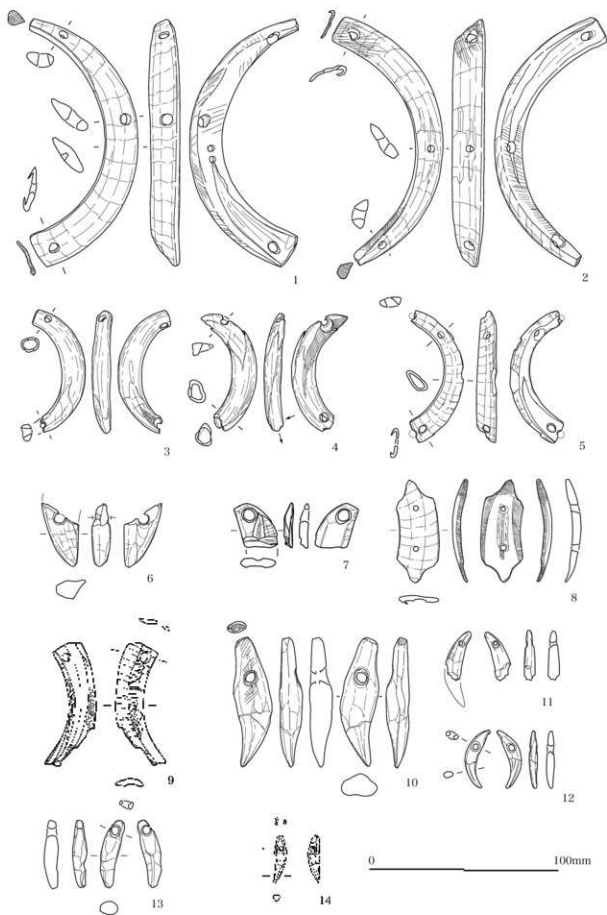


図4.9-2 牙製装身具類 1/2

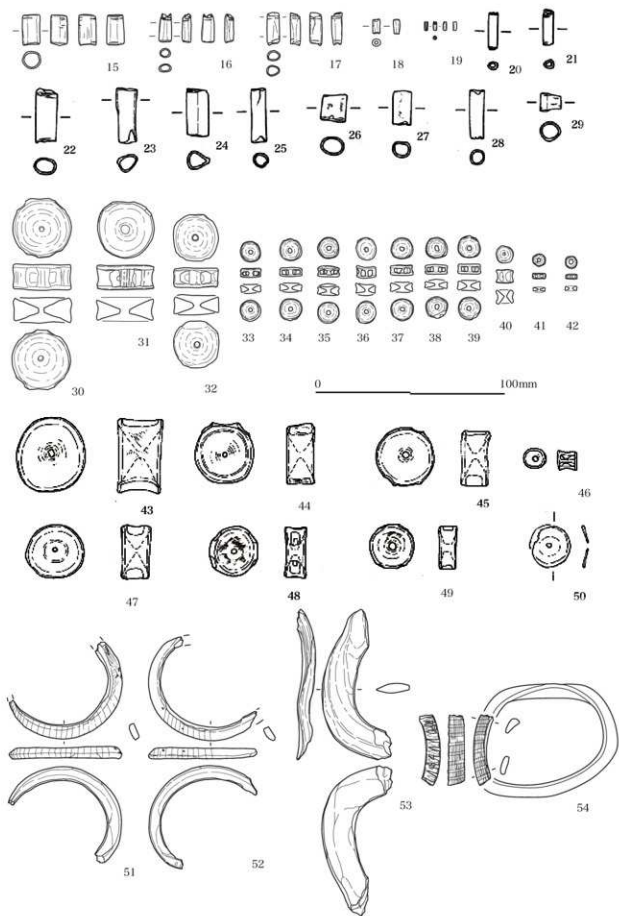


图 4.9-3 鳥骨製・軟骨魚類裝身具類・貝輪 1/2

■4.10 木製容器

木製容器の出土分布

木製合子・盤とその系譜

朝日遺跡からは、これまでの調査でも多数の木製容器が出土している。時期が決定できる資料は少ないが、おおむね図4.10-1のような分布を示している。そのうち特に注目されるのは、今回報告する04Ab区SD02-4層から出土した、弥生後期初頭の木製容器群である(図4.10-1左上1~6)。

この木製容器群は蓋2点と脚4点と、量的には決して多くない。しかし、合子と脚付盤の組み合わせは、弥生中期後葉までの高杯・鉢を主体とする器種組成とは大きく異なる。

合子蓋には平面が円形(1)と楕円形(隅丸方形, 2)の両者が認められる(図4.10-2)。1はコウヤマキで、2はケヤキを用いている。これらはいずれも古墳前期の石製合子¹⁾へと系譜的につながるものである。

赤彩した別作りの脚(3)は、鳥取県青谷上寺地遺跡・石川泉白江梯川遺跡・岡山県上東遺跡で類例があり、時期はいずれも弥生後期である。このうち前記2遺跡ではイヌガヤを用いて水銀朱で赤彩するのにに対し、朝日遺跡では樹種がガマズミ属近似種で、ベンガラを用いる点が異なっている。そのため、3は日本海側からの搬入品ではなく、朝日遺跡周辺で製作された可能性が高い。これは3~4本をセットで用いる円形合子の脚であり、蓋と同様に石製合子へと写される。4はスギ製で赤彩はないが、やはり容器の脚と考えられる。

同じくベンガラで赤彩したヒノキ製の円形合子脚(5)は、ほぼ同形のものが朝日遺跡で土製合子に写されている(図3)。底部から上は欠損しているが、立ち上がりは曲物製であった可能性が高い。そして、このタイプの脚の類例は、古墳前期の三重県六大A遺跡例へと引き継がれていく。楕円形タイプの合子蓋(2)もまた、古墳前期の土製合子に受け継がれる。

断面が三角形を呈する赤彩の脚(6)は、脚付盤の脚と考えられ、やはり石製脚付盤に写されている(図4.10-2)。樹種はケヤキである。

前期古墳に副葬された初期の容器形石製品・土製品の多くは、美濃・尾張・伊勢に集中しており、その祖形としてこの朝日遺跡から出土した木製合子・盤は特に注目される。

これらの用途は、首長層の個人的な貴重品を納める宝物入れであり²⁾、それゆえに宝器として石製品に写されて古墳へと副葬されていく³⁾。マツリや儀礼の場で用いることによって、首長の権威を一般成員に見せつける機能を有する木製高杯などとは、使用される場面・機能が大きく異なる⁴⁾。

今回、朝日遺跡から出土した弥生後期初頭の木製合子類は、弥生時代的な木製(精製)容器類から古墳時代的な木製(精製)容器類へと変化する過程を示す、きわめて重要な資料群といえよう。

朝日遺跡出土木製容器群の意義

*1 西谷真治 1970「古墳出土の盆」『考古学雑誌』第55巻第4号

赤塚次郎 1999「容器形石製品の出現と東海地域」『月刊考古学ジャーナル』No.253

*2 上原真一 1994「入れもの」『季刊考古学』第47号

*3 飯塚武司 2003「儀器・宝器になった木製容器」『法政考古学』第30号

*4 藤上 昇「木製容器の行方」『東海先史考古学評論』第1号(近刊)

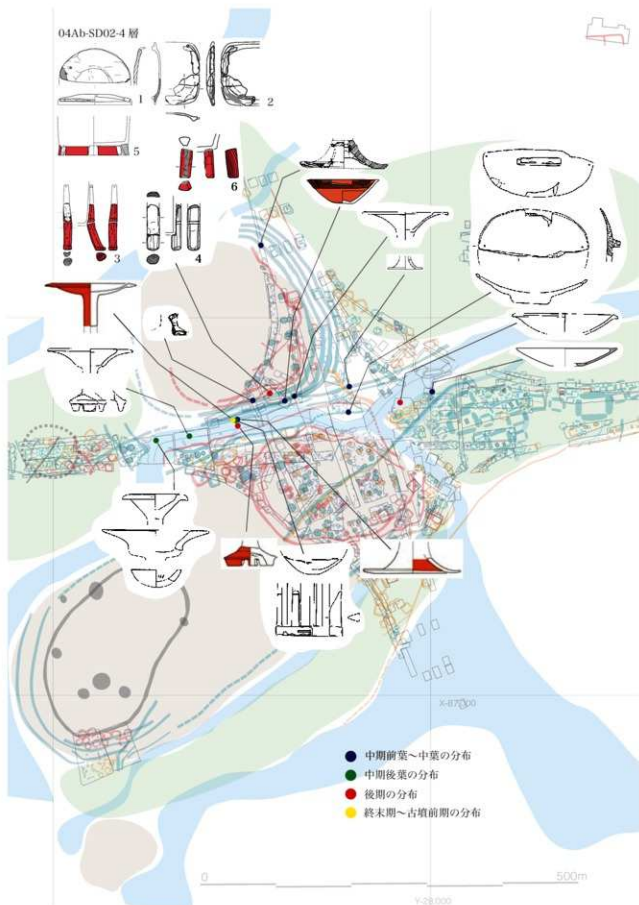


図 4.10-1 朝日遺跡出土の木製容器分布

円形・脚付

楕円形・平底

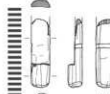
木製合子・盤



明口



明口 3



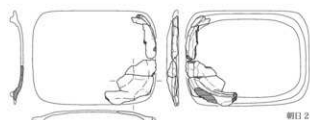
明口 4

1/8 0

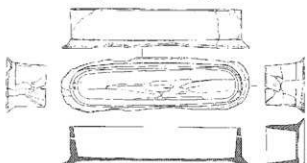


20cm

藍寶：
当野山古墳



明口 2



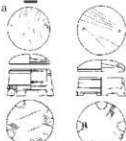
大版：
田井中

脚付盤



明口 6

I a



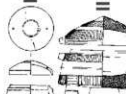
愛知：
龜之宮古墳 1

愛知：
龜之宮古墳 2

1/8 0

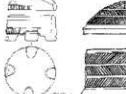


岐阜：
矢道刺摩古墳



奈良：
高野山古墳 1

奈良：
マニ塚古墳 2

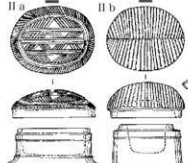


奈良：
高野山古墳 1



奈良：
高野山古墳 2

II a



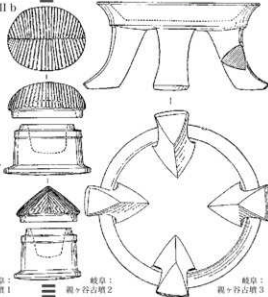
岐阜：
瀬ヶ谷古墳 1

岐阜：
瀬ヶ谷古墳 2



岐阜：
瀬ヶ谷古墳 3

II b



岐阜：
瀬ヶ谷古墳 2

岐阜：
瀬ヶ谷古墳 3

岐阜：
瀬ヶ谷古墳 3

愛知：
藤木

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

愛知：
栗山古墳

1/4 0

10cm

石製合子・盤

図 4.10-2 木製合子・盤から石製合子・盤へ (1/8・1/4)

■ 4.11 方形周溝墓

朝日遺跡の調査（県関係の調査）において方形周溝墓と認定している遺構は、476基を数える¹⁾。その内で所属時期が推定できるのは、朝日式期に所属するものが127基、貝田町式に所属するものが190基。高蔵式が104基で、八王子古宮式・山中式があわせて46基で、廻間式期が4基である。朝日遺跡での方形周溝墓にはその造営方法や形等に、多くの共通点が認められる。以下その特徴を整理しておきたい。

- 1 南北の二つの区画を取り囲むように、東西南北に墓域を設定する。
- 2 時期別にはほぼ主要な造営墓域の選地が認められる。

朝日式期は東西の墓域にはほぼ限定でき、貝田町式期は主に東・北墓域に造営地を置くことが多い。そして高蔵式期は南墓域を新たに設定し、山中式期は南区画周辺と南西端に造営地を営む傾向が見られる。

- 3 平面形は長軸をもつ四隅陸橋型が主体を占める。

朝日式から貝田町式期は長方形四隅陸橋型が中心であり、高蔵式期になると多様な形が創出され、陸橋部が一方所に限定する傾向が認められる。

なお同時に、長方形から正方形プランに整っていく傾向も見られる。さらに前方後方形に発展する、溝中央部付近に陸橋部をもつB型墳が高蔵式期の中で見られ、高蔵式期をさかいにして大きな画期が想定できる。

- 4 大きさはほぼ10mを境にして一般墓と特定墓に区分できる。

周溝墓の大きさは4mから10m前後に分布が偏在し、朝日式・貝田町式期は4・5mに、高蔵式から山中式期では8m前後に中心を置く。

最大規模はSZ208の33.5×22.2mとSZ301の33mをはかるもので、いずれも東墓域内に貝田町式期を中心にして造営される。朝日式期に所属する最大規模はSZ254の23.5×20.7m。高蔵式期ではSZ461の20.6×17.2m。

5 造営方法は、基盤の黒色シルト層（朝日G層）を整地し、その上部に0.2～1.5mほどの盛土を行う。周溝底部から1.5～2m前後を測るものが一般的であったと想定したい。盛土は全て黒色の砂質シルトが一般的であり、基盤層である砂層・黄色シルト層を使用した事例はほとんど確認できない。つまり、周囲に溝を掘削するが、その発生土を封土として使用した痕跡は認められない。盛土の選択に強い習俗性が推測できる。

6 方形周溝墓内での埋葬主体を確認できたものは全体で43基で、周溝墓内に複数の埋葬主体が確認できる場合が多い。なお主体部周囲の埋土には一様に基盤層である黄色シルトを細かく攪拌して使用する。

主体部に伴う副葬品は、山中式期からガラス小玉・管玉の副葬が急増する傾向がうかがえる。中期段階では極めて少なく、部分的に管玉等の配置が見られるようである。

朝日遺跡ベスト10

SZ208	33.5×22.2m	貝田町
SZ301	33m	貝田町
SZ254	23.5×20.7m	朝日
SZ461	20.6×17.2m	高蔵
SZ206	19.8×15.2m	貝田町
SZ207	19.8×15.2m	貝田町
SZ225	18.7m	貝田町
SZ244	18m	朝日
SZ436	17.5×12.6m	高蔵

朝日遺跡副葬品一覧

SZ237	14.3×9.8m	朝日	(管玉13)
SZ175	11.1×6.9m	高蔵	(石鏝14)
SZ118	15.2×13.4m	高蔵	(管玉1)
SZ430	m不明	山中	(ガラス小玉7)
SZ339	10×10m	山中	(ガラス小玉23・管玉7)
SZ133	13.5×10.8	山中	(ガラス小玉3)
SZ130	8×7.5	山中	(ガラス小玉1・管玉2)
SZ131	7.9m	山中	(ガラス小玉2)
SZ129	山中	山中	(ガラス小玉1・管玉7)
SZ126	7.3×6.9	山中	(ガラス小玉74)
SZ123	15×8.5m	山中	(管玉1)
SZ101	8.7×8.1m	山中	(ガラス小玉120・管玉1)

¹⁾ 名古屋市西区中沼町の平田公使住宅新築工事に伴う調査では、加えて50基と可能性が推測できるものが40基、合計90基ほどが報告されている。

野澤剛幸・伊藤正人編 2006『埋蔵文化財調査報告書54』朝日遺跡（第13・14・15次）名古屋市教育委員会・名古屋市文化財調査報告書69

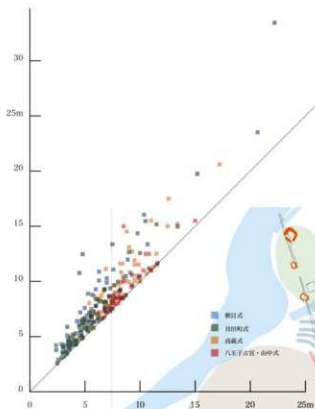


図 4.11-1 方形周溝墓の規模分布

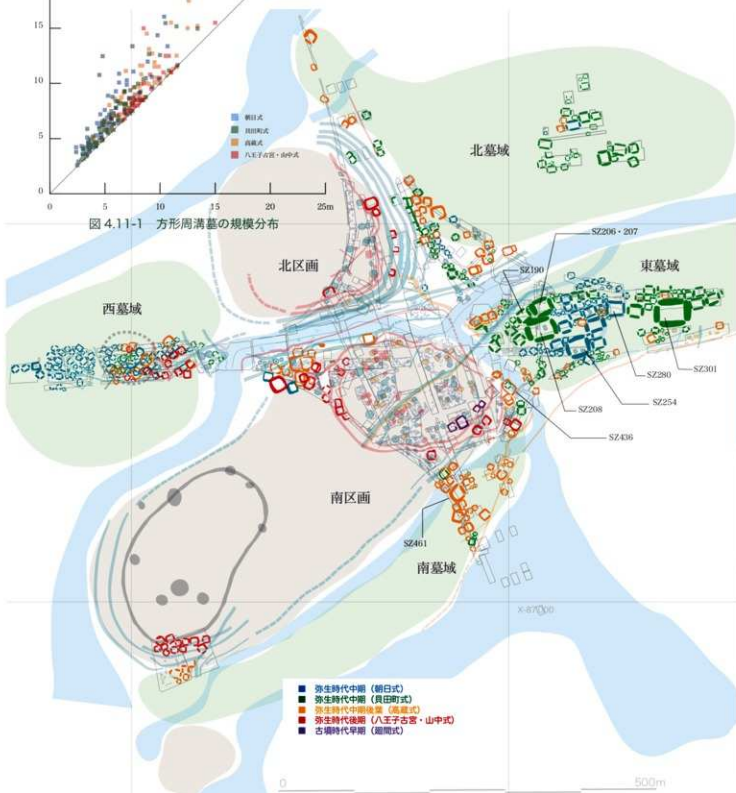


図 4.11-2 方形周溝墓の時期別分布

1	調査の概要
2	遺跡の位置
3	編年表
4	特殊遺構・遺物
5	土方百塚論
6	旧年代
7	総括

埋葬主体

朝日遺跡では人体の埋葬法として主に三つの形態が見られる。

方形周溝墓周辺の区画された空間内に配置されるもので、その多くは木棺墓と想定できる。次に単独あるいは集積された土壇墓であり、棺等是不明瞭。最後に大・中型の土器を使用あるいは組み合わせた土器棺墓である。

方形周溝墓に伴う主体部埋葬の特徴は、以下のように整理できる。

1 長軸 1m 未満の小規模なものが多数を占め、おそらく屈葬が中心。

2 主軸を東西方向に置く場合が一般的である。

3 棺の形態は中期前半まで小口板を基盤層に掘込み側板を当てる組立式木棺が見られるが、貝田町式以降にはそうした小口板の痕跡が見られなくなる。おむね中期中葉以降は、棺痕跡の多くが小口・側面とも傾斜を持つような形状が見られ、槽形木棺ないしはその類似形態の棺構造¹⁾を持つものが主体を占めるように変化したと推測しておきたい。

土壇墓についての特徴的な資料として、朝日遺跡南西端の貝敷山貝塚地点での調査区において、八王子古宮式から山中 1 式期に所属する多数の人体埋葬が確認されている²⁾。頭位にはややばらつきが見られるが、多くは横臥屈葬で、東頭位が主体を占め北頭位にもまともが確認できる。尾張地域の状況は中期初頭段階は西頭位を志向して墓壇や棺を設定するが、中期後葉に近づくると東頭位が主体を占め、後期に至ると北および東に偏在する傾向が認められる。朝日遺跡もその例外ではない。³⁾

土器棺墓は大型の広口壺形土器を使用する場合が主体であるが、他の器形と組み合わせる場合も認められる。方形周溝墓盛土内に設置された土器棺墓は、おむね高藏式以降山中式期にかけて認められる場合が多い。なお周溝内に発見されるものは、中期前半期まで確認できる。また方形周溝墓盛土内では、SZ414・SZ415 のように複数の土器棺墓が列状に集積配置されることがある。

槽形木棺

土壇墓・土器棺墓

方形周溝墓盛土内の複数土器棺墓

SZ119	4基	山中
SZ121	4基	山中
SZ089	5基	高藏
SZ414	5基	高藏
SZ415	4基	高藏

*1・*3 赤塚次郎 2001 「墳丘墓と槽形木棺墓について」、『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集

*2 宮藤健司編 2000 「朝日遺跡Ⅴ」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集

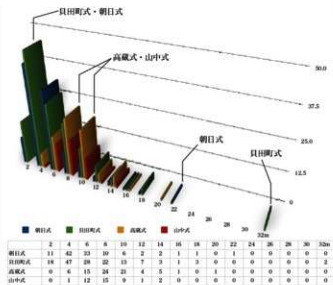


図 4.11-3 方形周溝墓の時期別の大きさ

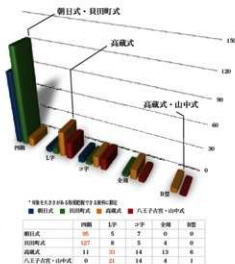


図 4.11-4 方形周溝墓の時期別の形

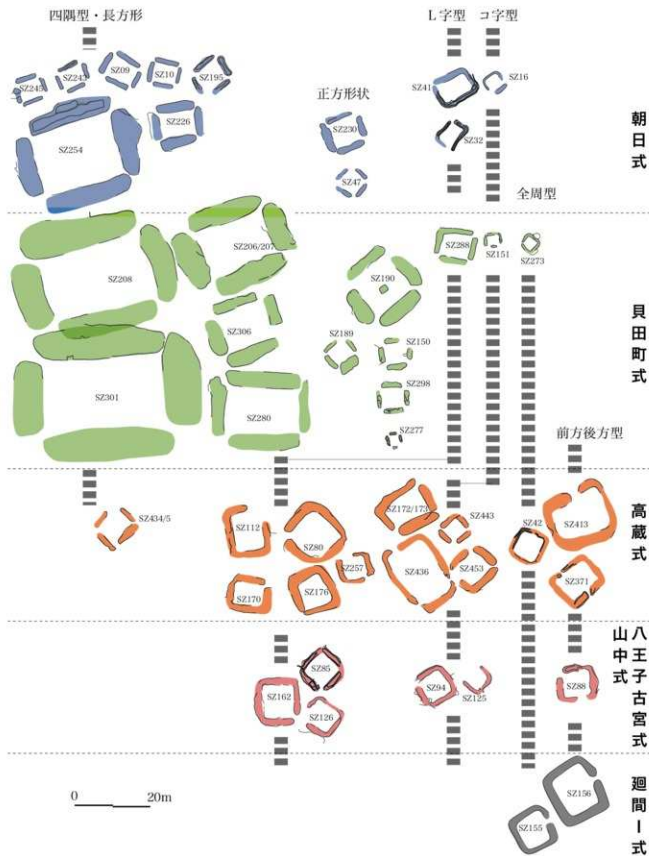


図 4.11-5 方形周溝墓の変遷 1/100

B型墳：高藏式 (SZ136・166・371・391・409・411・413・463)
 山中式 (SZ288)
 廻間1式 (SZ155・156)

■ 5.1 朝日遺跡科学分析総論

5.1.1 はじめに

朝日遺跡の発掘調査では考古学的な情報はもとより、自然科学を基礎とする種々の分析や、自然遺物と称される動植物の遺存体を対象とした考古学的な同定が行なわれている。さまざまな学問分野が関わっているため、自然科学を専門としない方々にとっては非常に複雑で結果の把握が難しくなってきた。そこで、自然科学を専門とする視点から朝日遺跡で行なわれた自然科学分析を学問分野別にまとめた(図5.1)。本論では1975年から2007年までに朝日遺跡の発掘調査で報告された分析結果を学問分野と分析方法により区分し、報告された年代順に簡単に述べる。なお、分析者自身の報告ではなく分析者と報告者が異なるものや自然科学系にはみられない考古学独自の分析方法については、検証が不可能なため本論のまとめからは除いた。また、筆者は理学系出身であるため、それ以外の学問分野の区分に間違いがみられる場合はご了承いただきたい。

5.1.2 基礎科学

基礎科学には理学系の学問分野が該当し、朝日遺跡では物理学・生物学・地質学の3分野に計39の報告がされている。

5.1.2.1 物理学

物理学では素粒子物理学の分野に3つの報告がある。

1) 素粒子物理学

素粒子物理学では加速器質量分析と放射性炭素年代測定が行なわれた。加速器質量分析についてひとつの報告があり、中井ほか(1992)は加速器質量分析(AMS)を用いシカの骨のリン酸カルシウム中の $\delta^{18}\text{O}$ の測定により、縄文時代前期から中期ごろまでの最高湿度、縄文時代晩期の最低湿度、弥生時代前期・後期に高湿度であったと述べた。

放射性炭素年代測定については2つの報告があり、中村・中井(1992)はタンデム加速器質量分析により、出土したイノシシの歯が 2160 ± 200 yrs BP(NUTA-1115)、旧河道(谷A)で採取された泥炭試料から最下層が 4090 ± 250 yrs BP(NUTA-1726)、最上層が 3270 ± 130 yrs BP(NUTA-1732)の数値年代を得た。バリノ・サーヴェイ株式会社(2000)

は弥生時代前期～中期前葉の木製品が2840±60 yrs BP(Gak-20379)、弥生時代後期前葉で2220±70 yrs BP(Gak-20378)の数値年代を得るとともに、弥生土器表面の赤色顔料のX線回折により赤鉄鉱(hematite)が検出されたことから、使用された顔料がいわゆるベンガラであると結論づけた。

5.1.2.2 生物学

生物学では系統分類学、分子生物学、人類学の3つの分野に8つの報告がある。

1) 系統分類学

系統分類学では植物遺体同定と貝類同定の2つが行なわれている。植物遺体同定について3報告がある。高木(1975)は旧河道から出土した種実を同定し、ヒメビシ、ヒシモドキ、カシ類、ヤブツバキ、エゴノキが認められ、木製品の材同定ではスギが多く、ウツギ・アベマキ・イヌガヤを報告した。高木(1982)は、出土した種実の同定と木製品の材質の同定より、モモ・ウリ類・エゴノキの種実やスギとカシ類の利用頻度の高さを述べた。貝類同定について1報告がある。福尾・小川(1975)は出土した貝類より、ハマグリ・マガキ・オキシジミ・オニアサリ・ヒメアサリといった貝類を報告した。

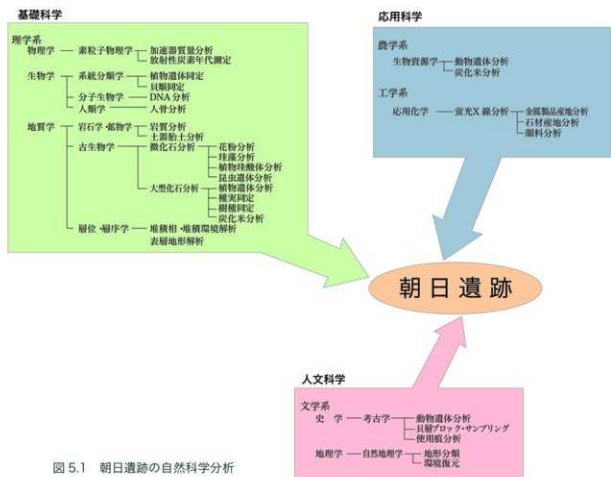


図 5.1 朝日遺跡の自然科学分析

2) 分子生物学

分子生物学では DNA 分析がひとつ行なわれており、石黒 (2000) はイノシシ属の骨 31 試料を用いてポリメラーゼ連鎖反応法 (PCR 法: Polymerase Chain Reaction) にて残存遺伝子を増幅し、ミトコンドリア (mt)DNA のデータベースと比較・検討し、ニホンイノシシが多いことを示した。

5.1.2.3 人類学

人類学では人骨同定の 4 報告がある。江原 (1975) は 2 つの土坑の弥生時代中期と推定される人骨の鑑定より、歯冠原錐部 (Protoconus) の摩耗の状態などから 18 才および、20 ~ 22 才と推定した。江原・木下 (1982) は弥生時代中期～後期の人骨 6 体を観察し、古墳時代人的特徴をもつ弥生人であるとした。池田 (1992) は弥生時代中期末 (高蔵期) の周溝墓からみつかった人骨 1 体を鑑定し、北部九州・山口地方の弥生人に類似する結果を得た。多賀谷・山田 (2000) は弥生時代中期の土壇墓から人骨 23 体を鑑定し、残存部位の同定とともに性別や年齢を推定した。

5.1.2.4 地質学

地質学では岩石学・鉱物学、古生物学、層位・層序学の 3 つの分野に計 18 の報告がある。

1) 岩石学・鉱物学

岩石学・鉱物学にあたるものとして岩質分析と土器胎土分析が行なわれている。岩質分析については 4 つの報告がある。諏訪 (1975) は石鏃・石斧・砥石・管玉といった石製品の岩質鑑定を行ない、石鏃はガラス質石英安山岩がほとんどを占め、次いでチャートであった。石斧はひん岩がほとんどで、砥石はおよそ 80% が砂岩、管玉は細粒凝灰岩であることを報告した。加藤・諏訪 (1982) は出土した石斧・砥石・石鏃など石製品の岩質鑑定を行ない、木曾川流域の美濃帯の中・古生層起源のひん岩・輝緑岩・ガラス質石英安山岩を鑑定した。楯 (1992) は出土した磨製石斧の肉眼観察、比重測定、薄片プレパラートの偏光顕微鏡による観察、全岩化学組成、鉱物の化学組成分析よりハイアロクラストイトである可能性を指摘した。石黒ほか (1994) は考古学的に出土した石器の考古学的な検討を主題とするものの、共著者のひとりである堀木は岩石・鉱物学的な視点から無斑晶な組織をもつ岩石の鑑定に対する注意点を喚起した。

土器胎土分析について 10 の報告がある。永草 (1992) は土器胎土中の砂粒鉱物の実体顕微鏡観察と薄片プレパラートの偏光顕微鏡観察により、三角ダイアグラム上で雲母が 5% 程度以内、有色鉱物が 10% 程度の領域内にまとまる傾向を報告するとともに、4 つの系統に分類し、土器そのものが他の地域から搬入されたことと、考古学的な土器の形式と岩石・鉱物学的に分類された胎土の特徴とが調和的であるとした。バリノ・サーヴェイ株式会社 (1994) は土器の砂成分の重鉱物組成より、弥生式土器を単斜



95・96区2号人骨
(朝日遺跡 2000 より)

ハイアロクラストイト

輝石と斜方輝石をもつ「両輝石型」をA類～C類に、それ以外のものをD類とし4つのグループに分け、A・B類は濃尾平野中部地域、C類は濃尾平野東部地域の土器胎土の特徴を有し、D類は三河地域との関連を示唆した。バリノ・サーヴェイ株式会社(1994)は型式学に基づいて6つの系に分類される土器のうち、3つの系の土器の重鉱物組成からI系とII系系とが近い関係にあることと、II系系はさらに2群に分けられることを示した。永草(1994)は弥生時代後期前半(山中期)の土器資料の胎土の実体顕微鏡および偏光顕微鏡による観察から、三角ダイヤグラムの石英+長石(Qz+Fl)の領域を占めること、雲母の比率が低いこと、細粒化傾向が認められることを述べた。永草(1994)は土器表面の実体顕微鏡および薄片プレパラートの偏光顕微鏡観察より、これまでに行なった分析結果をまとめ、その特徴から5つの地域に区分した。また、土器の形式と胎土の相互関係を基に土器そのものの移動は西三河地域から尾張地域へ、土器の形式はその逆であるとした。バリノ・サーヴェイ株式会社(2000)は弥生時代前期～中期前葉の土器の砂成分の重鉱物組成より12型に分類し、濃尾平野・三重県伊勢平野北部・三重県伊勢平野中～南部の産地を想定し、それらと土器との対応関係について言及した。バリノ・サーヴェイ株式会社(2000)は弥生時代中期後葉(朝日遺跡VI期)に分類される土器の砂成分の重鉱物組成より5種類に分類し、尾張低地西部の土器に三河系の土器が混在する状況が推定された。永草・蔭山(2000)は弥生時代中期後葉(朝日遺跡VI期)の土器の胎土の実体顕微鏡および偏光顕微鏡による観察より、尾張平野の胎土を用いており、愛知県東部、三河地域のものも含まれることを示した。藤根・長友(2007)は弥生時代中期～古墳時代前期の胎土材料の粘土と砂粒物を検討し、胎土中から放射虫化石や海水生種が検出され、海水成粘土や淡水成粘土を用いた胎土は、中新統が分布する地域において材料を調達した可能性を指摘した。永草(2007)は土器の胎土の実体顕微鏡および偏光顕微鏡観察により、火山ガラスが多いものは尾張平野あるいはその周辺部で産する土器であると考えた。

2) 古生物学

古生物学では顕微鏡サイズの微化石分析とそれ以上の大きさの大型化石分析の2つが行なわれている。

a. 微化石分析

微化石分析はさらに花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、昆虫遺体分析の4つが行なわれ、花粉分析には2報告がある。吉野・北野(1982)は弥生時代中期～後期の花粉分析よりカシ亜属・コナラ亜属・スギ属といった木本花粉や、ヤナギ属・ハンノキ属・セリ科・イネ科を同定した。吉野・萬谷(1992)は木本花粉ではアカガシ亜属の常緑広葉樹、コナラ亜属の広葉樹、マツ属、ヤナギ属、ニレ・ケヤキ属を、草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科を報告した。

珪藻分析には2報告がある。森(1992)は朝日遺跡と周辺地域の地質と

昆虫遺体分析

古環境を、ボーリングコア柱状図と広域テフラの対比、珪藻分析より明らかにした。鬼頭・尾崎(2000)は弥生時代前期から古墳時代にかけて遺構を埋積する堆積物の層相と、珪藻分析から海生種とともに陸生種を伴う特徴から、離水した後浜からデューンの堆積環境を推定した。

植物珪酸体分析では2報告がある。杉山(1992)は植物珪酸体分析により、弥生時代中期前半の堆積物からイネに由来する植物珪酸体を報告し、遺跡の周辺にはネザサ節を主体とし、スキ属などもみられるイネ科植物があったとした。鈴木(2007)は弥生時代と古墳時代初頭と考えられる水田層と考えられるものからイネの機動細胞珪酸体が検出され、イネの存在が推察された。

昆虫遺体分析では4報告がある。森ほか(1992)は弥生時代中期～後期の遺物包含層と基盤層の珪藻分析・昆虫遺体分析を行ない、弥生時代中期における陸生珪藻の多産を報告し、オオマグソコガネなどのマグソコガネ属・エンマコガネ属といった地表性食糞群やスジコガネ亜科・サクラコガネ属などの食葉性昆虫を報告した。同じく森(1992)は昆虫分析より、オオマグソコガネなどのマグソコガネ属・エンマコガネ属といった地表性食糞群やスジコガネ亜科・サクラコガネ属などの食葉性昆虫を報告した。森(1994)は昆虫遺体分析や珪藻分析の結果と花粉分析、植物珪酸体分析、寄生虫卵分析の微化石結果を合わせて、生物群集の生息地(Habitat)の変化から縄文時代早期から弥生時代を経て、古墳時代、中世に至る古環境復元を行なった。また、弥生時代中期頃の朝日遺跡の汚染度の高さを報告した。森(2000)は弥生時代にはヒメコガネ・マメコガネが、中世にはヒメコガネ・アオドウガネやアオゴミムシ属・アトボシアオゴミムシなどがみられることを報告した。

b. 大型化石分析

大型化石分析はさらに種実同定、樹種同定、炭化米分析の3つの分野で5つの報告がある。なお、炭化米分析は厳密には種実同定に含まれるべきであるが、考古学分野においてコメはヒトの生業を考える上で重要な対象物であり、敢えて項目を分けた。

種実同定には2報告がある。此松・粉川(1992)は弥生時代中期には木本植物ではナラガシワ・オニグルミ・モモ・ブドウ属が、草本ではウリ類・タデ属・ヒョウタンの種実を報告した。新山(2007)は遺構から採取した種実同定を行ない、考古学的に相対年代区分された朝日2・3期から9期にかけて落葉広葉樹の森林が、7期(弥生時代後期)以降にはナラガシワ林の可能性を考えた。加えて、栽培種と考えられるものとしてモモ、イネ、キビ、アワ、マメ科、エゴマ近似種、メロン仲間、ヒョウタン仲間などの分類群を主体すると報告した。

樹種同定には2報告がある。堀木(2000)は弥生時代前期～後期後葉の木製品の樹種同定よりスギを報告するとともに、溝や土坑からカシ類・コ

メ・カヤツリグサ科の種実を同定した。植田(2007)のヤナ状遺構の樹種同定からヤナギ属・コナラ節・広葉樹・タケ亜科が敷き詰められていたことがわかった。また、自然流路からはヒノキが多く、ほかにヒノキ科・アスナロ・モミ属などの針葉樹、落葉広葉樹ではヤナギ属、常緑広葉樹ではアカガシ亜属が多いことを報告した。

炭化米分析には1報告があり、橋(1992)は出土した炭化米の粒長と粒幅との比率から日本型のコメの特徴を認めた。

3) 層位・層序学

層位・層序学には層相・表層地形解析がある。表層地形解析は厳密には層位・層序学的な研究には含まれないが、堆積地形がつくる地表面の起伏状況を解析しているため層位・層序学を含めた。

層相・表層地形解析には1報告があり、鬼頭(2007)は地下の層相解析、放射性炭素年代測定、表層地形解析より、遺跡の南ないし南東方向にかけては標高2.4～3.0mと相対的に低く、西から北西方向に標高3.6～4.0mまでには高い地域がみられ、標高3.6～3.8mには孤立丘状を呈する地形が認められ、それは考古学的な南集落にあたった。また、より北側の調査区では約6000～4000年前代の数値年代が得られ、北側で離水時期が古いことを示した。

5.1.3 応用科学

応用科学には農学系・工学系の学問分野が該当し、朝日遺跡では農学系の生物資源学、工学系の分析化学・応用科学の2分野が行なわれている。

5.1.3.1 生物資源学

生物資源学では動物遺存体分析と炭化米分析の2つで2報告がある。

動物遺存体分析には1報告があり、山崎・織田(2007)は朝日2・3期にはマガキが主体で、弥生時代中期中葉(貝田町式期)を境としてハマグリ・ヤマトシジミへと変化した。また、魚類ではコイ科、鳥類ではカモ類やガン類が多産し、ほ乳類ではイノシシ類が多く、それとニホンジカ・イヌを合わせると90%以上を占める。

炭化米分析は1報告があり、塩谷(1982)は出土した炭化米の粒径を計測し、弥生時代中期～後期の米粒の分布傾向を示した。

3-2. 分析化学・応用化学

分析化学・応用化学では主に蛍光X線分析装置を用いた化学成分分析、石材産地分析、顔料分析の3つで5つの報告がある。

化学成分分析には1報告があり、久野(1992)は出土した青銅鏡の主にICP発光分析法により銅と鉛、スズの合金であることを示した。

石材産地分析には2報告がある。薬科(2000)は出土したサヌカイト製とされる19個のエネルギー分散型蛍光X線分析により元素分析を行ない、任意の元素量の比を統計学的な標準偏差(σ)を基に全国の原産地との比

マガキ
↓

ハマグリ・ヤマトシジミ

較を行ない、岐阜県の下呂地域、奈良県の二上山、香川県の金山が産地であるとした。同じく薬科(2000)は、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉など計63個の蛍光X線分析を行ない、ヒスイ製の遺物は糸魚川市青海町地域の原産であるとした。また、碧玉製遺物の蛍光X線分析とESR分析のスペクトルの結果より、薬科が行なった兵庫県豊岡市の弥生時代中期の女代南遺跡で実施した結果と類似しているため、管玉は女代南(B)群原石とした。

顔料分析では1報告がある。バリノ・サーヴェイ株式会社(1994)は弥生土器に付着した顔料の土器の薄片プレパラートによる顕微鏡観察により、赤鉄鉱からなるベンガラとそれ以外とを区別した。また、焼成土の鉱物や組織といった特徴も記載した。

5.1.4 人文科学

人文科学には文学系の学問分野が該当し、朝日遺跡では史学、地理学の2分野が行なわれ、計12の報告がある。

5.1.4.1 史学

史学では考古学に9つの報告がある。

1) 考古学

考古学では動物遺体分析、貝層ブロック・サンプリング、樹種同定の3つで8つの報告がある。

動物遺体分析については4報告がある。西本ほか(1992)はコイ・フナ・サメ類などの魚類、カモ類・ガン類の鳥類、イノシシ類やシカ・イヌなどのほ乳類の出土を報告した。同じく西本(1992)は出土した動物遺体のうちイノシシ類を検討し、第1頸椎の特徴から家畜のブタであると述べた。西本(1994)は出土した約200点のイヌの骨のうち左側下顎骨の数量からイヌの個体数を27個体とし、日本の他の弥生時代の遺跡に比べてイヌが多いと述べた。新美(2000)は弥生時代中期の遺構から採集された資料の動物依存体を鑑定し、ハマグリ・ヤマトシジミ・マガキなどの貝類、コイ・フナ類・サメ類・マグロ類といった魚類、カモ類などの鳥類やカエル類やカメ類などの両生類とは虫類、イノシシ類・シカ・イヌのほ乳類を報告した。

貝層ブロック・サンプリングについては3報告がある。渡辺・磯谷(1982)は出土した動物遺体からマガキ・ハマグリなどの貝類や、マイワシ・サメなどの魚類、イノシシ・シカのほ乳類を報告した。渡辺・田中(1992)はハマグリ・マガキ・ヤマトシジミ・タニシ類の貝類、ニシン科・ウナギ・ドジョウ科などの魚類、ウリ類・オニグルミ・ヒョウタン類の植物遺体を報告した。渡辺・田中(2000)は貝層より、弥生時代前期末～中期初頭および弥生時代中期初頭(朝日式)の北集落ではハマグリが優先し、それ以外の資料ではマガキの優先とヤマトシジミ・タニシ類が多いこと、弥生時代中期中葉(貝田町式期)では南北の集落でハマグリが優先し、ヤマトシジミ・タニシ類がみられること、弥生時代中期後葉(高蔵式期)ではハマグリが優先することを報告した。

樹種同定では1報告があり、岡田(2007)は木材資料の計測と観察および樹種同定により、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてスギが減少傾向にある中で、相対的なサワラやヒノキの多さを述べた。また、弥生時代中期～後期には少なかったアカガシ亜属が古墳時代初頭ころから増加傾向にあることを示した。

5.1.4.2 地理学

地理学では自然地理学に3つの報告がある。

1) 自然地理学

自然地理学では地形分類・環境復元について3つの報告があり、井関(1975)は弥生の小海退に関連づけて、朝日遺跡では埋積浅谷が確認され、浅谷は弥生時代中期の時期から平安時代末ないし鎌倉期までに埋積されたと述べた。井関(1982)は河道跡の埋積状況や沖積上部砂層の凹部に分布するシルト層と弥生時代の遺物包含層、試錐調査から推定した上部砂層上面の標高値より、弥生の小海退に関連づけて浅谷の埋積期について述べた。海津(1992)は朝日遺跡と濃尾平野に分布する先史遺跡をまとめ、これまでに得られているボーリングコア柱状図と放射性炭素年代測定から、濃尾平野における相対的海面変化曲線を作成し、それに伴う海岸線変化に伴う古地理変遷を論じた。



江原昭善, 1975, 朝日遺跡出土人骨について, 環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告, 愛知県教育委員会, 100-105.

江原昭善・木下 実, 1982, 朝日遺跡出土の人骨について, 朝日遺跡Ⅰ(本文篇Ⅰ), 愛知県教育委員会, 249-256.

藤根 久・長友純子, 2007, 弥生中期～古墳前期の土器胎土の材料分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡Ⅶ(第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 127-142.

福尾富男・小川雅康, 1975, 各地点出土の貝類について, 環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告, 愛知県教育委員会, 105-106.

久野雄一郎, 1992, 愛知県朝日遺跡出土「青銅鏡」分析結果, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 315.

榎本真美子, 2000, 朝日遺跡の自然遺物, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡Ⅵ-新資料館地点の調査-」, 愛知県埋蔵文化財センター, 525-527.

池田次郎, 1992, 方形周溝墓出土の弥生時代人骨について-1985年度発掘朝日遺跡SZ111号墓3号人骨-, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 243-262.

井関弘太郎, 1975, 旧自然環境の復元と考察, 環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告, 愛知県教育委員会, 57-62.

井関弘太郎, 1982, 朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察, 朝日遺跡Ⅰ(本文篇Ⅰ), 愛知県教育委員会, 217-227.

石黒直隆, 2000, 朝日遺跡から出土したイノシシ属の骨のDNA分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡Ⅵ-新資料館地点の調査-」, 愛知県埋蔵文化財センター, 431-437.

石黒立人・榎本真美子・五藤そのみ, 1994, 朝日遺跡の弥生時代石器をめぐって, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡Ⅴ(土器編-総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 377-398.

加藤安信・諏訪兼位, 1982, 朝日遺跡出土石製品の岩質と特色, 朝日遺跡Ⅰ(本文篇Ⅰ), 愛知県教育委員会, 276-281.

鬼頭 剛・尾崎和美, 2000, 朝日遺跡の古環境解析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡Ⅵ-新資料館地点の調査-」, 愛知県埋蔵文化財センター, 503-518.

鬼頭 剛, 2007, 朝日遺跡における堆積および地形環境, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡Ⅶ(第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 154-171.

此松昌彦・粉川昭平, 1992, 朝日遺跡の大型植物遺体, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 151-157.

森 勇一, 1992, 朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 9-40.

森 勇一・前田弘子・伊藤隆彦, 1992, 珠露および昆虫化石群集から得られた朝日遺跡の古環境変遷, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 71-131.

森 勇一, 1992, 愛知県・朝日遺跡(弥生時代)における都市型昆虫群集, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 183-205.

森 勇一, 1994, 生物群集からみた朝日遺跡の変遷-都市型生物群集の出現から消滅まで-, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡Ⅴ(土器編-総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 339-354.

森 勇一, 2000, 愛知県朝日遺跡(中世)より産出した昆虫化石群集, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡Ⅵ-新資料館地点の調査-」, 愛知県埋蔵文化財センター, 519-524.

永草康次, 1992, 朝日遺跡出土の土器胎土, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 299-314.

永草康次, 1994, 朝日遺跡SZ162出土土器の胎土, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡Ⅴ(土器編-総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 322-328.

永草康次, 1994, 伊勢湾岸地域の土器胎土分析-弥生時代から古墳時代を中心として-, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡Ⅴ(土器編-総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 355-362.

- 永草康次・藤山誠一, 2000, 朝日遺跡95年度調査区出土VI期土器の胎土分析とその考古学的評価, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI-新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 540-552.
- 永草康次, 2007, 朝日遺跡(2001年度・2002年度出土)における土器胎土の岩石学的分析-胎土中に火山ガラスを含む土器-, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡VII(第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 143-145.
- 中井信之・中村俊夫・吉田尚弘・森 育子・吉岡茂雄・金田秀樹, 1992, 出土哺乳動物の骨・歯・角を用いる14C年代測定と安定同位体比による生存当時の環境解析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 263-271.
- 中村俊夫・中井信之, 1992, タンデム加速器質量分析計による愛知県朝日遺跡遺物の14C年代測定, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 317-328.
- 新美倫子, 2000, 朝日遺跡出土の動物遺体, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI-新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 438-457.
- 新山雅広, 2007, 朝日遺跡から出土した大型植物化石, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡VII(第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 88-126.
- 西本豊弘・佐藤 治・新美倫子, 1992, 朝日遺跡の動物遺体, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 207-212.
- 西本豊弘, 1992, 朝日遺跡の弥生時代のブタ, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 213-241.
- 西本豊弘, 1994, 朝日遺跡出土のイヌと動物遺体のまとめ, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡V(土器編・総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 329-338.
- 岡田 賢, 2007, 朝日遺跡出土木材の樹種と木材利用について, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡VII(第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 61-72.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994, 朝日遺跡胎土分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡V(土器編・総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 297-304.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994, 朝日遺跡土器胎土顔料分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡V(土器編・総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 305-320.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 1994, 朝日遺跡胎土分析・顔料分析について, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集「朝日遺跡V(土器編・総論編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 320-321.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2000, 朝日遺跡1~III期土器の胎土分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI-新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 528-534.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2000, 朝日遺跡VI期土器の胎土分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI-新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 535-539.
- バリノ・サーヴェイ株式会社, 2000, 朝日遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定および顔料分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI-新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 553-556.
- 塩谷 格, 1982, 朝日遺跡の炭化米, 朝日遺跡I(本文篇I), 愛知県教育委員会, 228-239.
- 杉山高二, 1992, 朝日遺跡の植物珪酸体分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 133-149.
- 諏訪兼治, 1975, 朝日遺跡群より発掘された石器の岩質, 環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告, 愛知県教育委員会, 97-99.
- 鈴木 茂, 2007, 朝日遺跡における水田遺構と北居住域内遺構の植物珪酸体, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡VII(第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 146-153.
- 多賀谷昭・山田博之, 2000, 朝日遺跡出土の人骨について, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI-新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 557-574.
- 高木典雄, 1975, 朝日遺跡群における出土植物, 環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告, 愛知県教育委員会, 93-96.
- 高木典雄, 1982, 朝日遺跡における出土植物, 朝日遺跡I(本文篇I), 愛知県教育委員会, 240-248.
- 桶直美子, 1992, 朝日遺跡から産した炭化米, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II(自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 273-277.

- 植直美子, 1992, 朝日遺跡にみられる磨製石斧の石質とその産地, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II (自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 279-298.
- 植田弥生, 2007, 朝日遺跡出土ヤナ状遺構・自然木・炭化材の樹種同定, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡VII (第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 73-87.
- 海津正倫, 1992, 濃尾平野における縄文・弥生時代の環境変化と朝日遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II (自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 41-58.
- 藁科哲男, 2000, 朝日遺跡出土のサヌカイト製造物の石材産地分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI -新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 458-468.
- 藁科哲男, 2000, 朝日遺跡出土のヒスイ製勾玉, 碧玉製管玉, 玉材の産地分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI -新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 469-502.
- 渡辺 誠・磯谷和明, 1982, 朝日遺跡の動物遺体, 朝日遺跡I (本文篇1), 愛知県教育委員会, 257-264.
- 渡辺 誠・田中祐子, 1992, 朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II (自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 159-182.
- 渡辺 誠・田中祐子, 2000, 朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集「朝日遺跡VI -新資料館地点の調査」, 愛知県埋蔵文化財センター, 413-430.
- 山崎 健・織田鉄一, 2007, 朝日遺跡における動物資源利用, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集「朝日遺跡VII (第3分冊 総括)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 24-34.
- 吉野道彦・北野信彦, 1982, 朝日遺跡における花粉化石, 朝日遺跡I (本文篇1), 愛知県教育委員会, 265-275.
- 吉野道彦・萬谷さつき, 1992, 花粉化石からみた朝日遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡II (自然科学編)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 59-69.



■ 5.2 昆虫化石からみた朝日遺跡の変遷

奥野絵美^{*}・森 勇一^{**}

^{*}名古屋大学大学院
^{**}愛知県立津島高等学校

5.2.1 はじめに

昆虫は地球上で最も種類が多い生物群であり、生息環境は水中（水生昆虫）・地表面（地表性歩行虫）・植物上（樹上性昆虫）など、多様な生活空間に適応して生活している。食性も食植性から食肉性・食糞性・食屑性など多岐にわたっている。また、昆虫は環境変化に対する応答性が極めて鋭敏であるとされており、昆虫化石は遺跡の古環境復元にあたって有効な試料であるといえる。

朝日遺跡では、1987年度調査より森勇一を中心として昆虫化石分析が行われてきた。分析の結果、都市型昆虫¹⁾の多産から、弥生時代中期の朝日遺跡は極めて汚染度の高い人工空間であり、弥生時代後期以降は徐々に植生が回復し安定した止水域に変化していったことが明らかにされている。

5.2.2 試料および分析方法

今回、報告を行うのは、1998～2007年度にかけての発掘調査で得られた28試料である。試料は、2004年度までの試料に関しては藤山誠一氏から採取し、愛知県埋蔵文化財センターの整理補助員の方々によって検出され、同センター内で保管されていたものを、森・奥野が同定作業を行った。それ以降の試料に関しては、筆者の一人奥野が、15cm×15cm×層厚の柱状に採取し、ブロック割り法および水洗浮遊選別法によって検出作業を行った。分析の結果、総計4098点の昆虫化石を得ることができた。なお、点数に関しては切片ないしは破片数であり、個体数を示すものではない。以下に主たる分析試料について、所属する時期と試料採取地点の遺構の種類ごとに、昆虫化石の概要について述べる。

5.2.3 弥生時代前期～中期の昆虫相

弥生時代中期においては、15試料の分析を行い、合計1158点の昆虫化石を産出した。試料の採取地は大別して北区画、北東部の居住域、南の墓域である（図5.2-3）。

1) 北区画

・環濠帯（試料2・6・7・8・9）図5.2-2

北区画の第1環濠で2試料434点（試料6・7）、第2環濠で1試料201点（試料8）、第3環濠で1試料51点（試料2）、逆度木設置溝で1カ所14点（試料9）の昆虫化石を得た。試料2・9に関



図 5.2-1 昆虫の食性と生息環境

	天然	二次的	人工的
環境	森林・草原	二次林・畑・水田	住居・貯蔵・道路
採集水域	湖池・池田・河川	水田・水溜・用水	排水路・風呂
陸生	森林性昆虫 ハナムグリ類	畑作昆虫 ヤマトシジキ類 ヒメコガネ	貯蔵性コナジラウ
地表性	林内性歩行虫 オサムシ科	掘居性歩行虫 ゾムシ科	都市型昆虫 ムシゴキ等 ツツクシ科
水生	腐植性昆虫 カワキアリ科 カクイムシ科	耕作性・稲作型昆虫 イナゴイヘムシ マダラカシ	環濠型環濠

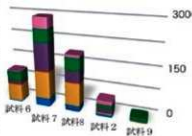
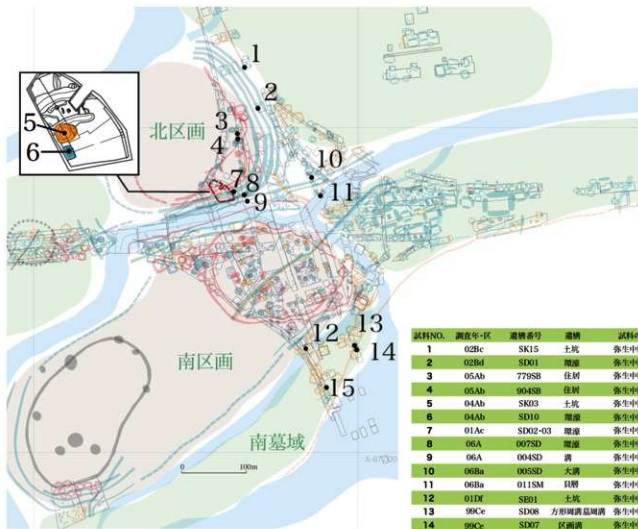


図 5.2-2 弥生中期環濠の昆虫化石出現率

■ 水生・食肉性 ■ 水生・食植性
■ 地表性・食糞性 ■ 地表性・食屑性
■ 地表性・食肉および食糞性
■ 陸生・食植性 ■ その他

¹⁾ 都市型昆虫：人間によって作り出された人工的な空間に好んで棲息し、人の居住に伴ってもたらされた生活ゴミや糞糞物・糞尿などを食べたとき、ときにはすみかとする昆虫たち（森 1992a より）

1 調査の概要
2 遺跡の調査
3 編年表
4 自然環境・遺物
5 科学分析総論
6 居住年代
7 総括



試料NO.	調査年・区	遺構番号	遺構	試料の種類
1	02Bc	SK15	土坑	弥生中期後葉
2	02Bd	SD01	環濠	弥生中期後葉
3	05Ab	779SB	住居	弥生中期後葉
4	05Ab	904SB	住居	弥生中期後葉
5	04Ab	SK03	土坑	弥生中期後葉
6	04Ab	SD10	環濠	弥生中期後葉
7	01Ac	SD02-03	環濠	弥生中期中葉
8	06A	007SD	環濠	弥生中期中葉
9	06A	004SD	溝	弥生中期中葉
10	06Ba	005SD	大溝	弥生中期後葉
11	06Ba	011SM	貝塚	弥生中期後葉
12	01Df	SB01	土坑	弥生中期後葉
13	99Ce	SD08	方形環濠/環濠	弥生中期後葉
14	99Ce	SD07	区画溝	弥生中期後葉
15	05Dd	017SD	方形環濠/環濠	弥生中期中葉

図 5.2-3 試料採取位置 (弥生中期)

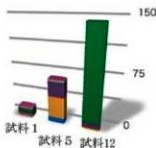


図 5.2-4 弥生中期土坑の昆虫化石出現率

しては点数が少なく、群集組成より明確な分析結果を導くことは困難であるが、食性・生息環境別出現率をみると、主にコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* に分類されるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp. や、マグソコガネ *Aphodius rectus*・オオマグソコガネ *Aphodius haroldianus* などの人や獣の糞に集まる食糞性昆虫と、ハネカクシ科 Staphylinidae や、オサムシ科 Carabidae などの食肉・雑食性昆虫が多くを占めた。

・土坑 (試料 1・5) 図 5.2-4

北区画北部に位置する土坑 (試料 1) からは、わずか 15 点の産出に留まった。一方、北区画南部に位置する大型土坑 (試料 5) の最下層からは 67 点の昆虫化石が得られた。そのうち 56 点の昆虫化石が、マグソコガネやエンマコガネ属などの食糞性昆虫とオサムシ科・ハネカクシ科を中心とした食肉・雑食性昆虫であった。陸生の食植性昆虫の産出は 2 点に留まった。

・竪穴住居 (試料 3・4)

北区画の北部に位置する竪穴住居層を含む 2 試料で分析を行ったが昆虫化石を得ることができなかった。



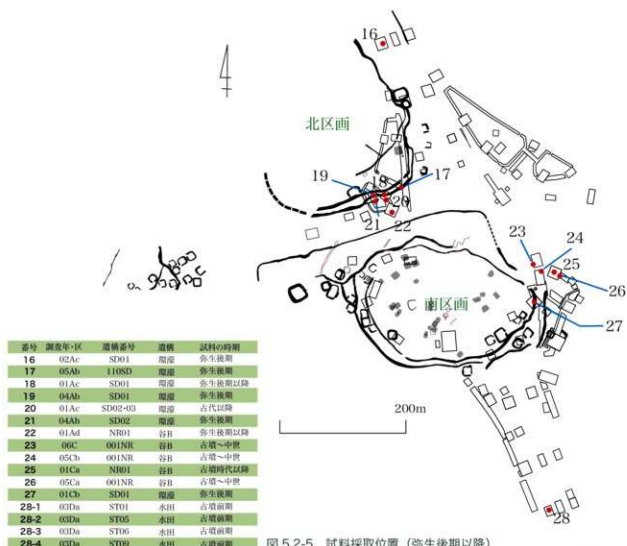


図 5.2-5 試料採取位置 (弥生後期以降)

2) 北東部居住域 図 5.2-5

・大溝 (試料 10) および貝層 (試料 11)

遺跡を東西に横切る大溝の下層で 23 点、調査区南部の貝層から 50 点の昆虫化石を得たにすぎなかった。大溝ではマグソコガネ属およびマグソコガネが計 16 点得られた。貝層ではオサムシ科を中心とした食肉・雑食性昆虫が 15 点検出された他、ゾウムシ科 Curculionidae や、コガネムシ科の食葉群 Scarabaeidae(Pleurosticti) などの食植性昆虫が 9 点産出した。

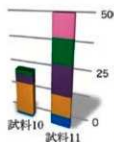


図 5.2-6 弥生中期北東部居住域大溝・貝層の昆虫化石出現率

3) 南墓域

・区画溝 (試料 14) 図 5.2-6

遺跡南部を東西に走る区画溝からは 80 点の昆虫化石を得た。出現率をみると、コガネムシ科の食葉群などの食植性昆虫と、オサムシ科・ハネカクシ科といった食肉・雑食性昆虫が多数認められた。

・土坑 (試料 12) 図 5.2-4

南墓域北側に位置している土坑で、井戸の可能性が指摘されている⁴。最下層の土壌から検出された 147 点の昆虫のうち、94%が食植性昆虫に

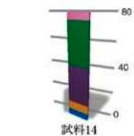


図 5.2-7 弥生中期南墓域区画溝の昆虫化石出現率

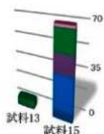


図 5.2-8
弥生中期方形周溝墓
周溝の昆虫化石出現率

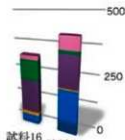


図 5.2-9
弥生中期環濠の堆積土
(後期以降)における
昆虫化石出現率

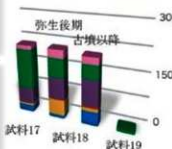


図 5.2-10
弥生後期外環濠の
昆虫化石出現率

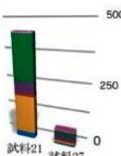


図 5.2-11
北区画溝・南区画環濠
の昆虫化石出現率



相当した。このうちの大部分を占めるヒメコガネ *Anomala rufocuprea* は、野菜類や果樹などの栽培植物を食害する⁵とされる昆虫である。

・方形周溝墓周溝 (試料 13・15) 図 5.2-7

南墓域東部に位置する方形周溝墓の周溝 (試料 13) から 6 点・南端部に位置する方形周溝墓の周溝 (試料 15) から 70 点の昆虫化石が得られた。多く見つかったのは水生昆虫で、全体の 50% に及ぶ。このうち、湿地・湿原・池沼などに生息するネクイハムシ亜科 Donaciinae が 20 点と多産したほか、ゲンゴロウ科 Dytiscidae・セマルガムシ *Coelostoma stultum* といった水生昆虫も認められた。

5.2.4 弥生時代後期以降の昆虫相

弥生時代後期以降については 13 試料の分析の分析を行い、合計 2940 点の昆虫化石を得た。試料採取地点は、弥生時代後期を中心とした環濠・溝、谷 B、古墳時代の水田である。

1) 北区画

・環濠 (試料 16 ~ 20) および溝 (試料 21) 図 5.2-9 ~ 11

弥生時代中期北区画第 2 環濠の弥生後期以降の堆積土より 2 試料 504 点 (試料 16・20)、弥生時代後期の北区画の外環濠から 3 試料 585 点 (試料 17 ~ 19)、同後期の溝から 1 試料 454 点 (試料 21) を得た。

弥生時代後期以降、中期環濠で出現率の大半を占めていた食糞・食屍性昆虫は激減し、かわって食植性昆虫や食肉・雑食性昆虫が増加する傾向が認められる (試料 16 ~ 19)。なかでも、北区画の入り口機能を有していた⁶と考えられている区域にある外環濠 (試料 17) では、検出した 210 点の昆虫のうち、出現率の 58% を食植性昆虫が占めた。種組成をみても、ヒメコガネやコガネムシ *Mimela splendens*、チビタムシ属 *Trachys* sp.、クワヤコウゾを好むクワハムシ *Flautiauxia armata*、ブドウなどの広葉樹を食害するドウガネブイブイ *Anomala cuprea* など、多様な食植性の昆虫が産出した。

しかし、454 点の昆虫化石を得られた北区画南部の環濠湾曲部に平行する溝 (試料 21) では例外的な結果を示した。ここでは、他の後期環濠と同様にサクラコガネ属を中心とした食植性昆虫が多数認められた。だが一方、エンマコガネ属やマグソコガネなどの食糞性昆虫も、中期環濠と同様に高い割合で出現している。

その後古墳時代以降になると、食植性昆虫は弥生時代後期に比べて減少していき、水生昆虫であるキバククロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* などのゲンゴロウ科 Dytiscidae、コガムシ *Hydrochara affinis*・ヒメガムシ *Sternolophus rufipes*・セマルガムシ、湿地性昆虫のネクイハムシ亜科、地表性歩行虫であるハネカクシ科やオサムシ科が増加するようになる (試料 18・20)。

2) 南区画

・環濠 (試料 27) 図 5.2-11

南区画の東部に位置する弥生時代後期の環濠からは 65 点の昆虫化石を得たにすぎない。食肉・雑食性昆虫 (22 点) を中心に、食植性昆虫 (17 点)、マダコガネなどの食糞・食屍性昆虫 (10 点) も産出した。

3) 谷B (試料 22 ~ 26) 図 5.2-12

谷Bからは弥生時代後期から中世にかけての 5 試料 984 点を得た。弥生後期においてはオサムシ科や、キマワリ属 *Plesiophthalmus* sp. といった食肉・雑食性昆虫とサクラコガネ属やハムシ科などの食植性昆虫を中心とする組成であった。後期以降は、イネネクイハムシなどの湿地性の食植性昆虫や、セマルガムシ・ガムシ *Hydrophilus acuminatus*・ゲンゴロウなどの水生昆虫が増加する傾向を示した。

4) 南水田域 (試料 28) 図 5.2-13

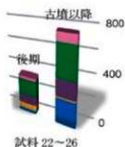
南水田域北側の水田遺構からは、計 123 点の昆虫化石が検出された。優占したのはオサムシ科やハネカクシ科などの食肉・雑食性昆虫で全体の 51% に及んだ。水生昆虫に関しては 15% を占め、稲作害虫として知られるイネネクイハムシ (10 点) が産した他、ゲンゴロウ科 (4 点)、ガムシ科 (7 点)、セマルガムシ (6 点) などの水生昆虫が認められた。続いてサクラコガネ属などの食植性昆虫が 20% を占めた。

5.2.5 まとめと考察

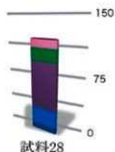
朝日遺跡の弥生時代中期では、食糞・食屍性昆虫を中心とした人の集中居住や環境汚染を示す昆虫群・都市型昆虫が多産している。これらの昆虫群は特に北区画付近で多く認められており、弥生時代中期の環濠内部もしくは周辺環境は、生活ゴミや人獣の糞尿、動物の死骸などによって高度に汚染されたものであったことが推定される。1991 年度の調査では、遺跡を東西に横断する弥生中期の溝中から同様の組成をもつ昆虫化石群が検出されているが、朝日遺跡北区画内においても、同様の人為度の高い環境が展開していたことが指摘できる。一方で南の墓域では、ネクイハムシ亜科などの湿地性昆虫や、ゲンゴロウ科やガムシなどの水生昆虫を中心とした昆虫組成が認められており、遺跡南部は人の気配が感じられない空間であった可能性が伺える。

弥生時代後期に入ると、北区画環濠内の昆虫組成は、汚染環境の指標昆虫の割合が高いものから、ヒメコガネなど食植性昆虫やオサムシ科などの食肉・雑食性昆虫を中心としたものに変化する。そして古墳時代以後、朝日遺跡は徐々に湿地化していく。

朝日遺跡の昆虫相は、大まかに以上のような変遷をとげる。だが、弥生時代後期でも例外的に、食糞性昆虫が多産する溝 (試料 21) が北区画環濠の南部に存在している。さらに、この溝の直下に位置する弥生時代中期の土坑 (試料 5) でも、極端に食糞性昆虫に片寄った昆虫組成が認められて



試料 22~26
図 5.2-12
谷における
昆虫化石出現率



試料 28
図 5.2-13
古墳時代水田の
昆虫化石出現率



おり、これらの遺構が糞便や生活ゴミの投棄場所として利用されていたとも考えられる。このような結果は、遺構の機能を考える上で重要な試料であり、今後さらなる検証が必要であると思われる。

また、南部の古墳時代の水田遺構から得られた昆虫化石は、オサムシ科などの地表性歩行虫を中心とする組成であった。この水田遺構では、非常に多くのイネの機動細胞珪酸体⁷が検出されている。だが典型的な水田耕作土で従来確認されてきた昆虫組成は、水生昆虫を中心としたものであり⁸、今回の分析結果とは幾分異なる。今後の検討課題に挙げられる。

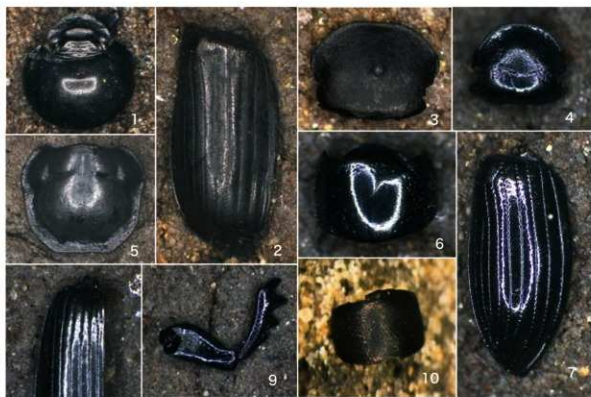
昆虫化石は他の微化石分析と比較して、化石産出地点周辺の古環境の復元に有効であるとされる⁹が、今回の成果はそれを顕著に示したといえるだろう。今後はこの特性をさらに生かした研究方法を追求していきたい。

引用文献

1. 森 勇一, 1992, 愛知県・朝日遺跡(弥生時代)における都市型昆虫群集, 朝日遺跡Ⅱ・自然科学編, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書, 31:187.
2. 森 勇一, 1992, 珪藻および昆虫化石群集から得られた朝日遺跡の古環境変遷, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書, 31:71-131.
3. 森 勇一, 2002, 愛知県朝日遺跡(中世)より産出した昆虫化石群集, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書, 83:519-567.
4. 藤山誠一, 2007, 第2部 遺跡の調査成果, 朝日遺跡Ⅶ 第1分冊遺構, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書, 138:140.
5. 日本応用動物学会編, 1987, 農林有害動物・昆虫名鑑, 日本植物防疫協会, 379.
6. 赤塚次郎, 本文編P.12
7. 鈴木 茂, 2007, 朝日遺跡における水田遺構と北居住域内遺構の植物珪酸体, 朝日遺跡Ⅶ 第3分冊総括, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書, 138:146-151.
8. 森 勇一, 1993, 静岡県・池ヶ谷遺跡の水田遺跡より産した稲作害虫について, 池谷遺跡2 自然科学編, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書, 46:201-218.
9. 森 勇一, 1998, 昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境復元, 国立歴史民俗博物館研究報告, 81:312.

謝辞

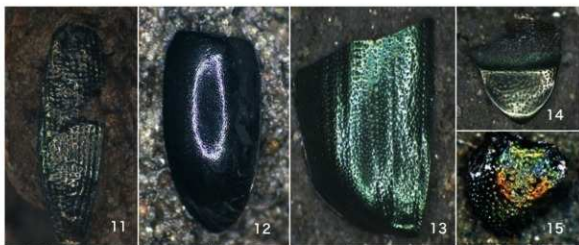
本稿をまとめるにあたり、赤塚次郎氏・藤山誠一氏・川添和曉氏・鬼頭剛氏・永井宏幸氏・堀木真美子氏および整理補助員の皆様方をはじめとする愛知県埋蔵文化財センターの皆様には大変お世話になりました。また、試料採取にあたっては、国際文化財株式会社の皆様にも多くのご協力を頂きました。心より御礼申し上げます。



地表性歩行虫

写真 昆虫化石の顕微鏡写真

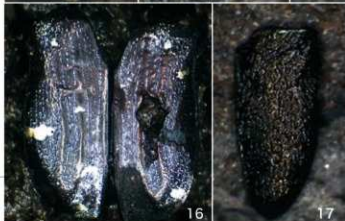
1. コプマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse 頭部2.1mm(幅)
2. オオマダソコガネ *Aphodius haroldianus* Balhasar 左上翅6.0mm
3. オオマダソコガネ *Aphodius haroldianus* Balhasar 頭部3.2mm(幅)
4. マダソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 頭部1.8mm(幅)
5. モンシムシ属 *Nicrophorus* sp. 前胸背板6.1mm(幅)
6. マダソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 前胸背板2.0mm(幅)
7. マダソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 左上翅2.8mm
8. ツヤヒラタゴミムシ属 *Sigruclus* sp. 左上翅5.1mm
9. マダソコガネ属 *Aphodius* sp. 右前脚2.0mm
10. ハネカクシ科 *Staphylinidae* 前胸背板2.5mm(幅)



水生昆虫・陸生昆虫

11. イネネタイハムシ *Donacia provosti* Fairmaire 左上翅4.2mm
12. セマルガムシ *Coelostoma stultum* (Walker) 右上翅3.2mm
13. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 左上翅4.4mm
14. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky 小腸板2.2mm(幅)
15. アカガネサルハムシ *Acrothidium guschkevitchii* Motschulsky 頭部1.8mm(幅)
16. コアオハナムグシ *Oxyctenonia jucunda* (Faldernmann) 左上翅8.5mm
17. チビタマムシ属 *Trachys* sp. 右上翅 3.0mm

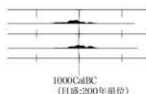
図 5-2-14 昆虫化石の顕微鏡写真



■ 6.1 朝日遺跡標準層序の暦年代

6.1.1 朝日遺跡標準層序

朝日遺跡では事前に標準層序を設定¹⁾し、分散する各調査区単位での層位の統一を考慮した調査を実施した。その経過の中で、各調査区において標準層序による測定試料の採取を行い、その結果に基づいた堆積時期の推定を整理しておきたい。なお試料は草本性の材を中心に実施した。まずシルト・中粒砂が露出する基盤層である朝日G層は、1060BC-970BC、1040BC-970BCというAMS炭素年代較正值が得られている。前者は06A区逆茂木設置溝、後者は谷Bの基盤最上層での試料であり、谷地形周辺部での基盤中粒砂の堆積がB.C.1000前後まで継続していることが推測できる。以下、順を追って層序堆積の年代幅推定と土器編年との関係を、まとめておくことにしたい²⁾。

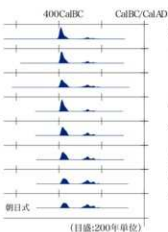


朝日G層

6.1.2 朝日式・貝田町式はいつ頃はじまるのか

朝日遺跡の集落景観を決定づけたと推測できる「朝日式」期は極めて重要な時期であり、特に周辺の水の流れを含めて、環境を大きく改変させようとした力強い動きが認められる時期と評価できる。

中期前葉の朝日式期に所属する試料の測定結果については、左図で明らかのように極めて安定した値が見られる。土器附着炭化物を含めておおむねB.C.400を遡る試料はほとんど確認できず、400BC-360BCの中でまとまる傾向が見られる。したがって現状では、朝日式の中心を前4世紀前半期に位置づけることが可能と思われる。因に試料は06Ba区005SD下層を中心とする³⁾。



朝日式

続く貝田町式はやや試料数が限定されるが、320BC-200BCを中心とした確率分布を示すものが多く見られる。また貝田町式がB.C.200を著しく下ることは考えにくいと思われる。ここでは一応、前4世紀後半から前3世紀にかけての土器様式と推定しておきたい。

6.1.3 高蔵式およびその前様式の年代幅

朝日遺跡の景観を一変させるような出来事性(朝日T-SA層)を含む興味深い時期である。まずはその直前様式の試料を見ると土器附着炭化物試料として比較的安定した値が提示できる。貝田町式の値を踏まえると

*1 2.1 標準層位の項目を参照

*2 分析等はパノ・サーヴェイ株式会社依頼し、加速質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定結果に基づくものである。なお暦年代較正にはOxCal3.10(較正曲線データ:INTCAL04)を使用

*3 図6.1-2を参照

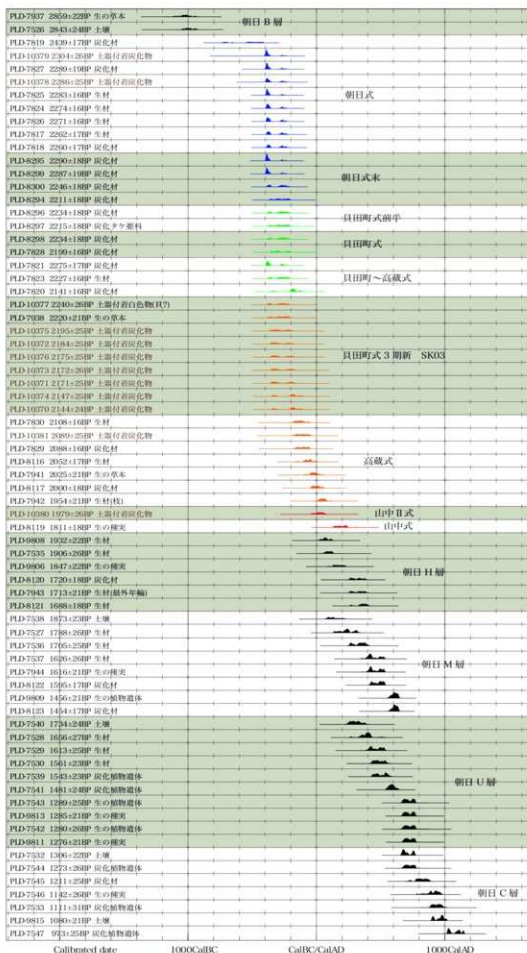


図 6.1-1 校正暦年代一覧表

210BC-150BC を中心とした炭素年代を推定することができる。

高蔵式期については、朝日 T 層での各調査区における試料を基にまとめてみると、明らかに貝田町式 3 期新との時期差が見られる点が注目できる。PLD8116 は 06A 区 007SD 最上層の試料であり、T-SA 層によってもたらされた粗粒砂内の試料である。1 σ 95BC-35BC, 2 σ 120BC-10AD。そしてその直上の堆積試料が PLD8117 であり、1 σ 40BC-25AD, 2 σ 45BC-55AD。PLD7941 は 06A 区 004SD 逆茂木設置溝を覆い尽くした砂層 (T-SA 層) 内の試料であり、1 σ 50BC-5AD, 2 σ 100BC-50AD。そして PLD7942 はその直上に堆積した試料であり 1 σ 20AD-75AD, 2 σ 90AD。PLD7942・8117 は八王子古宮式期の可能性が高く、したがって高蔵式の下限は前 1 世紀の中にも求めることができるものと想定し、おおむね前 2 世紀にははじまっており、前 1 世紀の中で終焉を迎える可能性が高い。

朝日式：前 4 世紀前半期

貝田町式：前 4 世紀後半期～前 3 世紀

貝田町式 3 期新：前 3 世紀末葉から前 2 世紀前半

高蔵式：前 2 世紀後半～前 1 世紀

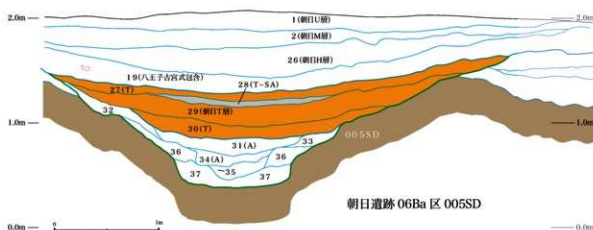
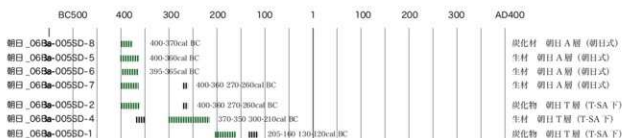


図 6.1-2 06 区 005SD 断面図とサンプル採取地点

6.1.4 弥生後期, 八王子古宮式・山中式

以上のように高蔵式終末段階に堆積したであろう朝日 T-SA 層を鍵層として整理すると、2カ所の試料からは 40BC-35BC, 5AD-20AD を中心とする時期に、洪水性の砂層である朝日 T-SA 層が広範囲に堆積した可能性が想定できる。すると、06Ba 区 005SD 断面観察結果からその後に八王子古宮式が登場することを踏まえると、弥生後期の開始を遅くとも西暦 1 世紀初頭、あるいは前 1 世紀末葉に遡る可能性が高いことになる。したがって後続する山中式期は、西暦 1 世紀中頃から後葉を中心とする土器様式と位置づけることができよう。この点は土器付炭化物の分析結果とも大きく矛盾は生じないものと理解している。

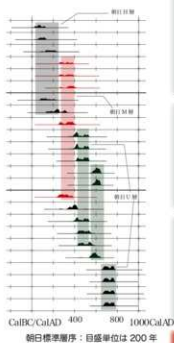
ここでは弥生後期の年代幅を、前 1 世紀末葉から西暦 2 世紀はじめごろの 150 年間前後と見積もっておきたい。

6.1.5 朝日 H 層・M 層・U 層の時間幅

朝日 H 層・M 層・U 層について各調査区での試料の採取とその結果を整理すると、以下のようにまとめることができる。まず AMS 炭素年代較正値を大きく 5 つにまとめることができる。まず第一に朝日 H 層を中心として見られる 105AD-220AD。次に H 層から U 層にかけての 250AD-400AD を中心にしたまとまりが存在する。三つ目に朝日 M・U 層での 410AD-540AD。四つ目は同じく朝日 M・U 層であるが、570-640AD を中心とした比較的まとまりのある数値が見られる。最後に朝日 U 層での 670AD-780AD。これらの測定結果と各試料採取層序、そして供伴遺物を総合すると、おおむね以下のように整理することができる。

朝日 H 層は廻間様式の遺物を供伴することが多く、西暦 2 世紀から 3 世紀前半期にかけての堆積層と推定することが妥当と思われる。ただし山中式期に所属する遺物群を包含する層序との区分が明確ではない。八王子古宮式・山中式土器の供伴層位からは西暦 1 世紀前後の炭素年代が得られている。これを踏まえると H 層の堆積を西暦 1・2 世紀の 200 年前後を中心とすると考えておきたい。次に無遺物層を含む朝日 M 層からは、松戸戸様式に所属する遺物を伴う場合が多々確認されている。したがって朝日 H 層から朝日 U 層までにわたって分布する、250AD-400AD という数値結果を、朝日 M 層の時間幅と位置づけておきたい。朝日 U 層のはじまりを 410AD-540AD とし、その最終堆積環境を 670AD-780AD と考えておきたい。その点は朝日 C 層がおおむね西暦 800 年以降の堆積層である点を踏まえても容認されるものと思われる。

なお朝日 H 層の下部に堆積した朝日 T 層は、特徴的な黒色のシルト混じりの砂層であり、前 1 世紀を起点にしてそれ以前に堆積したものと想定しておきたい。主に高蔵式以前の遺物が包含される。



■ 6.2 朝日遺跡出土土器に付着した炭化物の年代学的調査

国立歴史民俗博物館年代研究グループ

藤尾慎一郎・尾畷大真

2006年9月28日と29日の二日間にわたり、愛知県朝日遺跡から出土した弥生土器約50点の付着炭化物を採取し、前処理後、測定をおこなった結果、25点の炭素14年代値を得た。本稿では、付着炭化物から得られた値について報告し、その実年代と、朝日遺跡出土弥生土器のもつ年代的特徴について考察する。

なお、試料調製は年代測定研究グループの遠部慎がおこなった。

6.2.1 測定した遺跡と土器

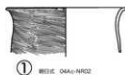
朝日遺跡の試料は2005年度調査で出土した土器を中心に、炭化材、貝などを測定した。ここでは弥生前期末～後期、とくに弥生中期の貝田町式や高蔵式を中心とする土器について報告する。土器の考古学的な特徴は本文に譲るとして、炭素14年代値、確率密度、炭素同位体比、について報告する。なお、土器の時期比定は愛知県埋蔵文化財センターの永井宏幸・赤塚次郎による。今回測定した試料を時期ごとに並べて報告する。

①は中期初頭に位置づけられた土器である。朝日式1期(ACEJ-47)で口縁部外面のスを測定した。炭素14年代値はPLD8705: 2320±25 ¹⁴C BPである。第1様式新段階に併行するもので405-360 cal BCが94.6%の確率密度を示し、各地の併行する土器の炭素14年代値と整合的である。

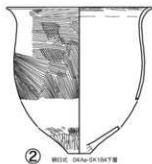
②は中期前葉に位置づけられた朝日式2期である。胴部外面のスを測定したものである。炭素14年代値はPLD8796: 2235±20 ¹⁴C BP、較正年代は315-205 cal BCが71.7%の確率密度を示す。同位体比は、サンプルの量が少なく測定できなかった。

中期初頭は較正曲線が前400年頃に急激に落ち始めてから前4世紀後半で一度底を打った後再び反転上昇し、前3世紀前半で再びピークを迎え下降し始めるという、きわめて複雑な時期にあたる。中期初頭と中期前半との境界がどこにくるかについてはまだ確定していないが、②の炭素14年代値が2235 ¹⁴C BPで低いと、下限が複雑な領域にかかってしまう。したがって較正年代を絞り込みにくく、確率密度も50～70%台と低くなっているのである。

③から⑫は中期中葉の貝田町式である。④・⑤・⑦は貝田町1式期、⑥は貝田町2式期、⑧～⑫は貝田町式3期に細分されている。すべて外面付着のス試料で、⑩と⑫が深鉢、のこりは甕である。炭素14年代値は④のPLD8703: 2315±20 ¹⁴C BPを最高値に、⑪のPLD8700: 2130±20 ¹⁴C BPを最小値としてその間に分布する。較正年代は較正曲線が波打つ



① BEJC OMA-NH2



② BEJC OMA-SH167

ている部分にあたるので割と幅広く出ており、確率的には前4世紀初頭から前3世紀末まで約200年の幅をもち、統計的にはこれ以上、絞り込むことはできない。

ただ中期中葉の土器型式であることや、1～3式に細分されているという考古学の成果を利用すると、前期末～中期初頭の土器型式に相当する炭素14年代値を示した④は除外できるため、ほぼ前3世紀に収まるのではないかと考えている。④は $\delta^{13}\text{C}$ 値が -21.8% 、C/N比が33.4なので、海洋リザーバー効果の影響で古く出たとは考えにくい。なお、③、⑤、⑥、⑪、⑫は $\delta^{13}\text{C}$ 値が -11.8 、 -11.8 、 -16.8 、 -14.1% と、 -10% 台で重いので C_4 植物系の炭化物であった可能性があるが、いずれも外面付着のススであることに注意が必要である。

貝田町式1～2期のうち⑤と⑥は前3世紀におさまる。貝田町式3期に比定された⑨～⑪は炭素14年代値が2155～2130¹⁴C BPを示し、炭素14年代値からみて貝田町式の中でも新しい傾向を示すが、中期後半の年代にもきわめて近いという特徴をもっている。

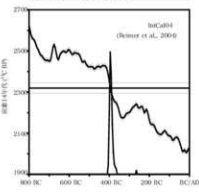
⑬から⑱までは中期後葉に位置づけられている高蔵式である。5点が深鉢や甕の胴部外面に付着したスス、1点が甕の脚内面の魚げである。⑱の 2240 ± 20 ¹⁴C BPを最高値に、⑰の 2145 ± 20 ¹⁴C BPを最低値とし、2155¹⁴C BP付近を中心とする炭素14年代値を示す。較正年代では前4世紀半ばから前2世紀後半までと広い存続幅を持つが、上限下限とも考古学的に推定してきた年代よりも100年ほど古く出ている。⑬や⑱のように $\delta^{13}\text{C}$ 値を見る限り海洋生物の影響を疑えるものもわずかにみられるが、C/N比をみるかぎりそれが植物質のものであることを示すし、いずれも外面に付着したススである。なお、貝田町式と同様、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が -10% 台のものが、⑬、⑮、⑰の3点存在する。3点とも底部外面のススで、貝田町式と同様に内面起源のものではないことに注意が必要である。

⑲から㉔は後期前半に位置づけられている山中式である。㉔か内面の煮魚げのほかはすべて外面のスス試料である。炭素14年代値は㉔の 2055 ± 20 ¹⁴C BPを最高値、㉓の 1960 ± 25 ¹⁴C BPを最低値として、 1990 ± 20 ¹⁴C BP頃を平均としている。較正年代は、前2世紀から後1世紀まで約300年にわたっており、上限下限とも考古年代に比べて150年ほど古い年代となっている。海洋リザーバー効果の影響を疑えるものは、内面の煮魚げをもつ⑲(ACAN-1a)だけである。㉔のように外面のススが C_4 植物系のものが1点ある。㉔は内面の煮魚げで $\delta^{13}\text{C}$ が -12.2% なので、 C_4 植物の可能性はある。

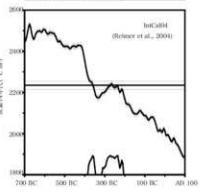
㉕は廻間I古式の甕で、胴部下位外面のススを測定したところ、PLD8794: 1915 ± 20 ¹⁴C BPという炭素14年代値を得た。 $\delta^{13}\text{C}$ 値など同位体比は測定していない。較正年代は50～130 cal ADが93.8%の確率密度をもつ。考古学的に推定されてきた年代よりも150年ほど古く出ている。



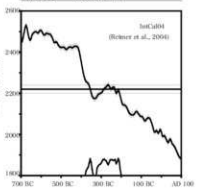
① 試料番号 ACJ3-47
機関番号 PLD-8765
炭素14年代 2528±25 年 BP



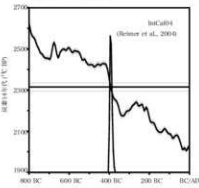
② 試料番号 ACJ3-50
機関番号 PLD-8766
炭素14年代 2235±20 年 BP



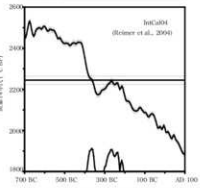
③ 試料番号 ACJ3-53
機関番号 PLD-8767
炭素14年代 2220±20 年 BP



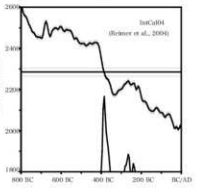
④ 試料番号 ACJ3-39
機関番号 PLD-8763
炭素14年代 2315±20 年 BP



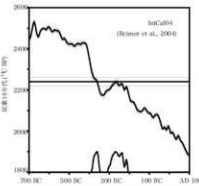
⑤ 試料番号 ACJ3-9
機関番号 PLD-8689
炭素14年代 2245±20 年 BP



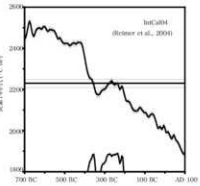
⑥ 試料番号 ACJ3-20-5
機関番号 PLD-8687
炭素14年代 2285±20 年 BP



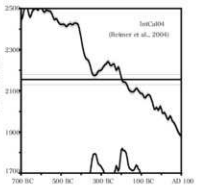
⑦ 試料番号 ACJ3-34
機関番号 PLD-8688
炭素14年代 2240±20 年 BP



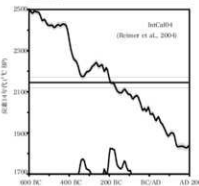
⑧ 試料番号 ACJ3-16
機関番号 PLD-8692
炭素14年代 2230±20 年 BP



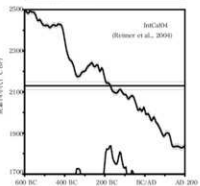
⑨ 試料番号 ACJ3-27
機関番号 PLD-8686
炭素14年代 2155±25 年 BP



⑩ 試料番号 ACJ3-26
機関番号 PLD-8762
炭素14年代 2145±25 年 BP



⑪ 試料番号 ACJ3-25-5
機関番号 PLD-8760
炭素14年代 2130±20 年 BP



⑫ 試料番号 ACJ3-37
機関番号 PLD-8761
炭素14年代 2265±20 年 BP

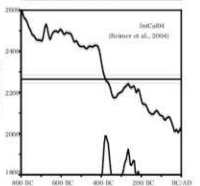


図 6.2-1 暦年校正の確率分布図 1 (丸数字は試料番号)

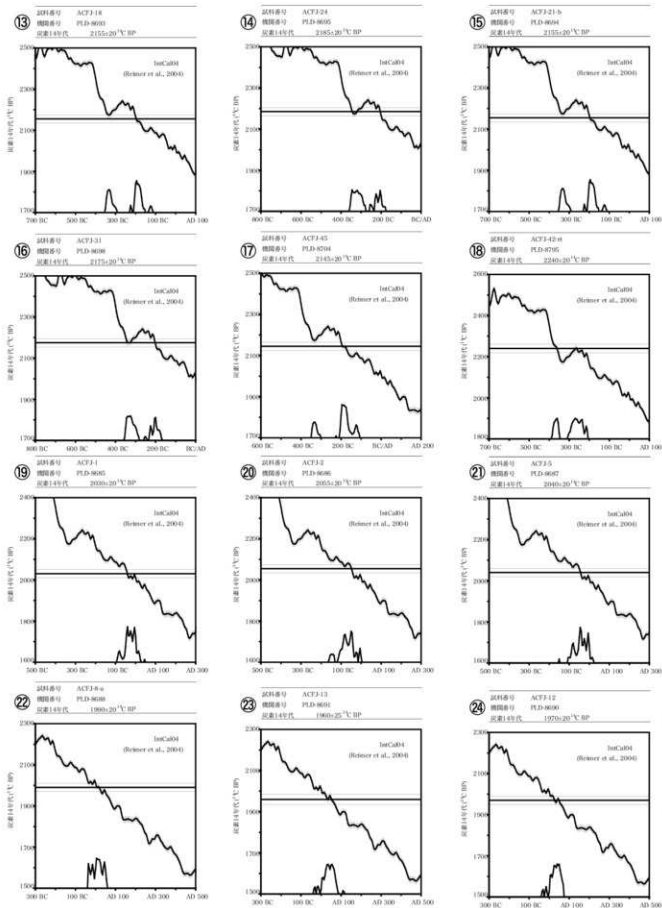


図 6.2-2 暦年較正の確率分布図 2 (丸数字は試料番号)

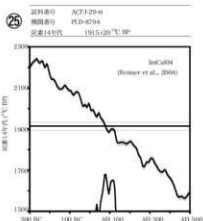


図 6.2-3 暦年校正の確率分布図 3 (丸数字は試料番号)

表 6.2-4 試料一覧 (丸数字は試料番号)

番号	遺構番号	出土地点	試料の種類	炭化物	器種	採取部位	型式名	測定機関番号
①	ACF3-47	調査区 04Ac, 遺構 N902 河道	土器付着物	スス	甕	口縁部・外面	朝日 1	PLD-8705
②	ACF3-50-rt	調査区 04Ab, 遺構 SK184 下層土坑	土器付着物	スス	甕	胴部破片・外面	朝日 2	PLD-8706
③	ACF3-53	14 次 7 区 SD51	土器付着物	スス	甕	底部外面	貝田町	PLD-8797
④	ACF3-39	調査区 05Ab, 遺構 1329SK 土坑	土器付着物	スス	甕	胴部上位～中位・外面	貝田町 1	PLD-8703
⑤	ACF3-9	調査区 05Ab, 遺構 1329SK 土坑, dot1090	土器付着物	スス	甕	底部・外面	貝田町 1	PLD-8689
⑥	ACF3-30-b	調査区 05Dc, 遺構 SD03 溝, dot14	土器付着物	スス	甕	胴部下位・外面	貝田町 2	PLD-8697
⑦	ACF3-34	調査区 Ab, 遺構 902SK, dot***	土器付着物	スス	甕	底部・外面	貝田町 1	PLD-8699
⑧	ACF3-16	調査区 05Ab, 遺構 108SD 溝	土器付着物	スス	甕	口縁部～胴部上位・外面	貝田町 3	PLD-8692
⑨	ACF3-27	調査区 05Cc, 遺構 SD09 溝, dot980	土器付着物	スス	甕	胴部外面破片	貝田町 3	PLD-8696
⑩	ACF3-38	調査区 05Ab, 遺構 108SD 溝	土器付着物	スス	深鉢	胴部破片・外面	貝田町 3	PLD-8702
⑪	ACF3-35-b	調査区 05Ab, 遺構 629SD 土坑	土器付着物	スス	甕	胴部破片・外面	貝田町 3	PLD-8700
⑫	ACF3-37	調査区 05Ab, 遺構 108SD 溝	土器付着物	スス	深鉢	胴部破片・外面	貝田町 3	PLD-8701
⑬	ACF3-18	調査区 05Ca, 遺構 SK125 土坑, dot148	土器付着物	スス	甕	胴部破片	高城	PLD-8693
⑭	ACF3-24	調査区 05Ca, 遺構 SD02 溝, dot16	土器付着物	スス	深鉢	底部下位・外面	高城	PLD-8695
⑮	ACF3-21-b	調査区 05Cd, 遺構 SD81 溝, dot161	土器付着物	スス	甕	底部下位・外面	高城 1	PLD-8694
⑯	ACF3-31	調査区 05Dc, 遺構 SD03 溝, dot72	土器付着物	煮魚け	甕	胴部・内面	高城	PLD-8698
⑰	ACF3-45	調査区 04Ab, 遺構 SD02-4 貯溝, dot55	土器付着物	スス	甕	底部・外面	高城	PLD-8704
⑱	ACF3-42-rt	調査区 04Bb, 遺構 SD46 下層溝, dot144/150	土器付着物	スス	甕	胴部破片・外面	高城	PLD-8795
⑲	ACF3-1	調査区 05Ab, 遺構 067SD 溝, dot207	土器付着物	スス	甕	胴部上位・外面	山中	PLD-8685
⑳	ACF3-2	調査区 05Ab, 遺構 211SK 土坑 1	土器付着物	スス	甕	胴部中位・外面	山中	PLD-8686
㉑	ACF3-5	調査区 05Ab, 遺構 045SD 溝	土器付着物	スス	甕	胴上位・外面	山中	PLD-8687
㉒	ACF3-8-a	調査区 05Ab, 遺構 111SD 溝, dot657	土器付着物	甕	内面	山中	PLD-8688	
㉓	ACF3-13	調査区 05Ab, 遺構 橋 2 覆土, dot148	土器付着物	スス	甕	胴部中位・外面	山中	PLD-8691
㉔	ACF3-12	調査区 05Ab, 遺構 455 S K 土坑, dot843	土器付着物	スス	甕	胴部下位・外面	山中 II	PLD-8690
㉕	ACF3-20-rt	調査区 05Cc, 遺構 SD01 溝, dot17	土器付着物	スス	甕	胴部下位・外面	朝日 1 古	PLD-8794



表 6.2-5 試料一覧と測定結果 (丸数字は試料番号)

番号	炭素 14 年代 (¹⁴ C BP)	暦年校正 (cal BC) 年代 1	確率 1 (%)	年代 2	確率 2 (%)	年代 3	確率 3 (%)	年代 4	確率 4 (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	CN 比	
①	2320	25	405-360	94.6	270-260	0.9				-23.8	8.47	38.9	
②	2235	20	385-350	23.7	315-205	71.7							
③	2220	20	375-340	16.8	325-205	78.7				-11.8	0.43	55.0	
④	2315	20	405-375	95.4						-21.8	7.3	33.4	
⑤	2245	20	390-350	31.7	300-225	57.5	225-205	6.3		-11.8	0.43	34.1	
⑥	2285	20	400-355	78.8	280-255	13.5	245-235	3.1		-16.3	-0.18	30.2	
⑦	2240	20	385-350	27.3	305-205	67.5				-26.0	2.5	33.4	
⑧	2230	20	380-345	20.8	315-205	74.7				-25.2	10.6	27.6	
⑨	2155	25	355-285	36.4	230-105	59.0				-26.5	0.9	-29.8	
⑩	2145	25	350-295	23.7	230-220	1.8	210-90	69.9		-23.9	2.0	33.9	
⑪	2130	20	345-320	5.0	205-90	89	70-60	1.4		-16.8	4.0	94.1	
⑫	2205	20	385-350	53.5	290-230	41.2	215-215	0.8		-14.1	5.1	22.9	
⑬	2155	20	350-290	36.4	230-215	2.6	210-150	51.6	135-115	4.9	-20.1	10.3	22.0
⑭	2185	20	355-275	60.4	280-240	5.1	235-180	30		-17.0	5.9	20.1	
⑮	2155	20	350-290	36.4	230-215	2.6	210-150	51.6	135-115	4.9	-12.6	5.6	47.9
⑯	2175	20	355-280	58	255-245	2.1	235-170	35.4		-26.9	5.5	18.0	
⑰	2145	20	350-300	20.9	225-225	0.4	210-105	74.1		-14.1	-0.01	43.5	
⑱	2240	20	385-350	27.3	305-205	67.5	25			-23.7	11.7	46.3	
⑲	2030	20	95-AD25	94.8	AD45-AD45	0.6	2			-21.2	12.7	40.8	
⑳	2055	20	160-130	9.5	115-15	79.5	15-AD1	6.4		-23.8	12.4	33.6	
㉑	2040	20	155-145	1	110-AD20	94.5				-13.3	0.42	55.0	
㉒	1990	20	AD40-AD55	95.3						-12.2	5.6	17.0	
㉓	1960	25	40-25	3	25-10	4.6	AD1-AD85	86.6	AD110-AD115	1.3	-25.8	11.7	27.1
㉔	1970	20	35-25	3.2	20-10	5	AD1-AD75	87.3		-26.1	11.9	29.1	
㉕	1915	20	AD30-AD35	1.7	AD50-AD130	93.8	26						

* δ とは、すでに前処理をおこなったものの残りを、ガス化から再度おこなったもの
 * AD がついていないものは、すべて BC である。

以上、時期ごとに炭素 14 年代値と校正年代をみてきたが、海洋リザーバー効果の影響が考えにくいにもかかわらず、考古年代よりも古い年代を示すものが高蔵式や山中式など中期末から後期終末の土器に多くみられた。次章で時期ごとに整理した上で問題点について考えることにする。

6.2.2 朝日遺跡出土弥生土器の実年代に関する諸問題

6.2.2.1 弥生前期末、中期初頭、中期前半の実年代

第 I 様式新段階に併行する朝日式 (① PLD8705 : 2320±25 ¹⁴C BP) は前 4 世紀前半、第 II 様式に併行する朝日式 (② PLD 8796 : 2235±20 ¹⁴C BP)、第 III 様式に併行する貝田町式は④を除けばほぼ前 3 世紀におさまるので、九州北部や近畿の併行する土器から得られている炭素 14 年代値とも整合的な結果を示した。

6.2.2.2 弥生中期末の実年代

第 IV 様式に併行する高蔵式は 6 点測定したが、炭素 14 年代値は 2200 台と 2100 台に分かれた。2200 台は⑧ PLD8795 : 2240±20 ¹⁴C BP、あとは 2100 台である。これらは C/N 比や δ ¹³C 値からみても海洋リザーバー効果の影響を考えにくいにもかかわらず、第 III 様式の炭素 14 年代を示す。なぜここまで古い年代が出るのか、課題である。

2100 台は、⑭ PLD8695 : 2155±20 ¹⁴C BP、⑯ PLD8698 : 2175±20 ¹⁴C BP、⑰ PLD8693 : 2155±20 ¹⁴C BP、⑱ PLD8694 : 2155±20 ¹⁴C BP、⑲ PLD8704 : 2145±20 ¹⁴C BP であった。2100 台を IntCal04 で照合すると、前 2 世紀代を示すことが多いが、日本産樹幹の測定値 (図 6.2-6) をみても、前 100 年ごろに⑲と同じ 2185 ¹⁴C BP という炭素 14 年代値があることがわかっている [Sakamoto et al. 2003]。したがって、高蔵式で測定した 2100 台は、校正年代に直すと、下限は前 1 世紀までかかるので、日本産樹幹の測定値から見ると無理のない値であることがわかる。

6.2.3 弥生後期の実年代

弥生後期から古墳初頭にかけての時期に属する山中式、廻間 I 古式の炭素 14 年代を IntCal04 と照合した。山中式 6 点は後期の前半に相当する土器である。炭素 14 年代値は 2055 ~ 1960 ¹⁴C BP の範囲で、九州北部後期初頭の測定値である 1900 台を含んで、上限は 2000 台中心にかかっている。2000 台のものを誤差と考えると下限がころうじて 1900 台におさまる。ただ IntCal 04 と照合すると紀元前後にまたがってしまうので、日本産樹木の炭素 14 年代と照合する作業が必要である。

廻間 I 古式は、VI 期の土器型式で⑳ PLD8794:1915±20 ¹⁴C BP の 1 点しか測定していない。廻間 I 式が併行する近畿の庄内式は 1800 台の値を示すので、100 年ほど古い値が出ていることになる。以上の点を日本産樹木による炭素 14 年代値と比較してみよう。まず、2000 年台を示す山中式であるが、図 6.2-6 によれば、後 1 世紀台にも 2000 台を示す測定値の

あることがわかる。IntCal04 では前1世紀代にぶつかってしまうのだが、日本産樹木との間では後1世紀にも十分照合が可能であることがわかる。

1800台を示す欠山式や1900台の廻間1式は、後2世紀台における日本産樹木の測定値からみて、図6.2-6の対象外となっている。長野県南信濃村遠山川河床埋没樹幹の測定が進んだ時点であらためて後2～3世紀の炭素14年代測定値について考えてみたい。

6.2.4 C₄植物

今回測定した朝日遺跡のデータにはC₄植物の特徴を示すものが顕著であった。仮に $\delta^{13}\text{C}$ 値が-10‰台のデータについてみると、弥生中期に7点、後期～古墳前期に4点存在した。このうち内面の焦げや外面の吹きこぼれは2点のみで、あとはすべて外面、とくに底部に付着したススに起因するものであった。このことから燃料材との関係を推定することができる。

このようなデータは、縄文土器にはあまり確認されておらず、弥生時代の三重や愛知など伊勢湾沿岸地域での報告例が多いことから、縄文時代には一般的でなく、弥生時代になって燃料材として普遍的になった植物が想定される。

6.2.5 おわりに

朝日遺跡出土の前期末から古式土師器までの炭素14年代値は、九州北

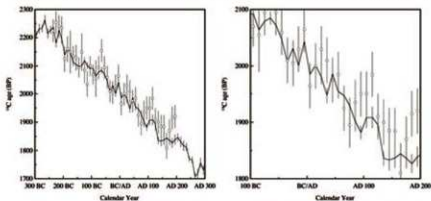


図 6.2-6 箱根樹木炭素14年代とIntcal98 (Sakamoto et al. を改変)
右は前100～後200年付近の拡大図

部や近畿と整合的な値を示す時期と、そうでない時期とに分かれた。特に弥生中期末～後期末の土器型式の炭素14年代値が50～100年ぐらいくる傾向を指摘した。

これは炭素同位体比やC/N比からみても海洋リザーバー効果の影響とは考えにくい。そこで坂本稔の箱根スギの炭素14年代値 [Sakamoto et al., 2003] や現在測定を進めている長野県南信濃村遠山川河床の埋没樹幹の結果を見ると、後1世紀後半から後2世紀前葉にかけて50年ほどIntCal04に比べて古くなっており、この時期は日本列島上には50年ほ

ど古くなるような地域効果をみせる地域のある可能性がある(図6.2-6)。図6.2-7は1点ごとに、IntCal04(太線)と日本の樹木から作った較正曲線(細線)に照合した結果を比較して表したものである。貝田町式3期と高蔵式は50年ほど下限がずれており、IntCal04が古く出ていること、さらに山中式から廻間1式古は下限が100年ほど古く出ていることがわかる。

以上、図6.2-6と図6.2-7から、朝日遺跡の中期後半から末では50年、後期一杯は100年ほど、IntCal04による較正結果が古く出る地域効果の可能性を指摘しよう。日本産樹木との照合結果から得られた較正暦年代は、考古学側で考えている年代とほぼ一致している。このようなことが起こる理由については今後、検証していく必要がある。

ただ問題は、県埋蔵文化財センターが木炭を中心に測定した炭化物の年代値に古く出る傾向が認められないことである。付着炭化物は木炭などに比べて古い年代を出すのではないかと批判に應えるためにも、その起源物質を含め慎重に検証する必要がある。

たとえば想像をたくましくすると、今回の試料が土器外面に付着したススを中心としていることから、燃料材との関係についてみてみると、C₄植物を燃料にしても炭素14年代が古くなることはないが、もし、海藻を燃料としていたらどうだろうか。この地域が土器製塩と関係が深い地域であることを考えると、検討してみる価値はありそうである。

C₄植物燃料の可能性や、土器製塩に伴う燃料材との関係で、いろいろな可能性をはらんだ今回の測定結果は、今後、新たな研究の地平を開くことが期待される。

参考文献

藤尾慎一郎(2007.3)「土器型式を用いたウィグルマッチ法の試み」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, pp.157-184.

藤尾慎一郎(2007.5)「弥生時代の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻, pp.7-19, 雄山閣出版)。

藤尾慎一郎(2007.5)「九州における弥生時代中期の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻, pp.45-51, 雄山閣出版)。

藤尾慎一郎(2008.2)「九州へ瀬戸内における弥生稲作の開始年代」『東アジアの古代文化』134号, pp.2-25, 大和書房。

山本直人(2007.5)「東海・北陸の弥生時代の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ』pp.35-44, 雄山閣出版)

Sakamoto et al. 2003: Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. *Radiocarbon*, 45, pp.81-89.

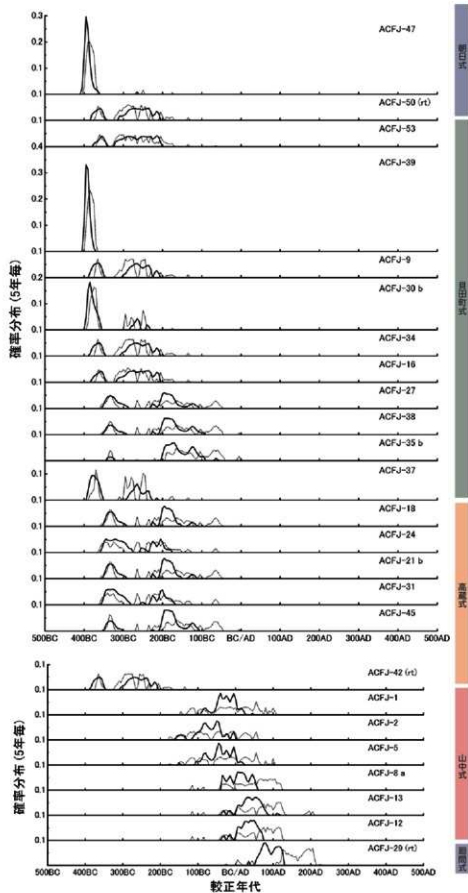
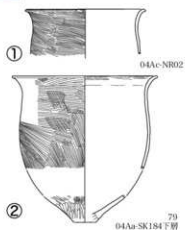
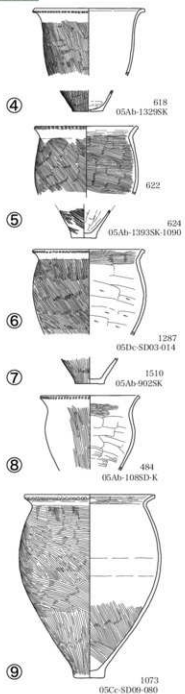


図 6.2-6 IntCal04 と日本産樹木による較正暦年代の比較

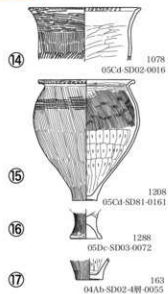
朝日式



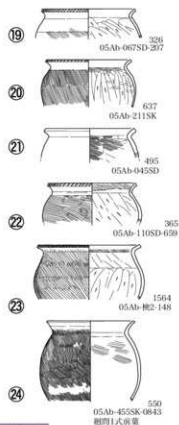
貝田町式



高蔵式



山中式



廻間1式



図 6.3-7 炭素年代測定に使用した朝日遺跡出土土器 1/6 (丸数字は試料番号)

■ 7.1 朝日遺跡としての集落景観と変遷

7.1.1 前期の風景

開拓者たちの定着

朝日遺跡としての具体的集落景観の誕生を、朝日遺跡 95・96 区 SD101 (前期環濠集落) の掘削段階と考えると、それは西志賀式 1 期に位置づけられる。現状の炭素年代結果を援用すれば紀元前 600～500 年頃となる。その前史も認められるが本格的な開闢期としては、この段階を考える事は衆目の一致を見ているものと思われる。彼らは遠賀川式土器という著しい特徴的な器と稲作技術、そしてそれに伴うであろう神々と儀礼を携えていたことだろう。その風景は、この地域のそれまでの部族社会には見られない習俗性を形づくるものでもあったと考えることができる。そしてまた重要な点は、朝日遺跡が立地する場所が、縄文中期の小海退と晩期の海進期の間起こった気候変動や、その後の弥生前期の小海退を経て、広い湿原景観が誕生し、人々の定着を可能にさせていったという側面も見逃せない。しかしそれにしても貝殻山地点を選択した意図が、何処にあるのかは別問題のようにも思われる。俯瞰して当地域の景観を復元すると、干満の差が著しい伊勢の海に面し、行く筋かの小河川が流れ込む場面があり、さらに標高 5m ラインを追っていくと閉ざされた湾状の景観が想定できる (図 1.4-2)。この濃尾平野低地部に新たに誕生した空間が、開拓者たちにとって生活に適した理想郷であったかどうか問題だ。少なくとも海に面した砂堆という若干の高まりが、魅力的な場所と意識していたことは想像に難くない。そしてこうした開拓者のイメージを、近畿・伊勢地域という西からの入植者と想定する点は、多くの研究者が言及する所である^{*1}。

習俗の多様性と塩害

朝日遺跡の前期環濠集落の規模とその具体的な内容はほとんどわかっていないが、現状では当初より 100m を遙かに越える規模を有し、200m を凌駕する可能性すらある。またその周辺には、遠賀川系とは異なる器をも所有する部族集団の存在も指摘されている。さらに当然のようにその背後には縄文以来の伝統的な地域社会が存在した。つまり日常的に近接する範囲での習俗の多様性が、この遺跡の独特のポジションとその後の遺跡形成

遠賀川式土器

*1 石原立人 1994 「朝日遺跡のイメージ」『朝日遺跡Ⅴ』(土器編・総論編) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集

の決定的な方向性を形作っていったものと考えておきたい。

ところで、朝日遺跡が誕生したこの場所が一般的に言われるような稲作耕作地として適した場所であったかはいささか問題がある。現在までの長く膨大な調査成果からは、前期・中期・後期を通じて、安定した水田耕作地を想定する手がかりはほとんど見つかっていない。具体的な水田耕作関連遺構すら見られない。今後の調査に委ねる必要があるが、根本的に塩害という致命的な地形空間に位置する場所に、大型の居住区域を作り出すとするその意図が、やはり不可解な点である。現在においてさえも、周辺の河川は潮の満ち引きに応じて川の逆流が見られる。さらに勾配がゆるく河口が広い場面で「塩水くさび」という現象も想定できる。広大な水田を生み出すには、堰・堤による水の制御や海水との分離装置が不可欠であったと思われる。はたしてこのような環境下において新たな開拓者たちは何を目的として定着していったのであろうか。朝日遺跡での動植物遺体の多様性と豊富さ・貝塚形成などは、この遺跡が水田耕作を主要な目的としてのみ誕生し、発展したものではないことを物語っているのではないかと思う。

7.1.2 中期の風景

朝日式という画期的な時代

紀元前 400 年を境として朝日遺跡は大変化を遂げる。それはまさに中期前葉の土器様式・標識遺跡として位置づけられた「朝日式」期にあたり、前代未聞の巨大な集落景観に変貌する。そしてそれを成し遂げるために二つの重要な場面の設定が行われた。

まず谷 A と呼んだ幅 30m (最大 50m) の窪地状の景観と、その周辺に存在した小河川から「水害」を開放した点である。つまり大規模な計画的な治水事業を推進し、水の流れを変えてそこに広大で乾燥した空間を用意した点にある。調査成果からは朝日式以降に谷 A には恒常的な水の流れの痕跡は認められない。次にその窪地の北側に、堀と呼んでも良い大溝を廻らした北区画を誕生させた。水の流れの制御施設と北区画という場面の設定がその後の朝日遺跡の繁栄を保証することになる。そしてこの大事業をなし得た指導者の墓は東墓域の中に求めることができる。墓域空間から想定して、SZ254 の被葬者であることはほぼ間違いなからう。この時期、列島最大規模の方形周溝墓と考えてよいもので、一辺 20m を超す巨大な墳墓の登場である。

集落景観は一変し、谷 A をはさんで南側には 600m を越える大規模な居住域 (南区画) が作られ、多様な形態の建物が営まれる。北側には前期の環濠空間を踏襲するかのような 250m ほどの明確な区画 (北区画) が作られ、大型の円形竈穴建物とさまざまなモノ作り集団の抱え込みが認められる。さらに墓地の統合が進み、集落から見て「日の登る」方向には指導者たちの大型方形周溝墓群が列状配置された「東墓域」が設定され、対

塩水くさび

水害からの開放

「東」への志向性

照的に西側には等質的な方形周溝墓群が放射状を基本として配置される「西墓域」が生み出される。こうした計画的な集落経営が突如出現し、朝日遺跡への求心力を維持することを目的化した集団とその仲間たち住まう北区画が誕生する。そしてその周囲にはさまざまな人々が集まって、結果的に南区画が誕生した。さらに中央にある窪地（谷A）を巨大な廃棄空間（貝塚・ゴミ捨場）として活用することになる。

SZ208の登場

こうした朝日遺跡の繁栄は、次の土器様式である中期中葉の貝田町式期に受け継がれていき、やがて最大規模の方形周溝墓が造営された（特定墓）。東墓域に存在するSZ208であり、その規模は30mを凌駕する巨大な墳墓であった。この朝日遺跡最大規模の墳墓に眠る被葬者こそが、多重環濠帯を設営しこの遺跡の繁栄を揺るぎないものにした人物であったと思われる。北区画にはあらたに三重の堀を掘削し、多重環濠帯を備えた独特の集落景観に変貌する。そしてその東側に展開した小規模な単位集団を南区画に移住させ、北墓域という広大な墓域を誕生させることになる。したがって西墓域が閉鎖され、墳墓は全て集落の東側に統合されることになった。なお原則的に主軸を東西に置く列墓が基本形となる。

円窓付土器と習俗の変化

中期後葉の高蔵式期に近づく頃、朝日遺跡には従来に無い変化が見られるようになる。まず注目したいのが、朝日遺跡の求心力を支えてきた北区画から生活の足跡が消失する点である。同時に東墓域から巨大な方形周溝墓が見られなくなる。そして墳墓は北・東墓域から拡散し、特定の場所に限定されることはなく、まったく新しく南墓域が出現する。細かく見ると墳墓での重複や改築が盛んに行われ、軸線の不規則性と従来の墳墓の破壊なども認められる。同じ伝統や習俗を持つ部族社会とは思えないような現象があちこちで見受けられ、一つの変革期の様相が表面化する。こうした時期にあらたなアイテムが生み出される。円窓付土器と呼称される不思議な壺である。その分析結果に基づけば、集落縁辺部を飾る道具として位置づけられるようであり（4.5参照）、別の見方からは墓を含めて何らかの特定空間を表示・表象する置物であるように思える。明確な区画を持たず、一見習俗性の破壊現象の表裏として、貝田町式の中で生み出され高蔵式期で完成・盛行するこの道具に込められた目的は、伝統的な風習を否定する風潮の中で人々が生み出した、もう一つの朝日遺跡の求心力である。

高蔵式末葉の洪水

朝日式期に築かれ、この遺跡の繁栄を保証してきたシステムが崩れる場面が到来する。予想を遙かに越える洪水の襲来である。本報告ではT-SA層とした砂の堆積が各調査地区で確認できる。おおむね中期末葉、高蔵式末葉段階に襲来したことが調査成果から確認できている。こうした現象は地域を越えた広域的な自然災害である可能性もあり、中期から後期社会への変化を考える上で重要な要素となるものと考えておきたい。この未曾有

朝日遺跡最大規模の墓

特定墓の消失

T-SA層の堆積

1 調査の概要

2 遺跡の調査

3 編年表

4 特殊遺物・遺物

5 社会の発展

6 閉鎖時代

7 総括

の災害を朝日遺跡はどのように対処したのかという点も、調査成果からうかがい知れるが、その点はまとめて後述する(7.2)。

7.1.3 後期の風景

二つの区画と新たな環濠集落

500年以上続いた朝日遺跡の中期社会も最終景観を迎える時代になる。

朝日遺跡の最終的な集落景観は、弥生後期前半期にある。炭素年代からはおおむね西暦1世紀を中心とする時代と考えておきたい。その集落景観は従来までの朝日遺跡とは大きく異なるものであった。

高蔵式期には明確な環濠・区画された空間を見いだす事はできなが、後期になると再び環濠集落という景観が復活する。具体的には北区画に、あらたに二重の環濠が廻らされ、南区画にも同様な二重の環濠が掘削される。その規模は、北区画では中期段階に設定された環濠内側に設けられ、一回り小さくなる。そして南区画では著しく縮小され、東西わずか230m規模となる。なお環濠の設定時期は調査成果をもとに総合すると、おおむね八王子古宮式期の中に位置づけられ、降っても山中I式期初頭段階である。これ以後には一部の溝整備を除いて、環濠の掘削は見られない。このように谷Aをはさんで北と南に同じ規模を有する溝によって囲まれた区画が出現した。なお、環濠は突出部や出入口・幅広部、また逆に凹み部などが存在し、中期環濠の形とは異なる特徴が見られる。

特定空間と広場

SZ132

今回の調査成果では、北区画についてのあらたな情報を追加することができた。それはまず北区画の南側には広場的な空間が存在し、限定された建物と儀式用の施設が設定されていたことが判明した。また長い朝日遺跡の歴史の中で、環濠内に唯一存在する方形周溝墓がこの特殊な空間の西側に位置づけられることもわかってきた。このSZ132の過去の調査成果では加飾性豊かな器類が出土しており、長方形という形からも、この遺構の評価を墳墓という位置づけを含めて再検討が必要である。加えて金属器関係や装身具類などの出土分布からは、北区画内に存在する内郭区画溝と呼んだ内側に集中する点をあらためて確認することができる。このように北区画は堅穴建物が集中する南区画とはかなり異なる状況が見られるのであり、現状では一般的な居住域と断定するには問題が多い。

北の区画

北区画の性格を評価するもう一つの手がかりは、銅鐻の形とその分布から導きだされた問題である。すなわち南区画から出土する銅鐻は東海系銅鐻の範疇に含まれるものが主体であるが、一方で北区画から出土する銅鐻は多様な形態が見られ一様ではない。ヤジリの拵えやその形は、原則的に所属する部族や集団を象徴するものであり、その点を援用すると同じ集団を抱え込む南区画と異なり、北区画には多様な部族集団が関与していたことにもなる¹⁾。いずれにしろ、この北区画では山中II式期を境にして人々の形跡が急速に見られなくなり、やがて終焉を迎えることになる。

赤塚次郎 2007「東海・沖積低地の弥生時代の武器とその素材」『製作とともに伝わった武器』大塚府立弥生文化博物館 平成19年春季特別展

7.2 洪水 T-SA 層

高蔵式期の末葉段階に勃発した災害痕跡がある。現象としては谷 A 東部を埋め尽くし、墓や建物群に大きな打撃を与えたことは想像に難くない。結果としてこの洪水層を境にして朝日遺跡は中期社会から後期社会に大きく舵を切ることになる。すなわち一旦習俗性の否定というような形に移行するかに見える高蔵式期の様相が一変し、環濠集落の復活とかつての祖霊や軸線を尊重する形態に回帰するのである。ここではあらためて朝日遺跡の画期である、洪水 T-SA 層に係る遺構の概要を整理しておきたい。

逆茂木設置溝

朝日遺跡を代表する遺構として逆茂木がある。その評価はおおむね「弥生戦争」と結びつき「ムラ攻め」戦闘シーンの象徴となってきた。今回の調査成果では、実は従来から指摘されてきたいくつかの矛盾が整理できる。この逆茂木遺構は設置されるべき溝状の遺構があり、その設置時期は中期後半段階を遡り得ないという報告がある。さらに今回の調査成果ではこの逆茂木を覆い尽くす砂層の堆積が洪水性の T-SA 層に関係するものと評価できた。したがって逆茂木景観は中期後葉段階の一過性の施設である点と、谷 A 右岸に限定した施設であった可能性が高い。加えて谷 A 右岸だけに残る「乱杭」も同様な評価で良いものと思われる。こうした特定の場面に特定の時期だけに設定された遺構群を「ムラ攻め」戦闘シーンの傍証とするにはいささか問題が大きい。さらに興味深い遺構が報告されている。北区画の南東部の環濠帯に接して存在する方形壇上施設と呼ばれる遺構である。敷葉工法を伴う堤状の施設と言えよう。またその周辺部での数カ所に見られる堰状の施設の存在がある。これらは大きく見れば高蔵式という時代と谷 A 右岸という場面に共通点が見られる。そして弥生後期段階では活用される事はない。

治水対策用遺構群

以下、朝日遺跡での治水対策を基軸にして想定される歴史を整理しておきたい。まず朝日式期において、谷 A およびその周辺部での水の流れを塞ぎ止めることにより、当地域に広大な居住空間を作り上げ、朝日遺跡のその後の盛行を保証した。しかし、このシステムは中期後葉段階に想定された以上の災害の襲来により破綻する。こうした人知を越えた災害を予見した朝日遺跡の指導者たちは、それに備えるために谷 A 周辺部に次々に水害対策用の施設を準備する。逆茂木や杭列群などである。そして波状的に襲来する洪水はやがて沈静化し、この教訓を基にして川筋を南に大きく変える工事を断行する。谷 B の掘削である。東から恒常的に襲来する水の流れを大きく南に流すことに成功する。おおむね高蔵式終末から八王子古宮式初頭段階と思われる。このように朝日遺跡には、海拔ゼロメートル地帯での水害という宿命との戦いの軌跡が残されていたことになる。

高蔵式

ムラ攻め幻想

谷 B の掘削

1 調査の概要

2 遺跡の調査

3 編年表

4 特殊遺構・遺物

5 社会学的考察

6 閉鎖性

7 総括

■ 7.3 朝日遺跡の墳丘墓

方形周溝型墳丘墓の造営法

朝日遺跡での調査成果に基づく、476基を確認し名古屋市側の調査成果を加えると560基を越える数の方形周溝型墳丘墓（以下方形周溝墓）が調査されている。30mクラスから5m未満のクラスまでのさまざまな大きさと形が存在し、その多様性と墳墓の変遷はこの地域の歴史を考える上で大変重要な資料となる。今回の調査成果によれば、朝日遺跡の方形周溝墓には以下のような特徴が見られる。

- 1：周溝掘削による発生土はそのまま墳丘墓の盛土には使用しない
- 2：造営当初から1m前後の盛土を用意することは少ない。
- 3：数度の埋葬主体の設置により、しだいに墳丘が高く盛上げられる。
- 4：原則的には構築型の主体部埋葬（木棺・土器棺等）を伴う。

一般的に指摘されているような、周溝掘削土を利用して墳丘の盛土を行うという合理的な解釈は、この遺跡では見られない。あらためて盛土用の造成土を用意することが基本であり、埋葬主体はその都度、棺設置後に特定の盛土により覆われることが一般的であり、しだいに封土が高くなる。

専用の造成土を作る

方形周溝墓の盛土には、地層に残るその状態のツチをそのまま用いることはない。ここでは特定のツチを用意するという視点をあらためて強調しておきたい。あるいは複数の粒子をブレンドして造成土を作る事が求められていたようにも思われる。部族社会に残る習俗性と密接な関係を想定しておきたい。さらに調査成果を総合すると、朝日遺跡では埋葬主体に対し、基盤層である黄色シルトを最上層に振りまく、あるいは覆うという行為が多々見られる。加えて環濠の掘削土をそのまま堤に利用することもない。この点も調査成果からは、掘削により大量に発生する基盤シルト・砂層を処理し、別立ての土盛り用の造成土を用いる事が基本である。

祖先神への祈り

各地点での中期の方形周溝墓の中には、07D区SZ452・07Bb区SZ394に代表されるように、山中I式期に墳丘陵橋部付近の整備等が確認できる場合が見受けられる。加えて04Bb区SB12のような墓域内に単独に存在する竪穴建物が確認できる。これらはおおむね朝日遺跡の最終的な集落景観（第5ステージ）である、山中I式期の遺物が発見される場合が多い。集落周辺に残る墓域内での同時多発的な墳丘墓の整備や供献行為、こうした現象は個別分散的な出来事と解釈するよりも、朝日遺跡の長い集落史の最後を飾る、祖霊との離別を前提とした墓前祭祀的な形跡であると推測しておきたい。朝日遺跡としての集落景観は、こうした宗族的な集団単位による祖先神との会話を経て、やがて終焉を迎えることになっていく。

朝日遺跡の風景 2008

図版



● 筒形土器に刻まれた「籠」
05Da区 SK63



● 翡翠原石 06Bc区 051SK (44×37mm 80.0g)

● 朝日遺跡遠景 朝日遺跡が所在する清洲 JCT より名古屋駅方面を望む（2007 年撮影）

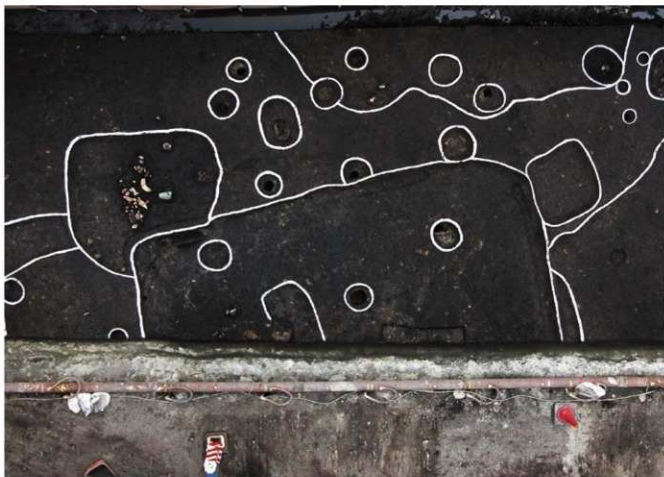




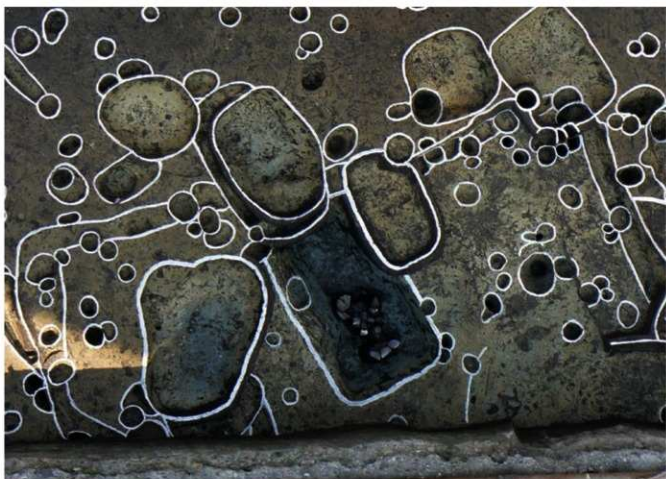












● 04Ab区-SB02 遺物出土状況と調査風景



● 07A区-004SD 逆茂木設置箇所に覆う砂層 (T-SA層)







● 06Ba区-005SD最下層(朝日式)遺物出土状況



● 06Ba区-005SD調査風景







● 06Bd 区 - 谷 A 左岸調査風景



● 06Bd 区 - 谷 A 地層断面と測図風景



● 07Bb 区 - 調査風景



● 07Bb 区 - SZ392・SZ394 (方形周溝墓)



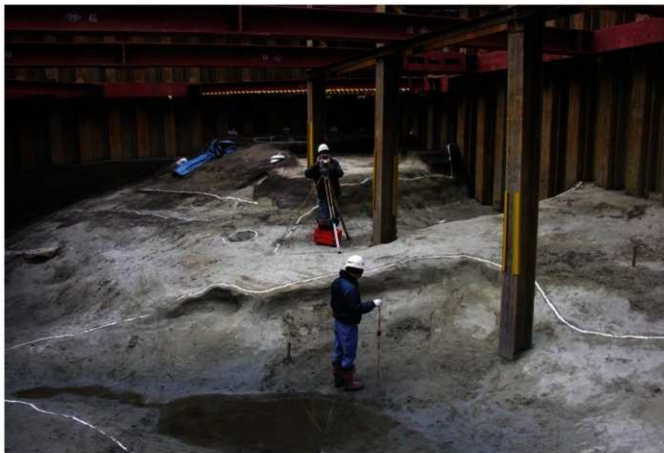




● 05Cd区 - 後期外環濠 SD06 溝内地割断面



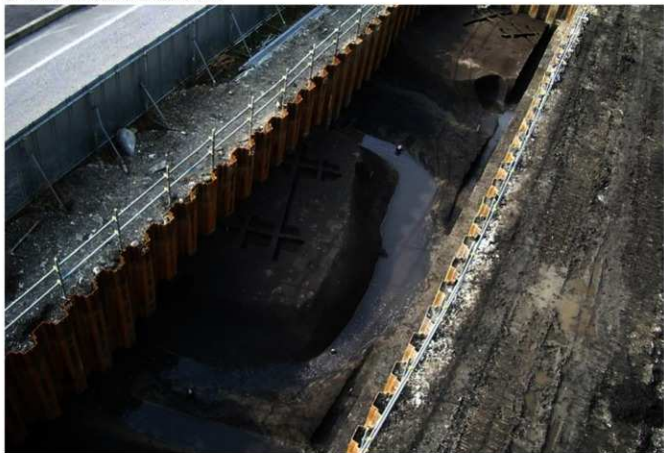
● 06Ct区 - 木棺墓 006SK







● 05Dd 区 - 中期後葉の方形周溝墓 (SZ168)



● 05Dd 区 - SZ168 盛土調査風景



















● 翡翠製装身具 (05Aa区 070SB) s361



● 勾玉 (05Cc区 SK18) s330 ●





- 鳥形木製品 (06C区 001NR 谷B) w299
- 木製有挾板 (05Ab区 108SD) w160





















